911.32
b4
K
00305670

岩波文庫
2131—2133

# 芭蕉俳諧論集

小宮豐隆
横澤三郎 編

岩波書店

岩波文庫
2131—2133

# 芭蕉俳諧論集

小宮豐隆
横澤三郎 編

岩波書店

911.32 1.24K



# 序

『芭蕉俳諧論集』は、芭蕉の俳諧に關する言說を蒐集して、出來るだけ系統的に、それを分類して見ようとしたものである。

芭蕉は作家であつて、理論家ではなかつた。然し芭蕉は、一生を俳諧に打ち込み、「此一筋につながゝ」つて、苦しみ樂しみ、工夫し修業しただけに、作家は作家でも、眞面目に深く考へた作家であつた。芭蕉の紀行・隨筆・日記・書簡・談話などの中には、その方面での芭蕉の深い體驗が隨所に滲み出てゐて、我我に實に豐富な示唆を與へる。それは單なる俳諧の領域を遙かに拔け出して、あらゆる藝術を貫通する、もしくはあらゆる生活を貫通すべき、道に觸れた言葉である。——是は言ふまでもない。

殘念な事は、これらの言葉が、すべて、折にふれ時に應じて、ばらばらに出て來るのみならず、最も多くの場合、それが纏まつた形で我我の眼に觸れる事がないといふ事である。從つて我我は、芭蕉の文藝論、芭蕉の俳諧概論、芭蕉の俳諧各論を窺ひ得る爲には、多くの時間と勞力とを費し、

国立国会図書館
28.10.16
365670

多くの把握能力と構成能力とを用意して、材料の一つ一つを丁寧に拾ひ集めなければならない。人人に、せめてその時間と勞力とを省き、芭蕉の珠玉をなるべくその場所に置く事によつて、芭蕉の考へた事を纏まつた形で知る上に、いくらかでも貢獻したいといふのが、この書の成立した所以である。

勿論この種の仕事には、ある程度の危險が含まれる。その一つは、既に人人から、確實に芭蕉自身の言説であると認められてゐるものの中にさへ、更に檢討を必要とするものが、いくらもあり得るからである。その二つは、我我が我我流に系統を立てたり分類したりする結果、我我自身の先入見や主觀がのさばり出て、芭蕉の顔を無理無理歪めて仕舞はないとも限らないからである。然し第一の危險は、材料の選擇範圍を出來るだけ內端にする事によつて、第二の危險は、分類の方法を出來るだけ大まかに且つ自然にする事によつて、相當な程度までは免がれ得られるだらうと思ふ。同項目の中で、一見矛盾するやうな二つの言葉が並ぶ場合でも、再往の熟慮によつて、それが必しも矛盾するものではない事が分かる事もあるし、またその矛盾が竟に解消する事がなかつたとしても、それは結局片方が同じ言葉を誤り傳へた事を證明する手懸りともなり得る事もあるし、かたがた分類は、それ自身の內部から自然に顯著になつて來るものによるのが、一番合理的であるに違ひない。



元來この仕事は、私一人の手で仕上げる筈であつた。然しこの四五年私の身邊は特に多事で、私は容易にこの仕事に著手する事が出來なかつた。已むを得ず私はその實行を、横澤三郎君の手に一任した。横澤君は、是まで相當長い間自分で俳句を作つた經驗を持つてゐる。のみならず横澤君は、芭蕉に興味を持ち、既に卒業論文にも芭蕉の俳諧を取り上げたほどの、若い芭蕉學者である。かういふ仕事に携はる人として、横澤君ほどに適當な人を、私は私の周圍に見出す事が出來ない。

横澤君は、或は岡崎義惠教授に相談し、或は頴原退藏教授に相談し、博搜と檢討と把握と構成とに全力を竭して、此所に是だけのものを纏め上げた。私は、この仕事に對して自分自身の寄與の幾らもなかつた事を思ふと、共に編者の名前を列べる事は、横澤君に對して氣の毒に思ふ。此所に何等かの點で誇るに足るべきものがあるとすれば、それは悉く横澤君の功に外ならないからである。——もつともかういふのは、私が編輯者としての責任を回避しようとするからではない。既に私は、分類と排列との大方針に就いても、またこれは此所に置き、あれは彼所に置くがどうかといふやうな細目に就いても、隨分相談に與つてゐる。また出來上がりの校正刷に眼を通して、若干の意見をも述べた。さういふ點でもし手落があるとすれば、それは勿論私の責任である。ただ私は、私の寄與がかういふ極めて消極的なものであるにも拘はらず、私が横澤君の積極的な功

をいくらかでも分擔するやうな形になつてゐる事を、心苦しく思ふといふのである。

昭和十四年三月二十一日

小宮豐隆



# 凡例

## その一、引用書に就いて

本書の第一資料としては、芭蕉自身の書き記せるもの、例へば芭蕉翁文集などに掲載されてゐる諸種の文章、(但し「祖翁口訣」「行脚掟」「祖翁壁書」等は、遽に信じ難い點があるので省略した。) 集の序跋、句合の判詞、連句の評、書翰等を採用した。書翰集としては、岩波文庫本、勝峯晋風編「芭蕉書翰集」が、從來のものよりよく集つてをり、良心的に編纂されてゐるので、「存疑」「假作」の部に掲載されてゐるものは省いて、これに從ふことにした。本書の引用文の出典に「書翰集」とあるのは、卽ち勝峯氏編の書翰集である。但し勝峯氏が「確實性あるもの」とされてゐるものの中にも、猶ほ檢討の餘地あるものもあるやうに思ふが、今はその餘力もないので、總て勝峯氏に從つておいた。

第二資料としては、門人及び後人の書き記せるものである。これは量の上に於ても本書の主位を占めるものであつて、左の如きものである。

「三册子」(しろさうし、あかさうし、くろさうし)、「去來抄」、「旅寐論」、(內容は「湖東問答」と殆ど變りない)、「誹諧問答青根が峯」、「雜談集」、「本朝文選」、「篇突」、「宇陀法師」、

「葛の松原」、「笈日記」、「續五論」、「俳諧十論」、「十論爲辨抄」、「歷代滑稽傳」、「けふの書」、「皺筥物語」、「俳諧猿舞師」、「三河小町」、「雪の葉」、「木葉集」、「初蟬」、「千鳥の恩」、「芭蕉盥」、「流川集」、「桃の杖」。

右のうち稍警戒を要すると思はれるものは、芭蕉の歿後支考の著した「續五論」「俳諧十論」「十論爲辨抄」等で、師の歿後、支考の態度に眞面目を缺くものがあつたが、芭蕉の言を歪曲する程不謹愼であつたとも思はれないし、それに直門の高弟の記述でもあるので採用することにした。序に記したやうな理由で一葉集の「遺語」等に採錄したものでも、省略したものは相當ある。

第三の資料は編纂もので、是は蝶夢の「蕉門俳諧語錄」だけである。而もその四分の三程は出典をつきとめ得たので、それは原典に依ることとし、出典不明のものだけ採錄した。本書の立前として、編纂ものは取扱の埒外に置いて然るべきであるが、蝶夢の態度の眞面目さに惹かれて、捨てるにも忍びず、參考として用ゐたのである。

猶本書は文字、送假名等は總て原典のまゝとし、(但し、濁點は之を補ふことにした。)通じ難いものに限り、傍書し、或は讀假名を附した。又本書は校合を目的とするものでないが、注目すべき異本のあるもの、例へば「去來抄」「初懷紙」の如きは、その重要な異同のみを明かにしておいた。



## その二、分類並びに分類項目に就いて

一の芭蕉の言葉にしても、夫れを種々なる角度から、或は種々なる觀點から考察し得る。而してそれが示唆に富む言葉であればある程、これを痛感せざるを得ない。その極端なる場合は、結局分類の不可能を意味することになるが、本書はある部立に依る體系的分類を目的とする以上、是に低徊することを許されない。依つて一の芭蕉の言葉が、如何なる觀點からより多く考察さるべきことを要請してゐるかを檢討して、夫れを何れかの分類項目に收めることにした。然し單に一つの觀點からのみでなく、二三の觀點から考察さるべきことを、强力に要請してゐる芭蕉の言葉は、これを重出してその旨を附記し、或は參照すべき文の番號を指示しておいた。

本書は前後の關係を明かにする爲、芭蕉の言葉を織り込んでゐる門人の記述も、併せて引用した。然し分類は純粹に芭蕉の言葉に依つてのみなされたものである。猶ほ同じ項に於ける順序づけは、前後の聯關を考察してなされたものであるが、稍離れてゐるものは、行をあけることにした。

既に序に述べたやうな趣旨に依り、又上述のやうな手續に從ひ、一定の分類項目の中に芭蕉の俳諧論を收めたのであるが、その各〻の項目の中に、凡そ如何なるものが包括されてあるか、又甲の項と乙の項とは如何なる關係に置かれてあるか、夫等に就いて簡單ながら說明の必要を感ず

るので、以下各項別に述べることにする。

一、心

この項には芭蕉の心を示すものを集めた。然し芭蕉の言葉の殆ど總ては、その論じてゐること の如何に拘はらず、多かれ少かれ、何等かの意味に於て芭蕉の心を反映してゐないものはない。だがこゝに採錄したものは、勿論その全般に亙るものではなく、芭蕉の「風雅」若しくは俳諧の生活的基調を示す心、特にその中の重視すべきものを集めたものである。

次の「風雅」に於ては、芭蕉の「風雅」に對する心構へを示すものも含まれてゐる。從つてこれは、「風雅」の項に於けるさうしたものとは、最も深く關聯し、同じ觀點から考察され得るものも少しとしない。又「六、俳諧一般」の「(ロ) 修行敎」の中には、俳諧を修めるについての心構へを示せるものも含まれてゐる。從つて本項は、夫等のものに對して、高次の位を保ちながらも、矢張り深い關聯を持つものである。

こゝに所謂芭蕉の「心」を知るためには、以上のものも參照していたゞきたい。

二、「風雅」

こゝにいふ「風雅」とは、芭蕉風に理解され、把握され、色づけられてゐる藝術と考へてよからう。さうした意味に於ける「風雅」の本質を論じ、「風雅」についての心構を論じたものを本項に收めた。但し「風雅」と稱して、內實は俳諧を意味してゐる場合も往々ある。夫等は固より本項から省いて、「俳諧一般」その他適當な項に收めることにした。

猶本項は前述せる如く「一、心」と深い關聯を保ち、夫れと相俟つて芭蕉の俳諧論の基底を示すものである。

三、「不易流行」

次いで本項には、蕉門俳諧の根本的理念としての「不易流行」についての論を採錄した。然し「不易流行」についての論が盛になつたのは、芭蕉の歿後であつて、門人の記述の中にも、之についての芭蕉の言葉を示してゐるものは極めて少い。依つて本項には、僅に殘されてゐる芭蕉の言葉以外に、門人の議論の中比較的重視すべきものを(參考)として採錄し、芭蕉の「不易流行」についての考を窺ふよすがとした。

猶ほ本項に收めたものは、「不易流行」或は「不易」「流行」を當面の主題として論じてゐるものだけであつて、他の項に配置されてゐるものにしても「不易流行」、或は「不易」「流行」の觀點から考察さるべきものは相當あり得るわけである。

四、「虛實」

前項と同じ意味に於て「虛實」の項を掲げ、それに關するものを纏めた。猶ほ芭蕉に於ては、「虛實」と「花實」とを關係づけて說かれてゐる場合が多い。本來「花實」は、「虛實」と別個に考ふべき主題かもしれぬが、少くとも芭蕉の頭の中では、兩者が一つの聯繫の下に認識されてゐ

たやうに思はれる。依つて「虚實」の項の中に「花實」に關するものも採録した。

五、「さび、しをり、ほそみ」

蕉門俳諧の美的理念としての「さび、しをり、ほそみ」に關するものを本項に收めた。「さび、しをり、ほそみ」は、蕉門俳諧の特質を探求する主題として、夙にとり上げられ、論究され來つたものではあるが、これも亦「不易流行」同樣、芭蕉自身の言説は少い。依つて門人の説の中、比較的重視すべきものを（參考）として掲げることにした。

六、俳諧一般

本項には「發句」「連句」の一般に亙る芭蕉の言説を採録した。此の立前に從へば、「三」「四」「五」も本項に含めるのが當然かもしれぬが、「三」「四」「五」は蕉門俳諧の根本的理念であると同時に、廣く日本的な藝術特色の主題としても、とり上げらるべきものであるので、別項としたのである。又「九、作法」にも、發句連句共通の事項が含まれてゐるが、之については「九」の説明に述べることにする。

（イ）本質論

俳諧の本質本領、或は新しき俳諧、自門の俳諧の本質本領、夫等に關する芭蕉の言説を本項に纏めた。而してこゝにいふ本質とは、當時の言葉に從へば「本意」であり、今日の言葉に從へば、特質と言ひ變へても差支なからう。



猶ほ本項の「六四」以下は、俳諧の變遷についての芭蕉の所論や、歴史的觀點に立つて過去現在未來の俳諧について、芭蕉が所見を述べてゐるものを纏めておいた。「不易流行」の立場から言へば、前者（「六三」以上）は「不易」の立場から、後者（「六四」以下）は「流行」の立場から考察されるものが多からうと思ふ。

（ロ）「修行教」

本項の名目は、「去來抄」の「修行教」をとり用ゐたものであるが、こゝに纏めたものは、俳諧一般に亙る制作指導に關する芭蕉の所説である。而して本項に收めたものには、既に「一」の説明に述べた如く、「心」に關聯するものがあり、それは主として後の方に掲出されてある。又その主要なるものは「七、發句」の「（ロ）句作論」と特に深い關係を持つてゐる。言はゞ本項に收めたものは、「句作論」の基礎的な論が多い。

（八）個人評

本項には芭蕉の先輩に屬する俳人、或は門人、或は自己の、一般的な俳風特色等を論じてゐるものを一括した。個々の作品を論じてゐるものも、結局その作者を論じてゐることにもなるが、それは主として「七、發句」の「（八）句評」「八、連句」の「（ロ）附句評」に收めてある。是に掲出されてあるものは、個々の作品に即してゐるものではなく、假令又、作品が示されてあつても、それを通して、その作者の一般的なものを論じてゐるものである。

讀、餞の辭、集の序跋等に於ては、その文の性質として、多少過褒になることは止むを得ぬことであつて、そのことは念頭において讀んでいたゞきたい。

七、發句

本項は言ふまでもなく、發句に關するものを一括したのであるが、季語に關するもの、切字、テニヲハに關するもの等は、「九、作法」に纏めておいた。以下本項に屬する各項について、簡單に說明する。

（イ）風體論

こゝに言ふ「風體」とは、歷史的樣式を意味し、或は體系的樣式を意味する「風」及び「體」ではなく、「樣姿」といふやうな概念に近接してゐる「風體」である。卽ち發句の「品等」「位」「姿」「體」等に關する芭蕉の言說を纏めたものであつて、「風」「體」と分けて考へる時は、「體」に屬する問題と言へる。而して本項に收めたものは、廣い意味に於ては、次の「句作論」に合流し得るものが大部分であるが、論の主題に依つて別項としたのである。

（ロ）句作論（クツクリ）

本項には言ふまでもなく、句作に關する論を一括したのであるが、本項と「六、俳諧一般」の「（ロ）修行敎」との關係、及び前項の「風體論」との關係については、夫々「修行敎」「風體論」の項に於て述べたから、參照していたゞきたい。



猶本項の後の方の部分には、題に依る所の句作の論、等類、字餘りの論等、特殊問題に關するものを纏めておいた。

（ハ）句評

この項には芭蕉の發句評を纏めたのであるが、芭蕉の發句評は本項ばかりではなく、前項の「風體論」「句作論」にも多く見出されるし、「六、俳諧一般」の項にもないことはない。然し夫等は何れも、論の趣旨として、そこに引かれてゐる句だけに限局してゐるものではなく、言はゞその句を通して一般的な問題を論じてゐるものである。それに對して本項に收めたものは、何れかと言へば、その所論が、そこに引かれてゐる句に限局されてゐるものである。

排列の順は、春夏秋冬として、次に二句以上を共に評してゐて季の跨つてゐるもの、及び雜の句を收めた。そしてその後には季別には依らず、改作推敲の句、次に冠を据ゑ、若しくは冠を改作推敲せる句、次に等類の句といふやうな順で、夫等についての芭蕉の評語を纏めた。そして最後に芭蕉の句合評「貝おほひ」「十八番句合」「田舍の句合」「常盤屋の句合」「續の原」等をそのまゝ收めた。本項はその量に於て、最も大いなるものである。

八、連句

連句に關するものを一括し、之を「附合論」「附句評」に分けた。歷史的に正しく言へば、俳諧とすべきであるが、俳諧は總括的な名義として用ゐたので、混同を避け、今日の用語に從つて連

句とした。

（イ）附合論

本項の附合の名義は二様に用ゐられてゐる。一は連句と同義であつて、即ち本項には先づ連句の總括的な抽象論を掲出した。但し連句の式に關するもの、即ち連句の形式論は、「九、作法」の項に一括した。

凡例

次に附合の本來の意義に從つて、前句に後句をつける附心——蕉門の附合の理念である所の「にほひ」「うつり」「ひゞき」「走り」「俤」等に關する論、その他附合について示された芭蕉の言葉を收めた。而して本項に收めたものは、概して抽象論であつて、個々の作品に即しての附方の心得は「（ロ）附句評」に讓つてある。又式に關するものは、前と同樣「九、作法」の項に纏めた。

（ロ）附句評

本項には、個々の附句に對する芭蕉の評語を纏めたのであるが、前項に述べた如く、その評語の中には、附方の心得を示してゐるものが少くない。然し又、附句を單に一句立として評してゐるものもあり、夫等は後に廻した。最後に「初懷紙評註」「山中三吟評語」等を、そのまゝ掲載しておいた。

九、作法



「作法」は即ち「つくり方」であるが、然し本項の名義として用ゐた「作法」は廣く「つくり方」を意味するのではなく、俳諧の形式上の作法に限局してゐるのである。即ちその收むる所は、連句の式に關する總括的所見、式の問題としての「戀」「花」「月」「釋教」のこと、或は差合のこと等々。次いで主として發句に關するものとして、季及び季語のこと、切字のこと、發句連句共に關係のある「てにをは」のこと等である。

以上の如く、本項は發句連句の何れにも關するものであつて、「六、俳諧一般」の中の一項とすべきものゝやうにも思はれるが、形式上の問題をとり扱つたものとして、之を別項としたのである。

凡例

一〇、雜

本項に收めたものは、俳諧論としては直接關係のないものであるが、捨て去るには惜しいので、參考までに掲げたのである。歌に關するものが相當あり、その他、詩、文章、俳名、俳書の名等雜多のことに亙つてゐる。然し分量としては、餘り多くはない。

昭和十三年十一月

横澤三郎

# 追記

此度本書を再版するに當つて、初版の誤を正し、索引を増補した。猶本書に收めた芭蕉の書翰は、凡例に於いて述べたやうに、岩波文庫本勝峯晋風編「芭蕉書翰集」中の、編者が「確實性あるもの」としてをられる書翰のみを採用したのであるが、其後考證の結果、その中にも僞作と斷じて然るべきもの、或は疑はしいものを見出した。一二〇頁「二二六」、一二一頁「二二八」、一二五頁「二四三」等の書翰は僞作、五八頁「八一」、八六頁「一三六」、一二八頁「二四八」、一三七頁「二七二」等の書翰は疑はしいものと考へられる。本書を用ゐられる方の御留意をお願ひする。編者は本書を完全なものにしたいと心がけてゐるのであるが、猶且つ誤りや不備の點があらうかと惧れてゐる。大方の御注意を頂ければ幸である。

昭和二十六年二月

編者



# 目次

序……三
凡例……七
追記……一八
一、心……二一
二、「風雅」……二六
三、「不易流行」……二八
四、「虚實」……三八
五、「さび、しをり、ほそみ」……四一
六、俳諧一般……四五
（イ）本質論……四五
（ロ）「修行教」……五七
（ハ）個人評……七三

七、發句……八九
（イ）風體論……八九
（ロ）句作論……九二
（ハ）句評……一一一
八、連句……二一五
（イ）附合論……二一五
（ロ）附句評……二三五
九、作法……二五五
一〇、雜……二七五
一一、追補……二八一



索引
索引に就いて……二八七
語句索引……二九一
句索引……三〇一



# 一心

「一」

つら〳〵年月の移りこし、つたなき身のとがをおもふに、一たびは仕官懸命の地をうらやみ、ある時は、佛籬祖室のとぼそにいらむとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫、生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみかならずやとおもひ捨てふ心しぬ。

先たのむ椎の木も有夏こだち

（幻住庵の記）

「二」

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置りといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、哀なるかた〴〵もおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關ももる人なくば、いかなるあやまちをか仕出てむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀

なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事一夜の夢のごとし。五十年。六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝をきしたるね覺の分別、なに事をかむさぼる。おろかなる者は思ふことおほし。煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに當て、貪慾の魔界に心を怒し、瀞溢におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破布し、老若をわすれて閑にならむこそ老の樂とは云べけれ。人來れば無用の辨有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには、友なきを友とし、貧を富りとして五十年の頑夫自書、自禁戒となす。

（閉關之說全文）

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　はせを

「三」

此夜深更におよびて介抱に侍りける呑舟をめされて、硯の音のから〳〵と聞えければ、いかなる消息にやとおもふに

病中吟

旅に病で夢は枯野をかけ廻る　翁

その後支考をめして、へなをかけ廻る夢心　といふ句づくりあり。いづれをかと申されしに、その五文字は、いかに承り候半と申ば、いとむつかしき夏に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとり候半と答へける也。いかなる不思儀の五文字か侍らん、今はほいなし。みづから申されけるは、



はた生死の轉變を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執といましめ給へる、たゞちは今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへすゞくやみ申されし也。さばかりの叟の辭世は、などなかりけると思ふ人も世にはあるべし。（笈日記。「句評」に重出）

註。此夜とは十月八日夜のこと。猶「旅に病で」の句については「枯尾花」にも見えてゐるが、「笈日記」に盡きてゐるので、「枯尾花」は省いた。

「四」

師常に我をわすれず、心遣ひあると也。或方にて貴人師を座上に請待せらるゝ事しきり也。師の曰、此所似合の所と落着申也。席過侍れば心しづかならず、俳諧の障に成侍るの間心まゝにと願ふ也。尤の事也。又ある旅行の時門人二三子伴ひ出られしに、難波のすこしこなたより駕おりて、雨の薦に身をなして入り申さるゝと也。その後此事をとへば、かゝる都の地にては、乞食行脚の身を忘れて成がたしと也。駕をかるに價を人のいふ如くに毎も成し侍る也。（くろさうし）

「五」

師ある方に客に行て、食の後、蠟燭をはや取べしといへり。夜の更る事眼に見へて心せはしきと也。かく物の見ゆる所、その自心の趣俳諧也。つゞいていはく、いのちも又かくのごしと也。

無常の觀、猶亡師の心なり。（くろさうし）

「六」

あるとしの旅行、道の記すこし書るよし物がたりあり。是をこひて見むとすれば、師のいはく、さのみ見る所なし。死て後見侍らば、是とても又あはれにて見る所もあるべしと也。感心なる詞也。見ざれどもあはれふかし。（くろさうし）

「七」

花にうき世我酒白く食黒し

此ほ句のこゝろに身持可レ被レ成と存候。（書翰集、任口宛の一部。天和三年）

「八」

世道俳道是又二つなき處にて御座候。（書翰集、與幽・虚水宛の一部。貞享年中）

「九」

先師曰、俳諧はなくてもありぬべし。たゞ世情に和せず、人情に達せざる人は、是を無風雅第一の人といふべし。（續五論、跋）

「一〇」



ある門人の事をいひて、かれかならず此道にはなれず、取付侍るやうにすべし。はいかいはなくてもあるべし。たゞ世情に和せず人情通ぜざれば人不レ調、まして宜友なくてはなりがたしと也。又いはく、人是非に立る筋多し。今其地にあるべからずと、恨あるべき人の方にも行かよひ、老後には心のさはりもなく見え侍る事あり。（くろさうし）

## 二「風雅」

「一一」

西行の和哥における、宗祇の連哥における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道す(ママ)る物は一なり。しかも風雅におけるもの造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花(かたち)にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。(笈の小文)

「一二」

吾これを聞けり。句に千歳不易のすがたあり。一時流行のすがたあり。これを兩端におしへたまへども、その本一なり。一なるは、ともに風雅のまことをとれば也。(誹諧問答青根が峯、贈晋氏其角書。「不易流行」の一部を重出)

註。「あかさうし」に同旨の文がある。

「一三」

師の曰、乾坤の變は風雅のたね也といへり。靜なるものは不變の姿也。動るものは變也。時と



してとめざればとゞまらず。止るといふは見とめ聞とむる也。飛花落葉の散亂るも、その中にして見とめ聞とめざればおさまることなし。その活たる物だに消て跡なし。(あかさうし)

「一四」

夫風流に心をとめて、其四季にともなふもの、濱の眞砂の盡せぬ詠ならめ。其情を述て其ものをあはれむ人は、こと葉の聖也。されば文明のころ、其道さかんなりし聖たちの言葉、今の掟となりて、其實なる事、今の人のすさむ事かたかるべし。されども風雅の流行は天地とゝもにうつりて、只つきぬを尊ぶべき也。(「三聖人の圖」の前半。全文「個人評」に重出)

「一五」

そも〳〵風雅はなにの爲にするといふ叟ぞや。孔子の三百篇は、草木鳥獸のいぶしき物をしらしめ、倭には三十一字をつらねて、上下の情にいたらしむ。その詩哥にもらしぬる草木鳥獸の名をさして、高下を形容せむものは、いまの風雅これなるべし。しかるに俳諧といふ文字は、史には不根の持論といへりければ、諧ノ言(コト)は吾しらず、この比その名をあらためむ叟を阿叟に申侍れば、古今集は已に俳諧の名を立たり。いまの者これをせむ叟よからず。是故に韓子が晝寢も魯論はけづらず、華嚴の犬瑠璃も、その奥にしるしたり。俳諧は世の變相にして、風雅は志の行ところなりと、吾がともがら是なからむや。(葛の松原。「俳諧一般、本質論」の一部分を重出)

## 三「不易流行」

「一六」

吾これを聞けり。句に千歳不易のすがたあり。一時流行のすがたあり。これを兩端におしへたまへども、その本一なり。一なるは、ともに風雅のまことをとれば也。不易の句をしらざれば本たちがたく、流行の句をまなびざれば風あらたまらず。よく不易を知る人は、往々にしてうつらずと云ふことなし。たま〳〵一時の流行に秀たるものは、たゞおのれが口質のときに逢ふのみにて、他日流行の場にいたりて一歩もあゆむことあたはずと。（誹諧問答青根が峯、贈晋氏其角書。「其角評」の一部を重出。前部「風雅」に重出）

註。「菊の香」に同旨の文がある。

「一七」

（參考）師の風雅に萬代不易有。一時の變化あり。この二ッに究り、其本一なり。その一といふは風雅の誠也。不易をしらざれば實に知れるにあらず。不易といふは新古によらず、變化流行にか〻わらず、誠によく立たる姿也。代々の哥人の哥を見るに代々その變化あり。又新古にもわたらず、今見る所むかし見しにかはらず、あはれなる哥多し。是先不易と心得べし。また千變萬化するものは自然の理なり。變化にうつらざれは風あらたまらず。是に押移らずと云は、一端の流行に口質時を得たる斗にて、その誠をせめざる故也。せめず心をこらさゞるもの誠の變化を知ると斗云事なし。唯人にあやかりて行のみ也。せむるものはその地に足をすへがたく、一歩自然に進む理也。行末いく千變萬化するとも、誠の變化は皆師の俳諧也。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の押移如く物あらたまる。皆かくのごしとも云り。（あかさうし）



不易流行

「一八」

（參考）去來曰、蕉門に千載不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つにわけて教給へども、其元は一なり。不易をしらざれば、基立がたく、流行をしらざれば風新にならず。不易は古に宜しく後に叶ふ句なる故に、千歳不易といふ。流行は一時〳〵の變にして、きのふの風は今日宜からず、今日の風は翌日に用ゐがたきゆゑ、一時流行とは、はやるとをいふなり。（去來抄、修行教）

「一九」

（參考）魯町曰、不易流行其元一なりとはいかに。去來曰、此事辨じがたし。有增人體にたとへていはゞ、不易は無爲の時、流行は坐臥・行住・屈伸・伏仰の形同じからざるが如し。一時一時の變風是也。其姿は時に替るといへども、無爲も有爲も、もとは同じ人也。（去來抄、修行教）

「二〇」

（參考）俳諧に不易・流行と云事あり、此二躰の外はなし。近年不易・流行ニ自縛して、眞ンの俳諧血脈の筋を取失ふ。あるひは不易がよし、又は流行すぐれたりなど云やからもあれ共、曾て甲乙はなし。血脈相續して出生すれば、不易・流行の形はおのづから備はり、男と成、女となる如く、口より出ると等し。千里をはしる物也。あながちに不易・流行を貴とする物にはあらず。萬葉・古今より相續したる血脈あり。師。此血脈を發明して世上に廣め給ふ。後世の學者、よく此血脈を見屆て、芭蕉流血脈の門人と成べし。（篇突）

「二一」

（參考）答云（去來）、蕉門の徒、不易・流行を云もの諸〻あり。許六と去來、此事を論ずるに此二ッ並びて貴きものに非ずといへり。今此集にあながちの二字にかへられたり。定て故あらん。又血脉相續して出生すれば、不易・流行の形は自ら爰に至らん。是を貴しとする故は、其血脉を相續せんために是を貴む也。又一段是を習ひ得たる人あらん。不易は不易なれば、一度是を得て二度改め學ぶに不レ及、流行は時に流行すれば、その變ずる場にいたり爰を學ざれば師の流行にあらず。師の流行にあらずとも、己が一風を建立して、而もその風宜敷侍らんは、是また名譽の人なるべし。たゞ師の流行におくれて止らん人は、終に古風の名を取べし。今許六の論を見れば、月を見て指を廢する者に似たり。如レ此は悟道の上也。是に至ては不易・流行の二ッのみに不レ限、



何をとらへて貴しとせんや。佛を呵し祖を罵るも此謂か。退て思ふに不易・流行は大事の物に非ず、六ヶ敷事にあらず、數有ものに非ず、隱れたる物に非ず、今日はじまりたる事に非ず、たゞ正風と變風の名也。しかれども古人爰をいふものなし。先師始て二ッを分て示し給へり。門人しらずんば有べからず。（旅寐論）

「二二」

（參考）雅兄の今日、先師にまなび給ふ所は、古今の風をわかず、これをまなびたまふや。また先師の今日の風をまなびたまふや。もし今日の風を學びたまはゞ、これ流行を貴び給ふにあらずして何んぞや。むかしは先師の昔日の流行を學びたつとみ、今日は今日の流行をまなび貴む。その流行にしたがはざるときは、先師の風におくるゝものはその旨を得ず、故に流行を貴む。雅兄今これを貴まずといへども、心裏に覺へずして、これをたつとむ人なるべし。（誹諧問答青根が峯、答許子問難辨）

不易流行

「二三」

（參考）惣別俳諧といふもの、不易・流行の二ッならでは外に何といふ事もなし。此二ッに極る。不易にあらざれば流行也。流行の姿なければ不易也。此二ッの姿をはなれて句といふもの曾てなし。不易・流行二ッに極るといふは、おの〳〵や我〻の上の事也。世上雜誹の上を論ずる事に非ず。（誹諧問答青根が峯、自讃論之上）

「二四」

（參考）苦案するものは、先趣向をあんず。趣向やう〳〵至りて、句作りをおもふ。句ならんとするとき、或は新古の風の出來る、その古風なるものは、幾度も掃ひすてゝ、たゞ新風にかなはむとす。新風やう〳〵いたりて句定まる。しかれば流行をおもふ事は、趣向の後、句の前といはんか。これ平生の案姿なり。また不易は、一たびこゝろに得て、へんずる事なし。故に流行のごとく、切におもひ、切にすてず。平生のはなれざるものなり。流行の句をあんずるうち、あるひは不易のすがたつかみ來れば、則とつてもつて句とす。これ舊染の風のごとく、去りきらふる物にあらず。平生の句案は、たゞ舊染と新風と、秀句あらんことをおもふ。不易流行を用捨するにいとまあらず。（誹諧問答青根が峯、答許子問難辨）

「二五」

（參考）魯町曰、先師も基より出ざる風侍るにや。去來曰、奥州行脚の前はまゝあり。此行脚のうちに工夫し給ふと見えたり。行脚のうちにも、あなむざんやな甲の下のきり〴〵すといふ句あり。後にあなの二字を捨られたり。是のみにあらず、異體の句などもはぶき捨給ふもの多し。此年の冬、はじめて不易流行の教を說給へり。魯町曰、不易流行の事は古說にや、先師の發明にや。去來曰、不易・流行は萬事に渡る也。しかれども、はいかいの先達是をいふ人なし。長頭丸已來手を込る一躰久しく流行し、へ〳〵角樽や傾けのまふ丑のとし　花に水あげて咲せよ天龍寺　といへるまでに吟じたり。世の人、はいかいは斯の如き物とのみ心得つめぬれば、其風を變ずる事をしらず。宗因師一度其こりかたまりたるを打破り、新風を天下に流行し侍れど、いまだ此教なし。しかりしよりこのかた、都鄙の宗匠達古風を用ず、一旦流々を起せりといへども、又其風を長くおのが物として、時々變ずべき道をしらず。先師はじめて俳諧の本體を見つけ、不易の句を立、また風は時々變ある事をしり、流行の句變ある事を分ち教給ふ。（去來抄、修行教）

「二六」

不易流行

（參考）去來曰、蕉門に不易流行の說〳〵あり。或は今日一句〳〵の上を云說あり。是も流行にあらずといひがたし。然ども不易流行の教といふは、はいかいの本體一時〳〵の變風との事也。（去來抄、修行教）

「二七」

（參考）魯町曰、不易の句の爲（異本句は）はいかに。去來曰、不易の句は俳諧の躰にして、いまだ一の物數寄なき句なり。一時の物數寄なき故に古今に叶へり。たとへば、

月に柄をさしたらばよき團（うちは）かな　宗鑑

これは〳〵とばかり花のよし野山　貞室

秋の風伊勢の墓原猶すごし　芭蕉

是等の類也。魯町曰、月を團に見立たるも物數寄ならずや。去來曰、賦・比・興は俳諧のみにか

ぎらず、吟詠の自然なり。凡吟にあらはるゝもの此三つをはなるゝ事なし。物數寄とはいひがたし。（去來抄、修行敎）

「二八」

（參考）魯町曰、流行の句はいかに。去來曰、流行の句は、おのれに一ッの物數寄ありてはやる也。形容・衣裝・器物等にいたるまで、時々のはやりあるが如し。たとへば、

むすやうに夏にこしきの暑さかな　松下

此躰久しく流行す。

あれは松にてこそ候へ　異本（枝の雪）まきの雪　常矩

海老肥て野老瘦たるも友ならなむ

或は手をこめ、あるひは歌書の詞づかひ、又は謠の詞とりなどを物數寄したるあり。是等も一時に流行し侍れど、今日は取上る人なし。魯町曰、むすやうに夏にこしきといふは緣にあらずや。去來曰、緣は歌の一事にして、物數寄にはあらず。手を込ると緣とはかはりあり。（去來抄、修行敎）

「二九」

（參考）丈艸曰、不易の句も、當時其體を好みてはやらば、是も又流行の句といふべき也。（去來抄、修行敎）



「三〇」

（參考）躰と風とはたがひあり。まづ流行は風なり。十躰は躰なり。躰は古今に押わたりて用捨なし。風はときに用捨あり。萬葉風・古今の風・新古今の風のごとし。また國風あり、一人の風あり。流行はときの風なり、故に一時流行といふ。また不易は、古今によろしくして用捨なし。これを躰といはんも又しかし。しかれども躰はおのれ一躰有風なし、風を時々の風による。不易萬の躰をそなへて、一己の風有り。故に風はときぐにによらず、ときぐの風によらざるゆへに古今にかなへり、故に千歲不易なり。風といはずんばあるべからず。（誹諧問答青根が峯、答許子問難辨）

「三一」

（參考）不易・流行は別の物にあらず、たゞ風の名也。その變ずる所あるを一時と云、變ぜざる物有を不易とわかつのみ。しかれども古人これを云ふ誹師なし。先師始て、古來の俳諧、そのふたつ有を見て、これをわかつて門人にしめす。しめしたまふ名は先師にはじまるといへども、實は句と一ときに生るものなり。先師なんぞみづから作爲して、門人をあざむき給はんや。（誹諧問答青根が峯、答許子問難辨）

「三二」

十五章の問答に、風と躰とのふたつ、問ひこたへ聊か相違ある事。予聞師の雑談、折ふし不易・流行の事いでたり。千歳不易の躰・一時流行のていとはのべたまへり。不易の風・流行の風とはついにきかず、よく明して一生のまよひをてらしたまへ。（誹諧問答青根が峯、再呈落柿舍書）

「三三」

（参考）予がいはく、風はうごきにして枝葉なり、體は根にして古今をつらぬく。宗因の風はすたれども、誹諧の體は世にさかんにのこり、信德の風はとらねどもその體は相續して、あらぬ嶋々まで俳諧せぬものもなき世になり、今の不易・流行は俳諧の體なり。きのふの流行はすたれども今日の流行あり、今日の流行はすたれども明日の流行に富めり。これ枝葉はうごくといへども、まつたく根のうごかざる事を知れり。しかれば不易流行は體と云はん歟。また先生の風といへるも一理なきにはあるまじ。不易・流行は亡師の風と云はゞ風ともいふべきか。芭蕉風のうちに不易・流行は體なり。（誹諧問答青根が峯、再呈落柿舍書）

「三四」

（参考）新みは俳諧の花也。ふるきは花なくて木立ものふりたる心地せらる。亡師常に顧にやせ給ふも新みの匂ひ也。その端を見しれる人を悦て、我も人もせめられし所也。せめて流行せざれば新みなし。新みは常にせむるがゆへに、一歩自然にすゝむ地より顯るゝ也。名月に麓の霧や田のくもり　と言は姿不易なり。花かと見へて綿畠　とありしは新ミ也。（あかさうし）

「三五」

（参考）應〳〵といへど敲くや雪の門　去來

丈艸曰、此句不易にして流行のたゞ中を得たり。支考曰、いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰、たゞ先師の聞給はざるを恨るのみ。（去來抄、同門評）

不易流行

「三六」

（参考）不易發句の事、翁の句に

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

此句景曲第一なり。しかれども新古の叟、いぶかしくて數篇吟じ返し、大きに驚き、初て此風の血脉を得たり。これ正風躰たるべし。（誹諧問答青根が峯、自得發明辨）

「三七」

（参考）白雨や戸板おさゆる山の中　助童

去來曰、此句初學の工案ながら、句躰風姿あり、語路滯らず、情ねばりなく事あたらし。最當時流行のたゞ中也。（去來抄、同門評）

## 四「虚　實」

「三八」

第九番　　農夫

左持　　野人

壁の麥葎千年をわらふとかや

右

摺鉢の早苗穂に秋社あらめ

壁に生る麥は、朝菌の晦朔をしらず、冥靈大椿を論ずるに似たり。又摺鉢の早苗に秋おもふ事、かの、二葉ふくだに荻の上風とよみ給ふ心もをのづから也。左は虚也。右は實、花實いづれをかとらん。（田舍の句合、句評の一部を重出）

「三九」

むかしより筆をもてあそぶ人、おほくは花にふけりて實ヲそこなひ、實を好て風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實猶くらひつべし。（「蓑虫跋」の一部。「個人評」の素堂評を重出）

「四〇」



漕ゆく船のあと見ゆるまでといへるは、花多して實すくなしとや。されば誹諧もとは粧ふのみにて、其ひとすじにいづる事かたしとは、蕉翁の云へるなり。（已が光、序の一部）

「四一」

栗とよぶ一書、其味四あり。

李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句、見るに遥にして聞に遠し。佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。

戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金鑄二小紫一、上陽人の閨の中には、衣桁に蔦のかゝるまで也。下の品には眉ごもり親ぞろひの娘、娶・姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。

其ノ話震動虚實をわかたず。寶の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を冶ふ。是必他のたからにあらず。汝が寶にして後の盗人ヲ待。

天和三癸亥年仲夏日　　芭蕉洞桃青鼓舞書

（みなし栗集跋。「俳諧一般、本質論」に重出）

「四二」

翁の曰ゝ、俳諧といふに、三ッ品あり。寂莫はその情をいへり。女色美肴にあそびて、麁食の

さびをたのしみ、風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繡に居て、薦着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は、虚に居て實をおこなふべし。實に居て虚にあそぶ事はかたし。此三ッの品は、ひくき人に、高き所をいふにはあらず。高き人の、ひくき所をいふなりとぞいへる。

（風俗文選、陳情表。「俳諧一般、本質論」に重出）

「四三」

吾翁は虚に居て實をおこなふべし。實に居て虚にあそぶべからずとは、白馬の法の第一義にして、人のとゞまる所をいへる大學の綱領ならざるや。（俳諧十論、第四虚實論）



## 五　「さび、しをり、ほそみ」

「四四」

（參考）去來曰、（上略）およそさびしほり、風雅の大切にして、わするべからざるものなり。しかれども隨分の作者も、句〻さびしほりを得がたからん、たゞ先師のみこれあり。今日われらのごとき作者、なんぞさびしほりのなき句をいとひすてんや。これを常にねがふといはんはむべなり。またあるはなきにましたりといはんはよし。これをいとひすてんは過たるならん。かくのごとく論ぜば、われらたゞ口をつゝまんにはしかじ。また壯年の人の句は、さびしほり見へざるも、かへつてまたよしと言はんか。また初心の作者は、さびしほりを容易にとくべからず。かへつて其吟口とぢて、新味にうつりがたし。これ先師のおしへなり。また曰、しほりさびは趣向・ことば・器の閑齊なるを言ふにあらず。さびとは、さびしき句は異なり。しほりといふは、趣向詞器の哀憐なるを言ふべからず。しほりと憐なる句は別なり。たゞうちに根ざして、外にあらはるゝもの也、言語筆頭をもつて、わかちがたからん。强てこれをいはゞ、さびは句のいろにあり。しほりは句の餘情にあり。しかれども趣向もことばも器も、又ゑらばずんばあるべからず。詞器よしといふとも趣向つたなからば、無鹽が面に、西施が鼻をそへたるがごとくならずんば、ま

た梅の花のうへに、粉をぬりたるにおなじからん。豈これかほよし、芳ばしといわんに人位せんや。（誹諧問答青根が峯、答許子問難辨）

註。大體は芭蕉の趣旨を傳へてゐるものと考へられるが、芭蕉の趣旨そのまゝとは考へられない。依つて（參考）として掲げた。

「四五」

野明曰、句のしをり・細みとはいかなるものにや。去來曰、しをりは哀なる句にあらず。細みはたよりなき句にあらず。しをりは句の姿にあり、細みは句のこゝろにあり。是も證句をあげていはゞ、

十團子も小粒になりぬ秋の風

先師曰、此句しをりあり。

鳥どもも寐入てゐるか余吾の海

先師曰、此句細みありと評し給ひしと也。

去來曰、惣じてさび・位・細み・しをりの事は以心傳心なれば、唯先師の評をあげて敎るのみ、他はおして明むべし。（去來抄、修行敎）

「四六」



野明曰、句のさびはいかなる物にや。去來曰、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば老人の甲冑を帶し戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老の姿有が如し。賑かなる句にも、靜なる句にも有ものなり。たとへば

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。（去來抄、修行敎）

「四七」

（參考）御命講やあたまの靑き新比丘尼　　許六

去來曰、七字斯いひくださんはいかゞ。是を直さば一句しをり出來らん。許六曰、しをりは自然の事也、求て作すべからず。是は七字を以て發句となる也。其角もさこそと評し侍る。（去來抄、同門評）

「四八」

師のいはく、或人の句は艶をいはんとするに依て句艶にあらず、艶は艶いふにあらず。又或人の句はしほりなし。しほらんずるが故にしほりなし。又或人の句は作に過て心の直を失ふ也。心の作はよし、詞の作好べからずと也。（くろさうし。「句作論」に重出）

「四九」

去來曰、先師は門人に敎給ふに、其とば極（きはまり）なし。予に示し給ふには、句毎〻にさのみ念を入る

物にはあらず。又句は手づよく俳意たしかに作べしと也。凡兆には一句わづかに十七字なり、一字もおろそかに置くべからず。俳諧もさすがに和歌の一體なり、句にしをりの有やうに作るべしとなり。（去來抄、修行敎。「修行敎」の一部を重出）



# 六 俳諧一般

## （イ）本質論

「五〇」

そも〳〵風雅はなにの爲にするといふ叟ぞや。孔子の三百篇は、草木鳥獸のいぶしき物をしらしめ、倭には三十一字をつらねて、上下の情にいたらしむ。その詩哥にもらしぬる草木鳥獸の名をさして、高下を形容せむものは、いまの風雅これなるべし。しかるに俳諧といふ文字は、史には不根の持論といへりければ、諧ノ言（コト）は吾しらず、この比その名をあらためむ叟を阿叟に申侍れば、古今集は已に俳諧の名を立たり。いまの者これをせむ叟よからず。是故に韓子が畫寢も魯論はけづらず、華嚴の犬瑠璃も、その奥にしるしたり。俳諧は世の變相にして、風雅は志の行ところなりと、吾がともがら是なからむや。（葛の松原。一部分「風雅」の項に重出）

「五一」

芭蕉庵の叟（ワキナ）、一日嗒焉（たふえん）トシテうれふ。曰ク風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし。一回は皂狗（そうく）となり、一回は白衣となつて、共にとゞまれる處をしらず。かならず中間の

一理あるべしとて、(下省)(葛の松原。「句評」より一部重出)

「五二」

栗とよぶ一書、其味四あり。

李杜が心酒を嘗て、寒山が法粥を啜る。これに仍而其句、見るに遙にして聞に遠し。佗と風雅の

その生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也。

戀の情つくし得たり。昔は西施がふり袖の顔、黄金鑄二小紫一、上陽人の閨の中には、衣桁に蔦の

かゝるまで也。下の品には眉ごもり親ぞろひの娘、娶・姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌

舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。

其ノ話震動虚實をわかたず。寶の鼎に句を懍て、龍の泉に文字を冶ふ。是必他のたからにあらず。

汝が寶にして後の盜人ヲ待。

天和三癸亥年仲夏日　芭蕉洞桃青鼓舞書

(みなし栗集跋。「虚實」に重出)

「五三」

(先師)又いはく、春雨の柳は全躰連歌也。田にし取烏は全く俳諧也。五月雨に鳰の浮巣を見に行くと

いふ句は、詞にはいかいなし。浮巣を見にゆかんと云所俳也。又霜月や鴻のつくづくと双居て　と



云發句に、多の朝日のあはれ也けり　といふ脇は、心・詞ともに俳なし。ほ句をうけて一首の如

く仕なしたる處俳諧なり。詞に有んに有。(詞に有、心に有カ)其外この句の類作意に有、信所一筋に思ふべからずと

也。(しろさうし。一部分「附句評」に重出)

「五四」

砌に高き去年の桐の實　文鱗

(上略)桐の實見付たる、新敷俳諧の本意かゝる所に侍る。(初懐紙、脇の評。「附句評」の一

部を重出)

「五五」

予が風雅は夏爐・冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かり

そめに云ちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしも

のにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ侍しとかや。さればこの御こ

とばを力として、其細き一筋をたどり、うしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人の求た

る所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じと云て、燈をかゝげて、

柴門の外に送りてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末　風羅坊芭蕉述

（許六離別詞後半。前半「個人評」の「許六評」に掲出）

註。「本朝文選」には「柴門辭」として掲出されてある。

「五六」

遺稿ノ夜話に、むかし嵯峨の落柿舍にあそびて談笑のついでに、都には蕉門の稀なる事をなげきしに、故翁は例の笑ひ〳〵、我家の俳諧は京の土地にはあはず。そばきりの汁のあまさにもしるべし。大根のからみのすみやかなるに、山葵のからみのへつらひたる匂さへ、例の似(テ)而非ならん。此後に丈夫の人ありて、心のねばりを洗ひつくし、剛(コハ)からず、柔ならず、俳諧は今日の平話なる事をしらば、はじめて落柿舍の講中となりて、箸箱の名錄に入べしとぞ。（十論爲辨抄、第八段）

「五七」

故翁ある時のたまひけるは、史子、我道は牛房(蓼)の牛房くさきを持て、よしとするに比せり。是をしれりやと、仰せられし返しに、

上下や下(シタ)は紙子のはら背負　史邦

其後人々此心を尋られしかば、師の道は信を以て物にむかふ。物また信に應ずるなりと、答申けるとかや。（俳諧猿舞師）



「五八」

詩哥・連俳はともに風雅也。上三のものは餘す所も、その餘す所迄、俳はいたらずと云所なし。花に鳴鶯も餅に糞する椽の先と、まだ正月もおかしきこの比を見とめ、又水に住む蛙も古池にとび込水の音といひはなして、草にあれたる中より蛙のはいる響に俳諧を聞付たり。見るに有。聞に有。作者感るや句となる所は、則俳諧の誠也。（しろさうし）

註。芭蕉の言か否か不明である。然し土芳の言にしても、芭蕉の思想を祖述してゐるものであらう。

「五九」

師のいはく、俳諧を嫌ひ、俳諧をいやしむ人あり。ひとかた有ものゝうへにも、道をしらざる事にはかゝるあやまちもある事也。その品なにゝもせよ、俳諧ならざる事更(ヒ)なし。其人、甚俳諧をして、事をさばき事をたのしむと也。（くろさうし）

「六〇」

師の神樂堂と云句を難ずるもの有。師のいはく、俳諧は平話を用ゆ。つねに神樂堂といひならはし侍れば、ふかき事は知らずと也。其後此事をたづねたる人あり。師の曰、唯一の神道には神樂殿、兩部には神樂堂といふ。むづかしくいひ分して益なし。たゞ俳諧には神樂殿おかしからずと或俳書にあり。（くろさうし）

註。「宇陀法師」に同旨の文がある。

「六一」

（朱拙曰）詞以レ舊可レ用、情以レ新爲レ先。定家卿はじめしたまひ、山谷は換骨奪胎の法を立たるに、誰かつたへし、俳諧は平話の新しみを本意として、あながち古人のことばを用ひずと、芭蕉庵の示されしとて、窮巷僻地には、傾冶の艶言、舞妓の荒唐、俚語俗詞ならねば、俳諧ならずと、此筋の魔境におちいるもの多し。もとより此道は俗によつて眞趣をたのしむ事なれば、いづれを是とし、いづれを非とせん。しかもひたぶる古へにのみ拘らば、詞はあたらしくとも、情致はふるびぬべし。（けふの昔）

「六二」

遺稿ノ夜話に、ある日木曾寺の茶話に、故翁のいへるは、人ありて俳諧といふは何の爲ぞと問はむに、俗談平話をする爲なりと答ふべきか。さのみは道の輕きに似たれど、儒門の寂然不動をいひ、佛家の寂滅爲樂をいはむは、俳諧の名にはおこがましければ、道を中品以下にそなへて中品以下の風雅を導かば、釋尊も華嚴の座を下りて阿含に人をいざなひ給ふ內祕外現の法ならざらんや。まして孔子の本懷は世法の急用をひろめむと、下學而上達知レ我者其天乎とは、沮溺がごとき是非をもあつかひて、我は人をも世をもさけず、朝齊暮鹽の日用あれば女子童部にも下學して、それを王道に上達せむとなり。いざさらば、我道は釋氏の無爲の恩愛をもすてず、老子の虛無の高擧をもたのまじ。孔門に此世法あれば、論語の言行を鑑にして、文章はその虛實にならひ、教誡はその表裏を察せば、誰かは公道にあらずといはむ。されど柳下惠を學ぶ人の其跡を師とせざるは、道に家〳〵の意地ならんとぞ。（十論爲辨抄、第八段）

「六三」

師のいはく、俳諧の益は俗語を正す也。つねに物をおろそかにすべからず。此事は人のしらぬ所也。大切の所也と傳へられ侍る也。（くろさうし）

「六四」

芭蕉翁曰、昔の俳諧は歌なり。雜躰數多なれど、わきて言葉の色をはなれ、まめやかに思ひ入たるは、この躰なるべし。

古今集の中に

多ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花は散ける

思ふてふ人の心のくま毎に立かくれつゝ見よしも哉

是らの品、誠に淺からぬたぐひなり。中昔もてはやせしは、俳諧の狂なり。たとはゞ

鎌倉山に油ぬらばや

と云に

頼朝のまちやる月こそきしみけれ

などいふたぐひの、しどけなき輕口のみ言出て、月も花も笑ひあかして、靜なる事侍らず。夫より世になる宗匠あまた出て、

摺子木も紅葉しにけり唐がらし

の赤きを興じ、

蛇のすしや下になれぬる沖の石

の重みをもてあつかひたるばかりなりしを、世に賞翫し、人も悦びしに、貫之の絲によると詠じ給ひしかすかなるすぢ、傳教大師の三貌三菩提と誓給ひし丈夫心一ッに合し、諸法實相の觀となし、人間の常のあらましにつけて、情をはこび思ふ事あらば、速に言出べし。かりにも古人の涎をなむることなかれ。誹諧の名は昔の誹諧なり。されど誹諧の名のみありて、そのものにまことなく、代々をしうつり來ることいかにぞや。この道に古人なし。（蕉門俳諧語錄、上）

「六五」

先師曰、發句は昔より樣〻替り侍れど、附句は三變にとゞまれり。むかしは附物を專とす。中頃は心附を專とす。今は移り・響・爾保比・位を以て附るをよしとす。（去來抄、修行敎。「附合論」の一部を重出）



「六六」

師末期の枕に門人此後の風雅をとふ。師の曰、此道のこゝに出て百變百化す。しかれどもその境、眞草行の三ッをはなれず、その三ッが中にいまだ一二をも不盡と也。生前折〳〵のたはむれに俳諧いまだ俵口をとかずとも云出られし事度〻也。（あかさうし）

註。「笈日記」にも同旨の文が見えてゐる。

「六七」

又ある時師の詞に、躰はさま〴〵有といへども、世上二三躰に過ず。今思ふ所十二躰には見へ侍る也。物にも書留んや。此後こゝに究め侍るやうに人こゝに留らんか。しかれば書留るにもいたらずとて事やみ侍る也。（あかさうし）

「六八」

夫俳諧といふ事はじまりて代〻利口のみにたはむれ、先達終に誠を知らず。中頃難波の梅翁自由をふるひて世上に廣しといへども、中分いかにしていまだ詞を以てかしこき名也。しかるに亡師芭蕉翁此道に出て三十餘年、俳諧初て實を得たり。師の俳諧は名むかしの名にしてむかしの俳諧に非ず、誠の俳諧也。されば俳諧の名有て其物に誠無が如く、代〻むなしく押移る事いかにぞや。師も此道に古人なしと云り。又故人の筋を見れば求るにやすし。今おもふ處の境も此後何も

の出て是を見ん。我是たゞ來者を恐ると返〳〵詞有。むかしより詩哥に名ある人多し。皆その誠より出て誠をたどるなり。我師は誠なきものに誠を備へ、永く世の先達となる。誠に代〻久しく過て此時俳諧に誠を得る事、天正に此人の腹を待るや。（しろさうし）

註。「俳諧に古人なし」といふことは「葛の松原」にも見えてゐる。

「六九」

遺稿ノ夜話に、我かつて奥羽よりかへりて葛の松原を草稿せしに、ある日故翁のいへりけるは、世界にあらゆる大道も小道も太極の一氣より三皇にはじまりて五帝に傳へ、其後の聖人賢人も其道に其法あるより、周公孔子を道の木鐸として、詩書禮樂法をさだめ、士農工商の藝をならはす。ましてや詩歌連歌には祖とうやまひ師とあがむべき百世の古人は數多なるを、今の俳諧といふ物は心は史記より傳へたれど、五七の言語には古人なしといはむ。されど此詞の過當にして他門の宗匠にもはゞかるべければ、いつかは我門に丈夫の人ありて、此詞を百世に傳へん。是さらに家訓の密語ならんとぞ。（十論爲辨抄、第二段）

「七〇」

（風國曰）はせを菴の先生、一日門人に對せられていはく、今の風躰を以テ、故人のいたされしところを見るに、その趣向・作意、すでにもとむるにたやすし。またわれ〳〵が今もてあそびて、情志をたのしましむるの堺も亦、さぞしかなりゆくべし。後世何者か出て、いかなるあたらしみをやさぐり出すべし。我は只來者をおそるゝとばかりにぞ。（菊の香、序文の一部）

「七一」

和歌は定家西行に風情改り、連歌は應安の式に定る。俳諧はやゝ百年に及、其實に盛なる事は十とせ餘りや侍らむ。然らば誰を指て古人といひ、何を求てか古風をしたはむ。（下略）（千鳥の恩）

註。「千鳥の恩」は千梅の撰であるが「古翁眞蹟　一軸　千梅家珍」として、解說附で、右の一文が掲載されてゐる。

「七二」

翁の常に俳諧に古人なしと申されけるは、偏に古人なしとにはあらず。先德多が中にも宗鑑あり、宗因あり、白炭の忠知ありなんど慕ひ床しがられ侍りける。たゞ變化流行する所においては、古人に拘るべき軌則なしとなり。（初蟬）

註。「初蟬」は風國の撰である。

「七三」

先師常に曰、宗因なくんば我〳〵が誹諧今以貞德の涎をねぶるべし。宗因は此道中興開山なりといへり。（去來抄、修行敎。「個人評」の「宗因評」に重出）

「七四」

京、大坂、江戸共に俳諧殊之外古く成候而、皆同じ事にのみ成候折ふし、所々思入替候を宗匠と申者もいまだ三四年已然の俳諧になづみ、大かたは古めきたるやうに御坐候間、學者猶俳諧にまよひ、爰元に而も多くは風情あしき作者共みえ申候。然る處に遠方御へだてに而、此段御のみこみ無二御坐一御尤至極に奉レ存候。（書翰集、高山傳右衞門宛の一部。天和三年五月十五日）

「七五」

（許六云）其後江戸に歸り深川芭蕉庵をふたゝびむすぶ。許六此時にまみゆ。珍碩江戸に來て深川集の俳諧を撰す。

乘掛の挑灯しめす朝顔　翁
汐さしかゝる星川の橋

愚老が俳諧四五年の後はみなケ樣に成と申されけり。（歴代滑稽傳）

「七六」

先師迂化の年、深川を出給ふとき、野坡問曰、はいかいやはり今の如く作し侍らむや。先師曰、しばらく今の風なるべし。五七年も過はべらば又一變あらむとなり。（去來抄、修行教）

「七七」



（去來云）先師深川をいで玉ふとき、野坡別に望（略）んで、來る春の歳旦はいかに仕侍らんと尋申けるに、猶今の風然るべし。五六年も經なば一變して、いよ〳〵風體輕く移り行んと教へ給ひけるとなん。（旅寐論）

註。「此後いよ〳〵風體からからん」といふことは「去來抄、同門評」にも見えてゐる。本書「九三」參照。

「七八」

祖翁の遺訓には、今より五十年の變をまちて、俳諧の上手も名人も出べし。その子細は、當時は古風の親仁達にひかれて、其子も其孫も餘執つきず、言語の理屈をさはがむとすまして文章の變化を論ぜば、今の世の小歌淨留理のごときは相似の法の誠といふ事あり。爰に不根の持論をおそるべしとぞ。（十論爲辨抄、第一段）

「七九」

亡師ひそかに未來記の一言あり。吾滅後、門葉の友がら集作る事は、さだめて初心の手にわたるべし。見よ〳〵、十年は過べからずといへり。今我〳〵が集作るの罪、未來記、的中の一言いとはづかし。（篇突）

## （ロ）「修行教」

「八〇」

師、ある時土芳にはなしの次手に云、いつにても機嫌をはかり、誠の俳諧してと有。後あるじの云、翁の詞、その誠の俳諧と云事は、いかなる事にかとたづねらる。師の心しらず、思ふに餘念なき俳諧の事なるべし。師も氣にのらざれば、餘念なき俳諧はいつぞは〳〵などいはれし也。（くろさうし）

「八一」

二白、俳諧御執心之由先ハ珍重、物しりにならんより心の俳諧肝要ニ御坐候。句者は澤山御坐候得共心法を守る人ハまれ〳〵なるものにて候。（下略）（書翰集、晩山宛。元祿年中）

「八二」

ちか比ばせを菴の叟その源にあそび、其流に棹さして、みづから風情の間を論じ申されしに、まさしく姿の上をとらず。（流川集、丈草の序より）

註。「流川集」は露川の撰である。

「八三」

先師曰、世上のはいかいの文章を見るに、或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさわがしきくま〳〵を探りもとめ、西鶴が淺ましく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意をたて〻、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云つゞけ、事は鄙語の上に及とも、懷しく云とるべしと也。（去來抄、故實。前半「個人評」の「西鶴評」に重出）



「八四」

蕉翁の曰、常にして常をはなれ、作を捨て作ある所を好むは世人知處也とおしえ給へり。（桃の杖）

註。「桃の杖」は孟遠の撰である。

「八五」

同（歸）いはく、俳諧は教てならざる所あり。よく通るにあり。或人のはいかいは曾て通ぜず、たゞ物をかぞへて覺るやうにして通る物なしと也。（くろさうし）

「八六」

今日の望は性痴にして、多年大きに執心をかけるといへども、かつて動ざる人あるべし。これは愚老がたすけにあわざれば道に入がたし。器のすぐれたるものは、獨おしえずしていたるといへり。許子が本性を見るに、愚老が求る處に大かた叶ふ人なりといへり。蘭嵐（風國）がいわく、その事

いぶかし。一々論じたまへ。師のいわく、

一、器のすぐれたるもの第一。

一、この道に執心にして、寐食をわすれ、財寶（一叢集、色欲）まで欲に代る人。

一、歳四十を越ざる人。

一、いとまある身にあらざれば、道は行ひがたし。

一、貧賤にして朝夕苦しめる人ならず、富貴にあらずといへども、商賣農士に穢れず。

一、博識にあらずとも、和漢の文字に乏しからぬ人。珍碩がごとき人にあらず。

これ六つなり。この六ッの物揃へる人稀なり。二ッ三ッは兼るといへども、六ッの品具足したる人は稀なりといへり。師の曰、第一手筋よし器よしといへども、手筋あしきはならず。速にこの度俳諧の底をぬかせんといへり。門弟の中に底をぬくものなし。あら野の時を得たりといへども、ひさごに底を入られ、ひさごは猿簑の底あつて、古今を隔てらるゝ、底のぬけたるは新古の差別なし。昨日また明日と流行して、一日もあしをとめずといへり。その冬の頃、愚句、

寒菊の隣もありやいけ大根

と云ふ句せし時、洒堂が句に、

鶏やほだ燒夜の火のあかり

と時を同じう侍る。この兩句翁の論じていはく、世けん俳諧をするもの、この場所にいたりて案



ずるものなしと稱したまふ。予いはく、我久しくいろ〳〵の風を學ぶゆへに、ふるき場・あたらしき場は、たしかに覺ゆるなり。この場所より外にあんじ出す所は無し。然共能き句稀なるを歎といへば、師のいわく、好惡は時のよろしきにつくと示したまへり。又曰、愚老が俳諧は、五哥仙にいたらざる人、一生成就せず、大事なり、覺悟せよといへり。（一叢集、予師と俳諧する事）予俳諧とする事全篇たしかに成就する卷二、哥仙半分にみてざる卷二ッ、以上四卷なり。師いはく、愚老相手と成て俳諧する事三四度なり。いつとても誰れ〳〵と俳諧するは、かやうの物と容易におもふ事なかれ。眞の俳諧をつたふる時は、我骨髓よりあぶらを出す。必〳〵あだにおもふ叟なかれと、大きに恩をしめされたり。（中略）

師の云、當時諸門弟幷他門ともに俳諧慥にして、疊の上に座し、釘鍵をもつてかたくしめたるがごとし、是名人の遊所にあらず。許子が案ずる所も是なり。風雅の外に予が得たる藝能を察せよ。名人は危所に遊ぶ、俳諧かくのごとし。仕損じまじき心あくまで有、是下手の心にして、上手の腸にあらず。師が當歳（予ガ）且、

としゞゝや猿に着せたる猿の面

といふ句、全く仕損じの句なり。ふと歳且に猿の面よかるべしとおもふ心ひとつにして、とり合たるなれば仕損じの句也。予が曰、名人の師の上にも仕損じ有や。答曰、毎句有。予この一言を聞て言下に大悟す。（誹諧問答青根が峯、自讃論之上。「個人評」の「許六評」の一部を重出）

「八七」

翁の曰ク、俳諧といふに、三ッ品あり。寂莫はその情をいへり。女色美肴にあそびて、麁食のさびをたのしみ、風流はそのすがたをいへり。綾羅錦繡に居て、薦着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は、虚に居て實をおこなふべし。實に居て虚にあそぶ事はかたし。此三ッの品は、ひくき人に、高き所をいふにはあらず。高き人の、ひくき所をいふなりとぞいへる。

（風俗文選、陳情表。「虚實」に重出）

「八八」

一、風雅之道筋大かた世上三等に相見え候。點取に晝夜を盡し勝負をあらそひ、道を見ずして走り廻るもの有。彼等風雅のうろたへものに似申候へ共、點者の妻子腹をふくらかし、店主の金箱を賑はし候へば、ひが事せんには増りたるべし。

又其身富貴にして目に立慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじと日夜二卷三卷點取、勝たるものもほこらず、負たるものもしゐていからず。いざま一卷など又とりかゝり、線香五分之間に工夫をめぐらし、事終て卽點など興ずる事ども、偏に少年之よみがるたにひとし。されども料理を調へ酒を飽迄にして、貧なるものをたすけ、點者を肥しむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。



△又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず。これより實之道にも入べき器なりなど、はるかに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸をあらひ、杜子が方寸に入やから、わづかに都鄙かぞへて十ヵの指ふさず。君も則此十ヵの指たるべし。能〳〵御つゝしみ御修行御尤奉レ存候。（書翰集、曲翠宛の一部。元祿五年二月十八日）

「八九」

乍レ去當冬は相手に可レ爲もの無二御座一候へば俳諧も成申まじく候。廣き江戸に相手のなきも氣の毒に存候。當方無レ恙五句付點取、脾の臟を捫體に候。此脾の臟捫破たらん後、初而はいかいはやり可レ申候。（書翰集、許六宛の一部。元祿六年十月九日）

「九〇」

卷尤俳諧くるしからず候へ共、一體今の存念にたがふ事殘念之事ニ御座候へども、和歌三神其一分はかゝはり不レ申候間其儘指置候。かりそめの集等皆名利憍慢の心指にとおもひ立候故皆見所を失ひ申候。何とぞ風雅のたすけにも成り、且は道建立之心にて言葉つまりたる時をくつろげる味ニ而、折〻集を出し候處に、三年昔の風雅只今出し候半は跡矢を射ごとくなる無念而已ニ候。

（書翰集、句空宛。元祿三年）

「九一」

むかし先師凡兆につげて曰、一世のうちに秀逸の句三五あらん人は誹者也、十句におよばん人は名人なり。また先師ひと〳〵の句の奥意にかなふものあつめて、ゑらばんとしたまふ。これを笈の小文と號すとつたへたり。故あつて予が名月の句を入集すとかたりたまへり。予曰、わが句撰にいるべき句いくばくありや。先師のいはく、なんぢ過分のことを云へり。すべて我この度の集にゑらみいれん句、五句もちたるものはまれなり。これを以ておもふに、まことに秀逸といはんは世にまれ成るべし。（誹諧問答青根が峯、答許子問難辨）

「九二」

功者に病あり。師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれなどと、たび〳〵云ひ出られしも皆功者の病を示されし也。實に入に氣を養ふところすあり。氣先をころせば句氣にのらず。先師も俳諧は氣にのせてすべしと有。相槌あしく拍子をそこなふともいへり。氣をそこなひころす事也。又ある時は我が氣をだまして句をしたるよしともいへり。みな氣をすかし生て養の教也。門人功者にはまりてたゞ能句せんと私意を立て、分別門に口を閉て案じ草臥る也。おのが習氣をしらず、心のおろかなる所也。多年俳諧好たる人より、外藝に達したる人はやく俳諧に入るとも師の云るよし、ある俳書にもみへたり。師のいはく、學ぶ事はつねに有。席に望て文臺と我と間に髪（ママ）といれず、思ふ事速に云出て、爰に至て迷ふ念なし。文臺引おろせば即反



古也と、きびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒すごし。鏤本に切込意得（こゝろえ）、西瓜切る如し。梨子くふ口つき、三十六句皆やり句などと、いろ〳〵にせめられ侍るも皆功者の私意を思ひやぶらせんとの詞也。（あかさうし。一部「附合論」に重出）

註。「多年俳諧好みたる人より云々。」のことは「宇陀法師」にも見えてをる。

「九三」

梅の花赤いは〳〵あかいか（は）な　惟然

去來曰、惟然坊が今の風大かた是等の類なり。發句にはあらず。先師迁化の歳の夏、惟然坊が誹諧を導給ふに、其得たる口質の處よりすゝめて〻磯際にざぶり〳〵と浪うちて　或は、〻杉の木にすう〳〵と風の吹わたり　などゝいふを賞し給ふ。又俳諧は氣鋒（キサキ）にて無分別に作すべしとのたまひ、亦此後いよ〳〵風體かろからんなどのたまひたる事を聞まよひ、我が得手に引かけて、自の集の哥仙に侍る、妻よぶ雉子、あくるがどくの雪、の句などに、先師評し給へる句勢・句姿などゝいふとの物がたり共は、みな〳〵忘却せらるゝと見えたり。（去來抄、同門評）

「九四」

先師曰、今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席にのぞんでは氣鋒（キサキ）を以て吐べし、心頭に落すべからずと也。支考曰、むかしの俳諧は如來禪のごとし。今のはいかいは祖師禪のごとし。捺著すれば即轉ず。（去來抄、修行教）

「九五」

遺稿ノ類説に一とせ伊賀の西麓庵におはして、續猿蓑の撰集ありしに、武城の人〳〵より發句をおくれり。其中に其角も三四章ありて、秋風ノ辭を裁入たる句に「白雲に鳥の遠さよ飛は雁」といふを、我も人も感吟して、これらの手づまの及がたき事をいへば、故翁は例のほめながら、晋子が此ほどの俳諧をきけば、玉振金聲の作をもとめて、天下の人を驚さむとす。是より五年の變化をはからず、二作をかさねば、平話を失ひ、三作をかさねば、俳諧はつきて、其時は自己を失ふべしと。（十論爲辨抄、第八段。「個人評」の「其角評」に重出）

「九六」

又（師）いはく、一とせ對面の始いひ出られ侍るは、俳諧能過たり。碁ならば二三目跡へ戻してすべしと示されし也。面白敎也。（くろさうし）

「九七」

（許六云）この（千那）人の誹諧のいき過たると言ふは、我ばかりはおもしろふおもふと言へども人かつて嬉しからず。たとへば卯月朔日衣がへの日、紙帳をうり來たる人有り。師のいはく、これいき過なり。そのとし寒ふしていまだ炬燵をはなれず、人の賣らざる内に賣るべしとおもひて、紙帳〳〵といへども人の氣移らず。是ありがたきたとへなり。（誹諧問答青根が峯、同門評判）

「九八」



文庫から朽木の肴ふるひ出し　楓子

一寸の蚊の斧にむかへる　其角

此句伽羅の事なるべし。伽羅といふておかしく作るは變なるべし。朱の心に白み有はづを、かたから朱を白いといひたる句作、變ばかりを云しなり。この眞似をする人、後には百尺竿頭にて中返りをし、或は水底にて奈良茶飯喰やうの事有べしと、先師いましめ申されし。（蕉門俳諧語錄、下）

「九九」

（上略）兎角俳諧ハ萬事作り過たるは道に叶ハず、其形之まゝ又ハ我心之儘を作りたるを能キと存候。かく御含有て可然候。（下略）（書翰集、無宛名。元祿四年）

「一〇〇」

師のいはく、俳諧におもふ所あり。能書の物書るやうに行むとすれば、初心道をそこなふ所ありといへり。いかなる所ぞととへども、しか〳〵ともこたへ給はず。其後句を心得見るに、くつろぎ一位有、高く位に乘じて自由をふるはんと根ざしたる詞ならんか。末弟の迷ひて道をおろそかにせん事を、なにかに付て心にこめてつゝしみのことば也。（くろさうし）

「一〇一」

（去來云）汗化のとし、關東より道すじ尾張に立寄給ひけるに、門人當時の風を窺ひければ、

たゞ子供のする事に心をつけよと宣ひけると聞り。（旅寐論）

「一〇二」

都の人よろづに心づかひありて、身のさが見られじとおもふも、物につけ時によるべし。俳諧はあからさまなるがよしと先師もおしえ給ひしに、人のこゝろのへつらひこそ大かたは口おしけれ。（芭蕉盥）

註。「芭蕉盥」は有隣の撰である。

「一〇三」

師のおもふ筋に我心をひとつになさずして、私意に師の道をよろこびて、その門を行と心得がほにして私の道を行事あり。門人よく己を押直すべき所也。松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のおりしも私意をはなれよといふ事也。この習へといふ所をおのがまゝにとりて終に習はざる也。習へと云は物に入てその微の顯て情感る也、句となる所也。（あかさうし）

註。梢風尼撰「木葉集」にも同旨のことが見えてゐる。

「一〇四」

吾翁は、俳諧といふは別の事なし、上手に迂詐をつく事なりとは、例に俳諧の端的底にして、虛實不自在の人には知すまじき芭蕉門下の一振刀なり。（俳諧十論、第四虛實ノ論）



「一〇五」

ことに角子は世上の宗匠、蕉門の高弟なり。かへつて吟跡の師とひとしからざる、諸生のまトひ、同門のうらみすくなからず。翁のいはく、なんぢが言しかり。しかれどもおよそ天下に師たるものは、まづおのが形・くらゐをさだめざれば人おもむく所なし。これ角が舊姿をあらためざるゆへにして、予が流行にすゝまざるところなり。わが老吟にともなへる人々は、雲かすみのかぜに變ずるがごとく、朝々暮々かしこにあらはれ、こゝに跡なからん事をたのしめる狂客なりとも、風雅のまことを知らば、しばらく流行のおなじからざるも、又相はげむたよりなるべし。（誹諧問答青根が峯、贈晋氏其角書。「個人評」の「其角評」の一部を重出）

「一〇六」

（去來云）許六の云る、昨日の我に飽たりと、誠に善言也。先師も此事折〳〵しかり給ひき。（旅寐論）

「一〇七」

去來曰、凡吟ある時は風あり、風は必變ず、是自然の事也。先師是をよく見取て、一風に長くとゞまるまじき事を示し給へり。たとひ先師の風なりとも、一風になづんで變化をしらざるは、却而先師のこゝろにたがへり。（去來抄、修行教）

「一〇八」

吾翁は耳をもて俳諧を聞べからず、目をもて俳諧を見るべしといへる。耳目は姿情のつかひものにして、彼には明暗のさかひあれば也。（俳諧十論、第五姿情ノ論）

「一〇九」

花よほとゝぎすとかりそめにも貪戻なかれとは風羅老人の谷なり。（雪の葉、序）

註。月花の愚に針たてん寒の入　芭蕉
月雪とのさばりけらしとしの昏　同
「雪の葉」は一哷の撰で、序は東海である。

「一一〇」

師一とせ岐阜鵜飼見の時、鵜尉一人に十二羽宛、舟に篝して、其ひかりにこれを遣ふ。十二筋の繩たて横にもぢれて、さばきむづかしき事を、やすく是をなす。鵜尉に此事を尋ね侍れば、先もぢれぬよりさばきて、なまもぢれ成るものを又さばく、むづかしくもぢれたるものひとりほどけ、さばくるといへり。萬に此心はあるべしとなり。（くろさうし）



「一一一」

古しへより風雅に情ある人〻は、後に笈をかけ草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實をしる事をよろこべり。（送三許六一辭の一部。全文「個人評」の「許六評」に重出）

「一一二」

又旅、東海道の一筋もしらぬ人、風雅に覺束なしとも云へりと有。（しろさうし）

「一一三」

とかく曾良などは今時の上手と申す内へ入候。貴樣とても同じ達者成事に候へば、何とぞ行脚の旅一生の内に思ひ立ち候て、修行あるべく候。さもなくては中〳〵鼠細工ばかりして世間廣くは成がたく候。しかしながら貴樣には曾良などと違候て身の重き人に候へば、兩親存在の内は成申間敷候。其内心がけ第一に御座候。是もいらざる智惠付け樣あるべく候へ共云ふて見るまで、ちと〳〵粟津へ御出待入候。かしこ（書翰集、野坡宛。元祿三年）

註。書翰の前半には曾良の「松しまや鶴に身をかれ時鳥」を稱讃してゐるが、これは「發句評」に收めた。猶書翰集には宛名の野坡は不審なる旨の註がある。

「一一四」

我家の面通言(カホツヒ)に、なら茶三石喰ふて後はじめて俳諧の意味をしるべしとは、ある時に故翁の戯ながら論語の精(シラケ)にはいひまさりて、名をさしていへるは例のさびしみ也。（俳諧十論、第十法式ノ論）

「一一五」

何の花は夏か秋かと、やゝもすれば人に尋る人多し。是心がけあしき故なり。四時の景物は目を閉て見れば、春夏秋冬さへぎる物なり。季節を取違へるは無念の事なり。（蕉門俳諧語錄、下）

「一一六」

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

猿蓑の撰に、予誤て畦づたひと書入たり。先師曰、畦うつりと傳ひと形容・風流各別なり。殊に畦うつりして蛙啼なりともよめり。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず、句を聞事のおろそかなる故なりとて、きげんあしかりけり。（去來抄、先師評。「發句評」に重出）

註。以上二篇については、「二六〇」及び「三四〇」參照。

「一一七」

句のすがた、さのみかはるにもあらで人〻の腸をしぼる所、聞もの〻好・すかざるによりて、言下に心のどく聞なし侍らんは本意なしと、師のいへるよしあり。（くろさうし）



「一一八」

師の句にても再三吟じて、猶心得がたくや思はれ侍りけん、その句書付よ、人にも聞かせ見んと、聞えける事もおり〳〵あり。おろそかならざる所、門人としてわすれまじき所也。（くろさうし）

「一一九」

師のいはく、相似たる句は、集に出す時外に置て、まぎらはしくせざるよし。後猿蓑に師の蕎麥の花の句、猿雖が蕎麥の花、一所にわざと置侍ると也。（くろさうし）

## （八）個人評

「一二〇」

夫風流に心をとめて、其四季にともなふもの、濱の眞砂の盡せぬ詠ならめ。其情を述て其ものをあはれむ人は、こと葉の聖也。されば文明のころ、其道さかんなりし聖たちの言葉、今の捉となりて、其實なる事、今の人のすさむ事かたかるべし。されども風雅の流行は天地とゝもにうつりて、只つきぬを尊ぶべき也。さればかの宗祇・宗鑑・守武の壽像を求めて、此道の好士許六の筆勞をかり、我拙き一句をつゞりて、道のたゞ萬古にさかんならんことをいのる而已。　芭蕉拜

月花のこれや實（まこと）のあるじ達　（三聖人の圖。前半「風雅」に重出）

「一二一」

貞德・宗鑑・守武の畫像に、東藤子讃を乞けるに、何を季に、なにを題に、むづかしの讃や、とゑみ給ひ、やがて書てたびけり。其句、其詞書。

三翁は風雅の天工をうけえて、心匠を萬歳に傳ふ。此かげに遊ばんもの、誰か俳言をあふがざらんや。

月花の是やまことのあるじ達　（皺筥物語）

「一二二」

先師常に曰、宗因なくんば我〳〵が俳諧今以貞德の涎をねぶるべし。宗因は此道中興開山なりといへり。（去來抄、修行敎。「俳諧一般」の「本質論」より重出。「不易流行」の一部を重出）

「一二三」

先師曰、世上のはいかいの文章を見るに、或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさわがしきくま〴〵を探りもとめ、西鶴が淺ましく下れる姿あり。（去來抄、故實。「俳諧一般」の「修行敎」の一部を重出）

註。西鶴の評は、主として浮世草子について言つたものと考へられるが、參考までに掲載した。



「一二四」

草の戸さしこめて、もの侘しき折しも、偶（たまたま）蓑蟲の一句を云。我友素翁、甚哀がりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦をぬひ物にし、其文や玉をまろばすがごとし。つら〳〵見れば離騷のたくみあるに似タリ。又蘇新・黃奇有。初に虞・舜・曾參の孝をいへるは人におしへをとれとや。其無能を感る事は、ふたゝび南花（なんか）の心を見よとや。終に玉蟲のたはれは色をいさめむとならし。翁にあらずば、誰かこの蟲の心をしらむ。靜にみれば物皆自得すと云り。この人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人、おほくは花にふけりて實ヲそこなひ、實を好て風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實猶くらひつべし。（下略）（蓑虫跋。一部分「虛實」に重出）

「一二五」

（去來のいはく）ことに角子は世上の宗匠、蕉門の高弟なり。かへつて吟跡の師とひとしからざる、諸生のまよひ、同門のうらみすくなからず。翁のいはく、なんぢが言しかり。しかれども およそ天下に師たるものは、まづおのが形・くらゐをさだめざれば人ともむく所なし。これ角が

舊姿をあらためざるゆへにして、予が流行にすゝまざるところなり。わが老吟にともなへる人々は、雲かすみのかぜに變ずるがごとく、朝々暮々かしこにあらはれ、こゝに跡なからん事をたのしめる狂客なりとも、風雅のまことを知らば、しばらく流行のおなじからざるも、又相はげむのたよりなるべし。去來のいはく、師の言かへすべからず。しかれどもかへつて、風は詠にあらはれ、本哥といへども、代々の宗の樣おなじからず。いはんや俳諧はあたらしみをもつを命とす。本哥は代をもつと變べくば、この道年をもつて易ふべし。水雪の淸きも、とゞまりてうごかざれば、かならず汚穢を生じたり。今日諸生の爲に古格をあらためずといふとも、なをながくこゝにとゞまりなば、我其角をもつて、劒の菜刀になりたりとせん。翁のいはく、なんじが言愼むべし。角や今我今日の流行におくるゝとも、行すへまたそこばくの風流をば、なしいだしきたらんも知るべからず。去來のいはく、さる事あり。これを待にとし月あらんを歎くのみと、つぶやきしりぞきぬ。（誹諧問答青根が峯。贈晉氏其角書。一部「俳諧一般」の「修行敎」に重出）

註。「菊の香」にも同旨の文がある。

「一二六」

船に茶の湯の浦哀なり　其角

ほとゝぎす、水邊・津・浦などにいふ事勿論也。船中にて茶の湯などしたる風流奇特也。思ひがけぬ所にて、茶の湯を出すは茶窓の好士なり。されば思ひよらぬ物を前句におもひ寄たる、又俳諧の逸士也。（初懷紙評註。「とく起て聞勝にせんほとゝぎす　芳里」に對する其角の附句に就いての評。「附句評」より重出）

「一二七」

きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

去來曰、其角は實に作者にて侍る。はつかに蚤のくひつきたる事、誰かかくはいひ盡さん。先師曰、しかり、かれは定家の卿なり。さしてもなき事を、とゞ〳〵しくいひつらね侍るときこえし評、詳なるにゝたり。（去來抄、先師評。「發句評」に重出）

「一二八」

遺稿ノ類說に一とせ伊賀の西麓庵におはして、續猿蓑の撰集ありしに、武城の人〳〵より發句をおくれり。其中に其角も三四章ありて、秋風ノ辭を裁入たる句に「白雲に鳥の遠さよ飛は雁」といふを、我も人も感吟して、これらの手づまの及がたき事をいへば、故翁は例のほめながら、晉子が此ほどの俳諧をきけば、玉振金聲の作をもとめて、天下の人を驚さむとす。是より五年の變化をはからず、二作をかさねば、平話を失ひ、三作をかさねば、俳諧はつきて、其時は自己を失ふべしと。（十論爲辨抄、第八段。「俳諧一般」の「修行敎」に重出）

「一二九」

師の曰、其角は同席に連るに、一座の興にいる句をいひ出て、人〳〵いつとても感ず。師は一座

その事なし。後に人のいへる句はある事も有と也。さあるべき事也。云く、座によりて、一座の人にとれて句をそこなふ事あり。門人常に心得べし。其角は生質としてこゝに居らずと也。（くろさうし。「句作論」に重出）

「一三〇」

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉

先師曰、尙白が難に、近江は丹波（異本、難波）にも、行春は行年にもなるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難あたらず、湖水朦朧として春ををしむに便有べし。殊に今日のうへに侍ると申き。先師曰、しかり、古人も此國に春を愛すること、をさ〳〵都におとらず。去來此一言こゝろに徹す。行年、近江に居たまはゞ、いかでか此感のましまさん。行春丹波（異本、難波）にゐまさば、もとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事眞なるかなと申。先師曰、汝や去來、ともに風雅をかたるべきものなりと、よろこび給へりしか。（去來抄、先師評。「發句評」に重出）

「一三一」

雪の日に兎の皮の髭つくれ　芭蕉

魯町曰、此句意いかゞ。去來曰、前書に子どもと遊びてとあれば、子どもの業と思はるべし。强て理會すべからず。樊關を踏破して知べし。先師此句を語給ふに予甚感動す。先師曰、是を悅ばん者越人と汝のみならむと思ひしに、はたしてしかりとて殊さらの機嫌なりし。（去來抄、同門評）



「一三二」

先師の言に、此僧此道にすゝみ學ばゞ、人の上にたゝむ事、月を越べからずとのたまへり。（中略）先師深川に歸り給ふ比、北邊の句ども、書あつめまひらせけるうち、大原や蝶の出て舞ふおぼろ月　などいへる句、二つ三つ書入侍りしに、風雅のやゝ上達せる事を評し、此僧なつかしといへとは、我方への傳へなり。（風俗文選、丈艸ガ誄。去來）

「一三三」

予明（許六）の年（元禄五年）七月又東武に趣（赴）く、此とき翁に對面せん事をよろこぶ也。橘町より、深川芭蕉庵再興して入たまふ年なり。江戸着の日かず經ず、桃隣手引して八月九日深川の庵をたゝき、師弟契約のはじめなり。一座に蘭嵐（風駒）・桃隣・淨求法師なり。桃隣いひけるは、翁へ發句持參あるべしといふに任かせ、桃隣執筆して四五句はじめて呈す。

七月十四日嶋田・金谷の送り火を見て感をます。

聖靈となりて越けり大井川

十團子も小粒になりぬあきの風

かけ橋のあぶなげもなし蟬の聲

我跡へ猪口立寄る清水かな

此外にも有しを失念。

師見終て云く、就中うつの山の句大きに出來たり。その外清水・掛橋の句もよしと、數篇感じられたり。大井川の句は、その時少し加筆あり、略す。予つくづく不審を生ず。再篇(週)き〻返し、宇津の山の句能侍るやといへば、成程よしといへり。予が聞かへしたる事を不審におもひたまふや、翁のいはく、許六は愚老に對面したまはざる以前、愚老が門弟に對面したまふやと、問ひたまふ。予も云、しからず、尙白に二度對しける後はひたすら、あら野・猿みの〻二集に眼をさらし、晝夜句をさぐる事隙なし。すこしさぐり當たりとおもへば、跡より師の吟じいだし給ふ句、大きに相違せり。その風探り見れば、また跡の句似たるかたもなし。晝夜吟腸を斷て、やう〳〵この宇津の山の句を得たり。この句二十句ばかり仕直し、二日案じわづらふて後に、小粒に成りぬといふ事を取いだしたりと答ふ。師のいはく、先達て尙白問答一〻聞たり。今日許子が句を見る事、もつぱら撰集にて眼をさらしたる事あきらかなり。愚老が魂を集にてさぐり當る人は、門弟子に許子一人なり。晝夜この魂を門弟子に說といへども通じがたし。愚老が本望今日達せりとて、大きによろこびたまへり。撰を見る事、許子におよぶ人あるまじと、返す〴〵稱したまへり。予い



よ〳〵不審出來ぬ。つく〴〵おもふに、はい諧はいひ勝と、平呑にのみ切て居侍るとき、師いわく、許子が誹諧と晉氏の誹諧はかつて符合せず。愚老が誹諧と許子が俳諧とは符合すといへり。この事にちからを得て懺悔す。予云、されば今日對面のはじめより予が心中大きに迷へり。この一言によつて少し力を得たり。予高翁に對面せざる以前、晉子が方へこのころ點を乞句百四十五有。予がよしとおもふ句には點稀にして、いひ捨の句に褒美の點有。今日師のかんじたまふ句、大方一點の句なり、然る所師殊外かんじ給ふ。予不審こゝにあり。師の高弟は晉子也。師弟の胷旨、ヶ樣にかわりては頼もしからず。畢竟誹諧は云勝と決定し侍る也。また問云、予が誹諧と晉子が誹諧と符合せざる事、并、師の風雅と予が風雅と符合せし事を述べて、不審を明し給へといへば、師の云、許子俳諧をすき出る時、閑寂にして山林にこもる心地するを悅び、元來はいかい數寄ならずやといへり。答曰、しかり、師も好く所かくのごとし。晉子がすく所は、曾てこの趣にあらず。俳諧は伊達風流にして、作意の働き面白き物と、すき出たる違ひなり。故に晉子と許子と符合せざるといへり。はじめて眼をひらき、一言に寄て筋骨に石針するごとし。又問ふ、師と晉子と、師弟はいづれの所を敎へ習ひ得たりといはむ。答て曰、師の風閑寂を好んで細し。晉子が風伊達を好んで(一蕉集細し)ふとし。此細き所師(予カ)の流なり。爰に符合すといへり。これをかんず。又問曰、予さぐりあたりたる所、まことの誹諧の血脈に侍るやといへば、この所毛頭疑あるべからず、心を正して俗はなるゝ外はなしといへり。その日は退出す。その後予が旅亭に招きたるとき、師の

雜談に云、愚老許子に對して、予が多年の大望を遂たり。蘭嵐(鳳麟)子曰、いづれの道か叶ひ侍るといへば、師のいわく、我國々の人に對して器をもとむ。もとめ得て、直指の法を傳ふべきとおもふ事、日々に有。今撰集を見て予がはらわたをさぐり得たる人は許子なり。千歳の後も許子がごとき人、世にあるまじきともおもはず。されば、しひて器をもとむる叉(コト)を止めたり。今日の望は性痴にして、多年大きに執心をかけるといへどもかつて動ざる人あるべし。これは愚老がたすけにあわざれば道に入がたし。器のすぐれたるものは、獨おしえずしていたるといへり。許子が本性を見るに、愚老が求る處に大かた叶ふ人なりといへり。蘭嵐(鳳麟)がいわく、その事いぶかし。一々論じたまへ、師のいわく。

一、器のすぐれたるもの第一。

一、この道に執心にして、寐食をわすれ、財寶(一蘗集色欲)まで欲に代る人。

一、歳四十を越ざる人。

一、いとまある身にあらざれば、道は行ひがたし。

一、貧賤にして朝夕苦しめる人ならず、富貴にあらずといへども、商賣農士に穢れず。

一、博識にあらずとも、和漢の文字に乏しからぬ人。珍頑がごとき人にあらず。

これ六つなり。この六ッの物揃へる人稀なり。二ッ三ッは兼るといへども、六ッの品具足したる人は稀なりといへり。師の曰、第一手筋よし器よしといへども、手筋あしきはならず。速にこの



度誹諧の底をぬかせんといへり。門弟の中に底をぬくものなし。あら野の時を得たりといへども、ひさごに底を入られ、ひさごは猿蓑の底あつて、古今を隔てらるゝ、底のぬけたるは新古の差別なし。昨日また明日と流行して、一日もあしをとめずといへり。その冬の頃、愚句、

寒菊の隣もありやいけ大根

と云ふ句せし時、洒堂が句に、

鶏やほだ燒夜の火のあかり

と時を同じう侍る。この兩句翁の論じていはく、世けん俳諧をするもの、この場所にいたりて案ずるものなしと稱したまふ。予いはく、我久しくいろ〳〵の風を學ぶゆへに、ふるき場。あたらしき場は、たしかに覺ゆるなり。この場所より外にあんじ出す所は無し。然共能き句稀なるを歎といへば、師のいわく、好悪は時のよろしきにつくと示したまへり。又曰、愚老が俳諧は、五哥仙にいたらざる人、一生成就せず、大事なり、覺悟せよといへり。予誹諧(をカ)とする事全篇たしかに成就する卷二、歌仙半分にみてざる卷二ッ、以上四卷なり。師いはく、愚老相手と成て誹諧する事三四度なり。いつとても誰れ〳〵と誹諧するは、かやうの物と容易におもふ叉(コト)なかれ。眞の誹諧をつたふる時は、我骨髄よりあぶらを出す。必〳〵あだにおもふ叉なかれと、大きに恩をしめされたり。その正月、予が亡母の七年追悼に到る。こゝろ安き相手もとめて、哥仙一卷終る。成て師に呈す。師これをよんで、且ッよろこび、且ッ稱す。予がいはく、師の流、この哥仙の外に

あらば、予が誹諧終に本意を遂る事あたわずといへば、師のいわく、全くこれ也。うたがひ侍る事なかれと、大きにかんじたまへり。その後三月盡の日より、卯月三四日まで、予が宅に入、逗留し給ふ。晝夜誹諧を聞く。その時翁の曰、明日衣更なり。句あるべし、きかんといへり。かしこまりて、三四句吐出すといへども、師本意に叶はず。師の云、當時諸門弟幷他門ともに俳諧慥にして疊の上に座し、釘鍵をもつてかたくしめたるがごとし。是名人の遊所にあらず。許子が案ずる所も是なり。風雅の外に子が得たる藝能を察せよ。名人は危所に遊ぶ、俳諧かくのごとし。仕損じまじき心あくまで有、是下手の心にして、上手の腸にあらず。師が當歳且、

としゞゝや猿に着せたる猿の面

といふ句、全く仕損じの句なり。ふと歳且に猿の面よかるべしとおもふ心ひとつにして、とり合たるなれば仕損じの句也。予が曰、名人の師の上にも仕損じ有や。答曰、毎句有。予この一言を聞て言下に大悟す。おそらくは向後、予が句仕損じの場所ならでは一句も有るまじ、聞たまへと、高言に放つ。予あやうき釣合は、さぐりあたりといへども、心中仕損じまじきとおもふ心あくまで有り。此一言に寄て仕そんずるところを決定せり。時に、

人先に醫者の裕やころもがへ

と即時にいひだす。師掌を打て、いわく、奇成、妙なり、俳諧の底この句にてぬけたり。一言下に悟するものはあれども、一言下に句をするものはなしと感じられたり。この句、秀たる句にあらずといへども、血脈の正敷所よりいでゝ、第一衣更には氣を寄よく付て、人のおよばぬ所をかんぜられたり。（誹諧問答青根が峯、自讃論之上。一部分「俳諧一般」の「修行教」に重出）

註。芭蕉と其角の俳風については「一二九」「二一六」を參照されたい。

「一三四」

去年の秋かりそめに面をあはせ、ことし五月の初深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其器、晝を好、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。晝は何の爲に好や。風雅の爲好といへり。風雅は何の爲愛すや。晝の爲愛といへり。其まなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして、用一なる事可レ感にや。晝はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が晝は精神徹（一業集、徹）に入、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る所にあらず。（下略）（許六離別詞前半。後半「俳諧一般」の「本質論」に掲出）

註。「本朝文選」には「柴門ノ辭」として掲出。

「一三五」

木曾路を經て舊里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をいため、破笠に露霜をいとふて、をのれが心をせめて、物の實をしる事をよろこべり。今仕官おほやけの爲には長劍を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黑き

羽織のもすそは風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花のこゝろにも似よ木曾の旅　はせを
うき人の旅にも習へ木曾の蠅　同

（送三許六一辭。一部分「俳諧一般」の「修行教」に重出）

「一三六」

支考が松しま行脚の時御器を得て一句餞別に遣しける

此心すいせよ華に御器一具

ケ樣に申遣しければ支考ワキ句いたし遣候。偖〻支考は何角に付けて第一きりやう有人にて御ざ候。知行を捨て誹門に入ほどの心ざしは百人にもあるまじく候。とかく上に立人間に候。少〻あは津へも御たどり待入候。以上（書翰集。蘭風宛、元祿五年）

「一三七」

越人

うらやましおもひきる時猫の戀

先師、伊賀より此句を書贈て曰、心に俗情（異本、風雅）あるもの、一たび口に不レ出といふ事なし。かれが風雅、是に至りて本情をあらはせりとなり。是より先に越人名四方に高く、人のもてはやす發句多し。しかれども爰に至りてはじめて本性を顯すとなり。（去來抄、先師評。「發句評」に重出）



「一三八」

金革を褥にして、あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて、君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり九とせにや。この三とせ斗（はかり）官を辭して、岩洞に先賢の跡をしとふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日々風雲に座して、今年仲秋中の三日、由井・金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳、其歸るさより心地なやましうして終にいきたえぬ。（下省）（笈日記、悼二松倉嵐蘭一）

註。「本朝文選」に「嵐蘭カ誄。」として掲出。「うら若葉」に「悼嵐蘭詞」として掲出。

「一三九」

一柳軒不卜のぬしは、身を蘆境にしたがひせまりて、志は雲ゐる山の岩根をたどり、あるはよし野の花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅の奴となること年有。（續の原句合、冬の部跋文の一部。「句合評」の「續の原」より重出）

「一四〇」

杖頭に草鞋をかけて、笠の内に名をあらはす。元祿六とせ彌生の初、僧專吟、武江の東深川の艸扉を開て既一歩をはじむと書く。此僧常に風情を好み、（一葉集、風雅）市を避て年〳〵斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣むとす。身は雲外の鶴にひとしく、流に背をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるふて、野に伏雲に泊らん胸中の塵いさぎよし。（下略）（僧專吟餞別之詞）

「一四一」

他門の說云、芭蕉翁は發句上手、俳諧はふるしと云人有。先師常に語て云、發句は門人の中予にをとらぬ句する人多し。俳諧におゐては老翁が骨髓と申されける事毎度也。此かはりめ同門すら知人稀也。他門いかで知べき。先師一生の骨折は只俳諧の上に極れり。師云、老翁が俳諧は五哥仙に究めぬ人一生俳諧ならず共いへり。大切成事にして又心安ヶ事也。（宇陀法師）

「一四二」

發句は門人にも作者あり。附合は老吟のほねといひ給ひけると、或俳書にあり。（くろさうし）

# 七　發句

## （イ）風體論

「一四三」

師のいはく、體格は先優美にして一曲有は上品也。又たくみを取、珍しき物によるはその次也。中品にして多は地句也。師の句をあげて、そのより所をいさゝか顯す。（下略）（あかさうし）

「一四四」

野明曰、句の位とはいかなるものにや。去來曰、これも又一句をあぐ。

卯の花のたえ間たゝかむ闇の門

先師曰、句の位尋常ならずとなり。去來曰、畢竟句位は格の高きにあり。句中に理窟をいひ、或は物をたくらべ、或はあたり合たる發句は位くだるもの也。（去來抄、修行敎）

註。去來の言も、芭蕉の考を祖述してゐるものと思ふ。

「一四五」

去來曰、句に姿と云あり。たとへば、

妻よぶ雉子の身をほそうする　去來

初は此句、つまよぶ雉子のうろたへて啼　と作りたりけるを、先師曰、去來、汝いまだ句の姿をしらずや。同じ事も斯いへば姿ありとて直し給へるなり。支考が風姿といへるもこれ也。（去來抄、修行敎）

「一四六」

去來曰、句に句勢といふ事あり。文に文勢、語に語勢あるが如し。たとへば、〳〵ふるふがどく小糠雪ふる　と云句を、先師曰、打あくるごと小ぬかゆき降る　と作れば句勢ありとなり。（去來抄、修行敎）

「一四七」

君が春蚊帳は萠黄に極りぬ　越人

先師曰、發句は落つかざれば眞の發句にあらず。越人が發句、既落着たりと見ゆれば、又おもみ出來れり。此句蚊帳は萠黄に極たるにてたれり。月影・朝朗（アサボラケ）など置て蚊帳の句となすべし。其上かはらぬ色を君が代にかけて、歳旦となし侍故、心重く句奇麗ならず。（去來抄、先師評）

「一四八」



（門人の句に）同、春風や麥の中行水の音　といふ句あり。景氣の句なり。景色は大事の物也。連哥に景曲といひ、いにしへの宗匠ふかくつゝしみ、一代一兩句に不レ過、初心まねよき故にいましめたり。俳には連哥ほどにはいまず。惣而景氣の句はふるびやすしとて、つよくいましめ有也。此春風、景曲第一也とて、かげろふいさむ花の糸（異本、糸日）に　といふ脇して送られ侍ると也。哥に景曲は見樣躰に屬すと定家卿もの給ふと也。寂蓮の急雨、定賴卿の宇治の網代木、是見樣體の哥とある俳書にあり。（あかさうし）

註。句は木導の作である。この一文は芭蕉の言と認められる部分は僅であるが、他の部分も土芳が芭蕉の考を祖述したものと推察される。猶「宇陀法師」にも同旨の文が見えてゐる。

「一四九」

粽結ふ片手にはさむ額がみ

此句物がたりの體と也。去來集撰の時、先師の方より云送られしは、物がたりの姿も一集にはあるべきものとて送ると也。（あかさうし）

「一五〇」

先師曰、發句も四季のみならず、戀・旅・名所・離別等無季の句有たきものなり。されどもいかなる故ありて、四季のみとはさだめ置れけん。其事をしらざれば暫もだし侍るとなり。（蕉門

俳諧語錄、上。「作法」の「季のこと」に重出）

註。無季の句については「三八九」「三九〇」參照。

## （ロ）句作論

「一五一」

とかく風雅ハ唯すがたをよく作り、尤意味深甚成事第一と御心得あるべく候。先ハ此句之たぐひ成べし。

日の道や葵かたぶく五月雨　（書翰集、山口宛の一節。元祿三年五月十一日）

註。發句は芭蕉の作である。

「一五二」

（翁曰）句は數寄屋を立たる如し。丸木の柱、壁に鰻目をみせて塗りたるは荒く見え侍れども、風流なり。在邊の灰小屋、石切小屋は荒々とばかりにて風雅もなし。（蕉門俳諧語錄、下）

「一五三」

（翁曰）句のすがたは青柳の小雨にうたれたるがごとく、折々微風にあやなすもあしからず。



（蕉門俳諧語錄、下）

「一五四」

うの花に月毛の駒の夜明かな　許六

去來曰、予此趣向ありき。句は有明の花に乘込といひて、月毛駒・芦毛馬とは詞つまれり。の文字を入れば口にたまれり。駮馬は雅ならず。紅梅・鏡月毛・川原毛などおもひめぐらして首尾せざりしが、其後許六が句を見て不才を嘆ず。こゝに畠山左衞門佐といへば大名の名と成、山畠佐左衞門といへば一字をかへず庄屋の名なり。先師曰、句とゝのはずんば舌頭に千轉せよ、とありしも此事也。（去來抄、同門評）

「一五五」

廿日あまりの月かすかに、山の根ぎはいとくらく、駒の蹄もたど〳〵しくて、落ぬべきあまたゝびなりけるに數里未だ鷄明ならず。杜牧が早行の殘夢小夜の中山にておどろく。

馬に寐て殘夢月遠し茶の煙

此句古人の詞を前書になして風情を照す也。初は、馬上眠からんとして殘夢殘月茶の煙と有を一たび、馬に寐てと初五文字をしかへ、後又句に拍子有てよからずとて、月遠し茶の煙と直さ

れし也。（あかさうし）

「一五六」

去來曰、先師は門人に教給ふに、其とば極なし。予に示し給ふには、句毎〻にさのみ念を入る物にはあらず。又句は手づよく俳意たしかに作べしと也。凡兆には一句わづかに十七字なり。一字もおろそかに置べからず。誹諧もさすがに和歌の一體なり、句にしをりの有やうに作るべしとなり。是は作者の氣性と口質によりてなり。あしく心得る輩は迷ふべきすぢなり。同門の中にも、こゝに迷をとる人多し。（去來抄、修行教。一部分「しをり」の項に重出）

註。「旅寐論」に同旨の文が見えてゐる。

「一五七」

夕すゞみ疝氣おこして歸けり　去來

予が初學の時、發句の仕やう窺けるに、先師曰、發句は句つよく俳意たしかに作すべしとなり。試に此句を賦して窺ければ、又是にても大笑し給ひけり。（去來抄、先師評）

「一五八」

題の心たしかに有やうにするが、上手ののがれ成べし。八朔の句に

八朔や淺黄の紋のあたらしく



此句を先師曰、是は頭の五文字をのけて、外の「七夕や」としても夫になり、「菊月や」としても、九月の句に成る事なり。題の心うすきなり。八朔ならではそれとしれぬ樣に、治定の句を工夫すべしといふに、

八朔や上着下着を取てをき

「七夕や」にては少しもおかしからず。右の句なれば治定の八朔なり。けふばかりのはれなればや、取出して少かびくさき氣も有べし。八朔の五文字たしかに居はるなり。（蕉門俳諧語錄、上）

「一五九」

發句の事は行て歸る心の味也。たとへば、山里は萬歳おそし梅の花　といふ類なり。山里は萬歳おそしといひはなして、むめは咲るといふ心のどくに行て歸るの心發句也。山里は萬歳の遲といふ斗のひとへは平句の位なり。先師も發句は取合ものと知るべしと云侍るよし、ある俳書にも侍る也。題の中より出る事はすくなき也。もし出ても大樣ふるしと也。（くろさうし）

註。「發句の事は行て歸る心の味也。」といふことも恐らく芭蕉の考を祖述してゐるものと思はれる。又「發句は取合物」「題の中より出る事は皆ふるし」といふことは「宇陀法師」にも見えてゐる。

「一六〇」

師ノ云、發句はとり合物也。二ッとり合て、よくとりはやすを上手と云也といへり。有難おし

へ成べし。（篇突）

註。「誹諧問答青根が峯、自得發明辯」に同旨の文が見えてゐる。

「一六一」

（去來云）凡發句は一物の上になき物にあらず。今證句少々揚て是を辨ず。まづ一物の上に成たる句は、

毛衣につゝみてぬくし鴨の足　　先師

此句は殊に一物の上にて作したると、支考に語り給ひける句となん。（旅寐論）

「一六二」

先師曰、發句は頭よりすら〳〵といひくだし來るを上品とす。

洒堂曰、先師曰、發句は汝が如く、物二ッ三ッとりあつめて作るものにあらず、こがねを打のべたるやうにありたしとなり。

先師曰、發句は物をとり合すれば出來る物也。夫をよく取合するを上手といひ、あしきを下手といふなり。許六曰、發句は取合て作する時は、句多く出來るものなり。初學の輩これをおもふべし。功者に及ては取合・不取合の論にはあらず。（去來抄、修行敎）

註。前の部分と同旨のこと「旅寐論」にも見えてゐる。

「一六三」



又いはく（師のいはく）、季をとり合するに、句のふるびやすき煩有、とありし時も侍る也。門人つねに心得べき詞なり。（くろさうし）

「一六四」

早稲の香やわけ入右はありそ海

一おねは時雨るゝ雲か雪の不二

この句、師のいはく、若大王（國カ）に入て句をいふ時は、その心得あり。都に名ある人かゞの國に行て、くんせ川とかいふ川にて、こりふむと云句あり。たとへ佳句とても其信をしらざれば也。有そもその心遣ひを見るべし。又不二の句も山の姿是程の氣にもなくては、異山とひとつに成べし。（あかさうし）

「一六五」

先師曰、凡、贊名所の發句は、其贊其所の發句と見ゆるやうに作るべし。西行の贊を定家の繪にも書、明石の發句を松島にも用ひ侍らんは拙き事なるべし。（去來抄、故實）

「一六六」

（去來云）一とせ人〳〵集りて木曾塚の句を吟けるに、先師一句も取給はず、門人に語て曰、都て物の讃・名所等の句はまづその場をしるを肝要とす。西行の贊を文覺の繪に書、明石の發句

を松島にも用ひ侍らんは淺ましかるべし。句の善惡は第二の事也となり。我むかし先師の木曾塚の句を拙き句也と思へり。此時はじめてそのうたがひを解す。乙州、木曾塚の句は勝れたる句にあらずといへ共、爰をゆるして猿蓑集に入べきよし下知し給ふ。（旅寐論）

註。以上三篇については「一〇三」「一〇四」を參照。

「一六七」

師のいはく、或人の句は艶をいはんとするに依て句艶にあらず、艶は艶いふにあらず。又或人の句はしほりなし。しほらんずるが故にしほりなし。又或人の句は作に過て心の直を失ふ也。心の作はよし、詞の作好べからずと也。（くろさうし。「しをり」の項に重出）

註。「五三」を參照。

「一六八」

賽錢も用意顏なり花の森　去來

先師曰、花の森とは聞なれず、名處なるにや。古人も森の花とこそ申侍れ。詞を細工して、かかる拙き事云べからずと也。（去來抄、先師評）

「一六九」

諸集のうち聞がたき句あるよしをたづね侍れば、師のいはく、故ある句は格別の事也。さもなくて聞得ざると有は、聞へぬ句と思ふべし。聞へぬ句多しと也。（くろさうし）



「一七〇」

（上略）玉句之内三四句も加筆仕候。句作のいきやうあらまし如レ此に御座候。

一、一句前句に全躰はまる事古風中興共可レ申哉

一、俗語の遣ひやう風流なくて又古風にまぎれ候事

一、一句細工に仕立候事不用之事

一、古人の名を取出て何〻の白雲などと言捨たる事第一古風に而候事

一、文字あまり三四字五七字餘りに而も句のひゞき能候へば、一字に而も口にたまり候を御吟味可レ有候事（書翰集、高山傳右衞門宛の一部。天和三年五月十五日）

註。字餘りの句については「二〇〇」參照のこと。

「一七一」

（上略）句評之事點は相違有物にて御坐候。其段常の事ながら其元に而俤ある事爰元ニては新敷、其地にて珍らしき句此地ニ而は類作有樣の事も御坐候物に御座候へば、句評ハ心にたがふ事も可レ有ニ御座一候。只自レ是行先大切に御座候間、能〻御心をめぐらし御工案御尤存候。句作に作をこしらへ句毎に景をのみ好候ハヾ頓而古く成べし。めづらし過候ハヾ飽心出可レ申、こしやくに成候ハヾ後句石で手をつめたるやうになるべし。俳諧地をよく御つゞけ被レ成、處〻風景句作

ほのか成やうにあれかしと、此後の事を被レ存るゝのみに御座候。此外申事無二御坐一候へば不具頓首。（書翰集、東藤・桐葉宛。貞享元年三月十四日。一部分「連句」の「附合論」に重出）

「一七二」

駒牽の木曾やいづらん三日の月　　去來

今や引らん望月の駒、といへるをふりかへて、木曾や出らん三日の月　といへり。先師曰、此句は算用を合せたる句なりと、あざけり給へり。（去來抄、先師評）

「一七三」

船にわづらふ西國の馬　　蕉根の句也

許六こゝろみの點を乞ける時、此句に長をかけたり。先師曰、いまはかゝる手帳らしき句はきらひ侍る。是等は手帳なり。長あるべからず。重て上京の時、此句何ゆゑに手帳に侍るや。先師曰、船の中にて馬の煩ふ事はいふべし。西國の馬とまでは、よくこしらへたる物なりとなむ。

弓張の角さし出す月の雲　　去來

去來問曰、此句も手帳なるべきや、先師曰、手帳ならず、雲も角も弓張月も、いはねば一句きこえず。（去來抄、先師評）

「一七四」

305670



靈棚の奥なつかしや親の顔　　去來

はじめは、面影のおぼろにゆかし魂祭　といふ句なり。此時添書に、祭時は神いますが如しとやらむ、靈棚の奥なつかしく覺侍るよしを申贈る。先師返事に、靈祭尤の意味ながら、此分にては古びに落申べく候、註に靈棚の奥なつかしやと侍るを、何とて句になさゞるや、とおどろかし給ひけり。（去來抄、先師評）

「一七五」

じだらくに寐れば涼しき夕かな　　宗次

さるみの撰の時、今一句の入集を願ひて、數句吟じ侍れど取べき句なし。一夕先師の傍に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥しなんとおほせられければ、御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると申ければ、先師曰、是こそ發句なれとて、今の句に作りて入集せさせ給けり。（去來抄、先師評）

「一七六」

梅若菜まり子の宿のとろゝ汁

この句、師のいはく、たくみにて云る句にあらず。ふと云てよろしと跡にてしりたる句也。かくのどくの句は、又せんとは云がたしと也。東武におもむく人に對しての吟也。梅若なと興じて、まり子の宿にはといひはなして當たる一躰なり。（あかさうし）

「一七七」

（許六云）一とせ芭蕉庵にて三吟はいかいありける時、

寒菊の隣もありやいけ大根　許六

寒菊にいけ大根同季のとり合せ也。

多さし籠る北窓の煤　翁

此句、世間煤を雪とする句也。煤の一字はいかいのよみかたにして、達人の手柄といふはこれ也。しらぬ人は等閑に見通し、蕉門の不可思議をしらず。第三嵐蘭にあたれり。數剋案じ申され侍れど出ず。後に宿のよせ馬など、いつも此樣な横小路へ牽入置候。と申されければ、先師のいはく、よせ馬といふもの、今まで何千度出候やらんしらず。是みな世にある三合のうち也と申されければ、在郷より宵から馬をつれ來り寒がらせ申と、嵐蘭かさねて申されければ、眞直にそれがよき第三にて侍る也とて、

月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭

と、先師句作り申されたり。（歴代滑稽傳、俳諧指南。「附句評」に重出）

「一七八」

むかし故翁に供せられて、三河の新城といふ所にて「角前髪のにくい疱(ほう)づら　といふ花前に、人〳〵案じ入たるを、我その句評に、いつぞや近江の守山を過るに、かゝるわつぱの疱(ほう)づらが、



太神樂のさゝらを摺たれといへば、故翁は例の笑ひながら、論語の多識はいかに心得たるぞ。子貢には文をこらし、子路には文をすゝむ。教誡の二用もその事也。それをなどいはざるやと「咲花に獅子のさゝらを摺ならし　と其句を其まゝにさだまりぬ。（十論爲辨抄、第九段。「附句評」より重出）

註。以上十二篇については「九二」より「一〇三」まで參照。

「一七九」

（翁曰）人の案じぬ處を致さんとて、心のかよひなき事を行過とは申べく候。たとはゞ四月朔日衣がえのあさ、例より寒く、小袖かさねざれば寒きとし、紙帳を賣ありくが如し。人の賣ぬ先に賣取んとふれありき候得ども、人の心いまだ多をわすれず。蚊の事などは思ひよらざれば、人も買ず候。蚊の出る比ならねば、人の心はつとは思ひよらず候。いにしへの歌人の、正風躰と申てよみ給ふ歌ども、此處にて候。（蕉門俳諧語錄、下）

「一八〇」

（翁曰）句は七八分にいひつめてはけやけし。五六分の句はいつまでも聞あかず。（蕉門俳諧語錄、下）

「一八一」

蘿の葉の、、、、、　何〻とやらん跡は忘れたり。是張の人の句也。

此句は、蘿の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹かへさるゝと云句なるよし。予先師に此句を語に、先師曰、發句は斯の如くくま〳〵まで、いひつくすものにあらずとなり。支考かたはらに聞て大に感驚し、はじめて發句といふ物を知侍るとて、此頃ものがたり有けり。予其時も等閑に聞なしけるにや、此事あとかたもなくうち忘侍るこそいと本意なけれ。（去來抄、先師評）

「一八二」

下臥につかみわけばやいとざくら

先師路上にて語給ふ。此頃其角が集に此句あり、いかに思てか入集しけむと。去來曰、いとざくらの十分に咲たる形容、よくいひおふせたるに侍らずや。先師曰、いひ課て何かある。予こゝにおいて肝に銘ずる事あり。はじめて發句になるべきとゝ、成まじき事とを知れり。（去來抄、先師評）

「一八三」

稲妻を手に取るやみの紙燭かな

この句、師のいはく、門人この道にあやしき所を得たるものにいひて遣す句也となり。そのあやしきをいはんと、取物かくのどし。萬心遣ひして思ふ所を明すべし。（あかさうし）



「一八四」

師のいはく、手のうちに蟬をにぎりて鳴する事を、宜ものと句にしばらくとりなやみ侍る也。古みをとらんとせしと、おそろしきものにあひたるやうに語出られし也。（くろさうし）

「一八五」

師、句作り示されし時、腹に戰ものいまだ有と也。感心の趣也。是師の思ふ筋にうとく、私意を作る所也。元を勤ざれば成るといふ事なく、只私意を作る也。工夫して私意をやぶる道有べし。（くろさうし）

「一八六」

又句作りに、師の詞有。物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。又趣向を句のふりに振出すといふとあり。是その境に入て物のさめざるうちに取て姿を容る敎也。句作になると、するとあり。内をつねに勤て物に應ずれば、その心のいろ句となる、内をつね勤ざるものは、ならざる故に私意にかけてする也。（あかさうし）

「一八七」

（許六曰）師の云、發句案ずる事、諸門弟題號の中より案じいだす。是なきもの也。餘所より

尋來れば、さて〳〵澤山成事なりと云り。予が云、我、あら野・猿蓑にて此叟を見出したり。予が案じ樣、たとへば題を箱に入て、其箱の上にあがりて、箱をふまへ立あがつて、乾坤を尋るといへり。師の云是也。さればこそ、

寒菊の隣もありやいけ大根

といふ句は出る也といへり。（誹諧問答青根が峯、自得發明辨）

「一八八」

師の曰、句は天下の人にかなへる事はやすし。一人二人にかなゆる事かたし。人のためになす事に侍らばなしよからんと、たはれの詞なり。（くろさうし）

「一八九」

師の曰、其角は同席に連るに、一座の興にいる句をいひ出て、人〻いつとても感ず。師は一座その事なし。後に人のいへる句はある事も有と也。さあるべき事也。云く、座によりて、一座の人にとれて句をそこなふ事あり。門人常に心得べし。其角は生質としてこゝに居らずと也。（くろさうし。「個人評」の「其角評」に重出）

「一九〇」

選場に俳諧のよしあしは、一座の囃方（ハヤシ）によるべしとは、白馬に祖翁の遺訓なるが、云云。（十論爲辨抄、第九段）



「一九一」

又いはく（師のいはく）、人の方に行くに、發句心に持行事あり。趣向・季のとり合障りなき事を考べし。句作りはのこすべし。孕句出たるは出る品うるはしからずと也。（くろさうし）

「一九二」

いせの蜑の貝とるには、をのが子を舟にのせて、おとこにこがせて出る也。さてかづきに入て程へぬれば、その子の乳を乞て泣ク聲の底に聞ゆるに、やがてうかみてからき息をも吹あへず、舷に手をかけて、乳房さし入てはごくみける。此有樣まことに、仁心の發動せる所なれども、一句に云とることのかたき也。と、翁の雜談を承りければ、露沾公にて、

うき草をつかねて枕さだめけり　と云に
蜑の子なれば舟に乳をのむ

と付たれども、三才圖彙の繪などみるやうにて、さのみ一句の感賞にも及ばず成にけり。（雜談集）

「一九三」

師のいはく、下句・上句ともに二字三字の間にあり。またその二三字に甚ぬかり落る句あり。骨折べき所也。（くろさうし）

「一九四」

又、琴・三味線の類、句ふるびて世上あつかひかねたり。心見に句して見よと、いろ〳〵句作りを見られし時もあり。道にすゝむ者の勤る所、かくの事もあるべき示し也。（くろさうし）

「一九五」

師のいはく、絶景にむかふ時は、うばはれて不レ叶、物を見て取所を心に留メて不レ消、書寫して靜に句すべし。うばはれぬ心得もある事也。そのおもふ所しきりにして、猶かなはざる時は書うつす也、あぐむべからずと也。師、松島にて句なし、大切の事也。（くろさうし）

「一九六」

師ノ云、時鳥はいひあてる事もあるべし、うぐひすは中〳〵成がたかるべしといへり。（篇突）

「一九七」

師のいはく、結び題の發句などの時に、たとへば五句ある時は秀作三句は過る也。當座の題は猶其心得あり。哥の題の事もかやうの事とやら聞へ侍るとなり。（くろさうし）



「一九八」

等類の事おろそかにすべからず。師のいはく、他の句より先我が句に我が句等類する事をしらぬもの也。よく思ひ別て味べし。若わが句に障る他の句ある時は必わが句を引べし。趣向に表と裏の事あり。句にもよるべしとは言ながら、大樣のがして等類になさず取べし。ふるき連哥に、思はぬ方にちらす玉章　と云前句に、山風や枝なき花を送るらん　と有。この句山風の枝なき花を送るこそ全ちりたる躰、前句同意の連歌と沙汰しけるよし有。又いはく、

都をば霞とともに出しかど
　秋風ぞふく白河のせき
都にはまだ青葉にて見しかども
　もみぢちりしく白川の關

此哥の夏、師のいはく、いにしへより色をわかちたる作意によりて等類のがれたると云來る也。さもあるべし。今師の思ふ所、後のうた、卯月比都を出て十月に及び白川に至り、紅葉のちり敷たるを見て前の能因法師の哥を思ひ出し、彌その哥の妙所を感德（得）したりと云心より詠る哥なるべし。是にて等類よくのがるゝと云り。（しろさうし）

「一九九」

（許六云、）等類をのがれる事、師說、

都をば霞とともにいでしかど　能因
秋風ぞふくしら川の關

都をば青葉とともに出しかど　頼政
紅葉散りしくしら川の關

此二首心詞少しもかわらねども、定家卿の判に云、頼政が哥は、能因が哥を本歌として、心詞少しもかはらねども、是等類にあらず。頼政が哥は色を詠みたる哥也。これ產所の各別なる事を、先達能く聞分給ひて、其わかちをたて給ふは難し有き判也。加様の先達ありてこそ、俳諧も面白く侍れ。（誹諧問答青根が峯、自得發明辨）

註。等類の個々の作品についての評は、「句評」の項の「二九八」から「三〇三」までに纒めておいた。猶「二〇四」にも等類について參考とすべきものがある。

「二〇〇」

朝顔や畫は錠おろす門の垣
碪うちて我に聞せよや坊が妻
枯枝に烏のとまりけり秋の暮

此句ども字餘り也。字餘りの句作の味ひは、その境にいらざればいひがたしと也。かの、人は初瀬の山おろしよと有、文字餘の事など云出て、なくてなりがたき所を工夫して味ふべしと也。（あかさうし）

## （八）句評

「二〇一」

蓬萊にきかばや伊勢のはつ便　芭蕉

深川よりの文に、此の句さま〴〵の評あり、汝いかゞ聞侍るやとなり。去來曰、都又は古郷の便ともあらず、伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに、神代をおもひいでゝ、たより聞ばやと、道祖神のはや胸中をさはがし給ふとこそ承侍れと申。先師返事に、汝が聞く處にたがはず、今日神のかう〴〵しきあたりをおもひ出て、慈鎭和尚の詞にたより、初の一字を吟じ、清淨のうるはしきを蓬萊に對して結びたる也と。（去來抄、先師評）

「二〇二」

とし〴〵や猿にきせたる猿の面

此歳旦、師のいはく、人同じ處に止て、同じ處にをらで落入る事を、悔ていひ捨たるとなり。（あかさうし）

註。「八六」「三九三」參照。

「二〇三」

此君舍より白米五斗發句一句

一に俵ふまへて越せよとしの坂

かくめぐみたまふに、只四壁なるかりのすまゐにハ過たるとしだまながら、寐ざめこゝろよくて

元日や疊の上の米俵　北枝

翁文の中

さて〳〵感心不レ斜、神代のこともおもはるゝ、といひける句の下にたゝんことかたく候。神代の句は守武神主身分相應に情の奇なるところ御座候。米俵ハ其元相應に姿の妙なるところ有レ之候。別而歳旦、歳暮、不相應なるハ名句にても感慨なきものニ候。今年天下第一の歳旦可レ成と、京・大津の作者も致三稱美一候。不備（書翰集、北枝宛全文、但し追て書省略。元祿三年正月廿四日）

「二〇四」

二日にもぬかりはせじな花の春

この句は、元日ひるまでいねてもちくひはづしたりと前書あり。此句の時師の曰、等類氣遣ひなき趣向を得たり。此手爾波は二日にはといふを、にもとは仕たる也。にはといひては、あまり平目に當りて聞なく、いやしと也。其角、たびうりにあふうつの山　といふも、あはんといふ所をあふとは云るゝ。喜撰が、人はいふ也の類なるべし。（あかさうし。「作法」の項に重出）

「二〇五」

からさきの松は花より朧にて　芭蕉

或人、にて留りの難あらんやと云。其角答曰、にては哉にかよふゆゑ、哉留の發句にて留の第三を嫌ふ。哉といへば句切迫れば、にてとは侍るとなり。呂丸曰、にて留の事は其角が解あり、又是は第三の句なり、いかに發句とはなしたまふや。去來曰、是は卽興感偶にて、發句なる事疑なし。第三は句案に渡る。もし句案にわたらば第三等にくだらん。先師重て曰、其角・去來が辨皆理屈なり。我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと。（去來抄、先師評。「作法」の項に重出）



「二〇六」

（上略）大津尙白亭にて、

辛崎の松は花より朧にて

と申されけるこそ、一句の首尾、言外の意味、あふみの人もいまだ見のこしたる成べし。其けしきこゝにも、きら〳〵うつろひ侍るにやと申たれば、又かたはらより、中古の頑作にふけりて、是非の境に本意をおほはれし人さし出て、其句、誠に誹諧の骨髄得たれども、慥なる切字なし。すべて名人の格的には、さやうの姿をも、發句とゆるし申にやと不審しける。答へに、哉とまり

の發句に、にてどまりの第三は、嫌へるによりてしらるべきか。おぼろ哉と申句なるべきを、句に句なしとて、かくは云下し申されたる成べし。朧にてと居(すゑ)られて、哉よりも猶徹(てつし)たるひゞきの侍る。是、句中の句、他に適當なかるべしと。此論を再ビ翁に申述侍れば、一句の問答に於ては然るべし。但シ、予が方寸の上に分別なし。いはゞ、さゞ波やまの〻入江に駒とめてひらの高根のはなをみる哉。只、眼前なるはと申されけり。(雜談集)

「二〇七」

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉

先師曰、尙白が難に、近江は丹波(異本、難波)にも、行春は行年にもなるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰、尙白が難あたらず、湖水朦朧として春ををしむに便有べし。殊に今日のうへに侍ると申き。先師曰、しかり、古人も此國に春を愛すると、をさ〳〵都におとらず。去來此一言こゝろに徹す。行年近江に居たまはゞ、いかでか此感のましまさん。行春丹波(異本、難波)にゐまさば、もとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事眞なるかなと申。先師曰、汝や去來、ともに風雅をかたるべきものなりとよろこび給へりしか。(去來抄、先師評。「個人評」の「去來評」に重出)

「二〇八」

春風にこかすな雛の駕籠の棒　荻子

先師、此の句を評して曰、伊賀の作者あだなる處を作して尤なつかしとなり。丈艸曰、伊賀のあだなるを、先師はしらず顏なれど、そのあだなるは先師のあだならずや。(去來抄、先師評)



「二〇九」

をと〻日はあの山越つ花ざかり　去來

是は猿蓑二三年前の吟なり。先師曰、此句いま聞人有まじ、一兩年を待べしとなり。其後杜國が徒と、よし野行脚し給ひける道よりの文に、或はよし野を花の山といひ、或はこれは〳〵とばかり　と聞えしに魂を奪れ、又は其角が櫻さだめぬ　といひしに氣色をとられて、よし野に發句もなかりき。たゞ、をと〻ひはあの山越えつ　と日〻吟じ行侍るとなり。其後此句をかたり、人もうけとりけり。いま一兩年はやかるべしとは、いかでか知給ひけん。予は却て夢にもしらざる事どもなり。(去來抄、先師評)

註。「旅寐論」「葛の松原」に同旨の文が見えてゐる。

「二一〇」

手をはなつ中に落けり朧月　去來

魯町に別る〻時の句也。先師曰、此句惡しといふにはあらず。巧者にてたゞいひまぎらかしたるなり。去來曰、いかさまにさしてなき事を、句上にてあやつりたる所あり。しかれどもいまだ十分に解せず。予が心中に一物侍れども、句上にあらはれずと見ゆ。いはゆる是は意到句不レ到也。(去來抄、先師評)

「二一一」

赤人の名はつがれたりはつ霞　　史邦

先師曰、中の七文字よくおかれたり。發句の長高く、意味すくなからず。（去來抄、先師評）

「二一二」

予〳〵糸ざくらはら一ぱいに咲にけり　と吟じければ、句我まゝなりとわらひ給ひけり。（去來抄、故實）

「二一三」

御子良子の一本ゆかし梅の華

此句は一とせいせに詣て、老師梅の事をたづねしに、子良の舘のあたりに漸一本ふるき梅あり。その外に曾てなしと社人の告けるを、則句としてとあられし也。師のいはく、むかしより此所に連俳の達人多く句をとゞむに、終に此梅のことをしらずと悦ばしく聞出ける也。風雅の心がけより此事とゞまるを思ひしれば、やすからぬ所也。（あかさうし）

「二一四」

雲雀鳴中の拍子や雉子の聲

此句、ひばりの鳴つゞけたる中に、雉子折〳〵鳴入るけしきをいひて、長閑なる味をとらんといろ〳〵して是を究。（あかさうし）



註。明記されてゐないが、芭蕉の評と推定して掲載した。

「二一五」

木のもとは汁も鱠もさくら哉

この句の時、師のいはく、花見の句のかゝりを少し得て、かるみをしたりと也。（あかさうし）

「二一六」

蛇くふときけばおそろし雉子の聲

此の句、師のいはく、うつくしき兒かく雉子の蹴爪かな　といふは其角が句也。蛇くふといふは老吟也と也。（あかさうし）

「二一七」

一とせに一度つまるゝ若菜哉

此句、その春文通に聞え侍る。その後直にたづね侍れば、師の曰、其比はよく思ひ侍るが、あまりよからず、うち捨しと也。（あかさうし）

「二一八」

同、（門人の句に）花鳥の雲に急ぐやいかのぼり　といふ句有。人のいへるこの句聞がたし。よく聞ゆる句になし侍れば句おかしからず、いかにといへば、師の曰、いかのぼりの句にしてしかるべしと也。聞の事は何とやらおかしき所有を宜とす。此類の事はある事なり。むかしの哥にも、小男鹿のい

るの〻薄初尾花いつしか君がたまくらにせん　と云もその類也。聞とげざれどもあはれなる歌也

といひならはしたるとなり。（あかさうし）

「二一九」

同、（門人の句に）鶯に橘見する羽ぶき哉　といふ句あり。下の五文字、師の手筋よく思ひ知たるはと也。四ツ五器のそろはぬ花見心かな　と云も爰なるべしと也。（あかさうし）

「二二〇」

白桃や雫もおちず水の色　桃隣

緋桃は火のどくならねど、白桃はながる〻にちか〻るべし。ひさしく蒭水の勞をたすけて、此句の入處あさからずと、阿叟もをきあがり申されし也。（葛の松原）

「二二一」

嬉しからぬ月日身につもりて、といふ事を題にしてヒナヤ立甫ノ句

はななりし身をば何とて捨坊主

いづれにもおもしろき句に候。我も此心とりて

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

いかゞあるべく候哉、此句風情おもく立圃句かるくおもしろく候。とかく上手と下手の違、はづかしき物に候。以上。（書翰集、三千宛、全文。延寶年中）



「二二二」

さゞ浪や志賀のみやこはあれにしをむかしながらの山櫻哉、と忠のり卿の詠じ給ひし哥の心をふまへて

花咲て七日鶴見るふもとかな

さて〻哥の心とは格別いやしきものに候。哥之雜口成とは尤ニ候。併我〻が口には誹諧ゟ外ニハ出不レ申候。とかく明し暮したのしむ物此雜口斗にて命を果し可レ申候。（書翰集、左門宛の一部。貞享三年）

「二二三」

我も哥は及まじきが、せめては句成共と思ひて一句

たれやらが姿に似たり今朝の春

いかゞあるべく候哉。少斗は歌の心に似寄り候哉。さて〻あさましき俳諧也。思ふこ〻ろもこもり候也。（書翰集、如行宛斷簡。貞享年中）

「二二四」

明星やさくらさだめぬ山かつらと云し句、山中の美景にけをされ古き哥どもの信を感ぜし敍、明星の山かつらに明殘るけしき、此句のうらやましく覺候也。（書翰集、其角宛全文。元祿元年）

「二二五」

過し比は大和へ參候而所〻歩行申候。さてはいづくも同じ秋の夕ぐれとよみし哥の心なるべし。道〻のほ句ちよと一句申入候。

猶見たし花に明ゆく神の顔

あまり〳〵出かね申候ニ付ケ樣のあまき一句を口すさび申候。（下略）（書翰集、松風宛。元祿元年）

「二二六」

芳野にてさくら見せうぞ檜木笠

右之句ハ深川庵を出るとて致候。さて

よし野にて

山吹のほろ〳〵散か瀧の音

如レ此ニ候。兩句共ニ偖〻不出來千萬口惜候。何分貞室句ニハ叶ひ不申候。（下略）（書翰集、其子宛。元祿元年）

「二二七」

（上略）五百年來のむかし西行の撰集抄に多くの乞食をあげられ候ニ、愚眼故、能人見付ざる悲しさに、二度西上人と思ひかへしたる迄に御座候。京の者どもこもかぶりを引付の卷頭に何事にやと申由、あさましく候。（書翰集、此筋・千川宛。元祿三年卯月十日）



註。誰人か孤着ています花の春　芭蕉

「二二八」

扨は貴丈御發句御書置別而面白く御座候。愚老ワキと存候得共兩用ながら一句御返句致候。

水仙や白き障子のともうつり

如レ此ニ候。いしくは手込存候體之句にて御座候。猶追〻可ニ申承一候。以上（書翰集、流水宛の後半。元祿四年）

「二二九」

梅か香に昔の一字あはれ也　武陵芭蕉

一歳の夢のごとくにして猶俳立さらぬ歎のほどおもやる斗に候。（書翰集、梅丸宛の全文。元祿七年）

「二三〇」

此中素中集にはるの句をのぞまれ候而即席、

鶯の雀よけ行枝うつり

いかゞ、くるしかるまじきや。とかく手ぬるくなり候而きのどく〳〵。（書翰集、去來宛の一部。元祿七年）

「二三一」

日の春をさすがに鶴のあゆみかな　其角

此五文字よろしからず。「春の日」か「立春は」と置べき句なり。されども其角が手振なり。其時は花やかに聞え侍りしが、今是を味ふにあやし。（蕉門俳諧語錄、下）

註。附句評「三六〇」の發句評參照。

「二三二」

田のへりの豆つたひ行螢かな　万乎

もとは先師の斧正ありし凡兆が句なり。猿蓑撰の時、凡兆曰、此句見る處なし、除べし。去來曰、へり豆をつたひ行螢の光・闇夜の景色、風姿ありといふ。凡兆ゆるさず。先師曰、兆もし捨ば我拾はむ。幸伊賀の連中の句に是に似たるあり、夫を直し此句となさんとて、終に万乎が句と成けり。（去來抄、先師評）

「二三三」

きられたる夢はまことか蚤の跡　其角

去來曰、其角は實に作者にて侍る。はつかに蚤のくひつきたる事、誰かかくはいひ盡さん。先師曰、しかり、かれは定家の卿なり。さしてもなき事を、ことゞくしくいひつらね侍るときこえし評、詳なるにゝたり。（去來抄、先師評。「個人評」の「其角評」に重出）



「二三四」

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

猿蓑の撰に、予誤て畦づたひと書入たり。先師曰、畦うつりと傳ひと形容・風流各別なり。殊に、畦うつりして蛙啼なりともよめり。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず、句を聞事のおろそかなる故なりとて、きげんあしかりけり。（去來抄、先師評。「修行教」に重出）

「二三五」

兄弟の顔見あはすやほと〻ぎす　去來

去來曰、此句は五月廿八日、曾我兄弟の互に顔見合ける頃、子規などもうち啼けむかし。むかし光源氏の村雨の軒端にたゝずみ給ひしを、紫式部がおもひやりたる趣をかりて作す。先師曰、曾我とのばらとは聞ながら、一句いまだいひおほせず。其角が評も同前なりと、深川より評し給ふ。許六曰、此句は心餘りて詞たらず。去來曰、心餘りて詞たらずといはんははゞかりあり、たゞいひおほせぬとも評すべし。丈艸曰、今の作者はさかしくかけ廻りぬれば、是等は合點の內なるべしと共に笑けり。（去來抄、先師評）

「二三六」

つかみあふ子どものたけや麥畠　游力

凡兆曰、是麥畠は麻畠ともふれんか。去來曰、麥麻になりても、よもぎになりても、くるしから

ずと論ず。先師曰、又ふれる・ふれぬの論かしがまし、無用なりと制し給けり。見る人察せよ。（去來抄、先師評）

「二三七」

六月や峯に雲をくあらし山　正秀

この句落柿舍の句也。雲置嵐山といふ句作、骨折たる處といへり。（あかさうし）

「二三八」

川風やうす柿着たる夕涼み

此句すゞみのいひ樣、少心得て仕たりと也。（あかさうし）

「二三九」

帷子を洗はずにやる名殘かな

正秀が性はあらし。かゝる微細の風情にあまりて、曾良が大和路の皈路をとゞめかね、角はおくり申されしとかや。〻〻猪に吹かへされしともしかな　といひ得て、肌たはまざるは、その人のいひける風情なるを、〻〻薪ともならで朽ぬる案山子かな　といへるは風雅の用處あさからずと、阿叟もうなづき申されしよし。（葛の松原）

「二四〇」

唇に墨つく兒のすゞみ哉　千那



暑からず寒からぬ物に、むすび合たる社、作者の手柄とは云べけれ。涼みと云句、ひとゞくよくいひなぐりて置侍れ共、これは大切成所を本意とする題にて、中〳〵いひ負せ難からん。はつか成所に、手柄をあらはし侍る社、すゞみの情なれとて、兒の涼は師も一夏一句と感じ給へる也。（篇突）

「二四一」

（許六）亦云、噂といふは、予が句にいつぞや、洛の和及が弟子何某といへるもの來て、予と俳諧せん事をのぞむ。其時、

都人の扇にかける網代かな

といふ句せしなり。都人の挨拶に、扇はよき噂と思ひて、多の頃なれども取り合侍る也。此句翁に語り侍りしに、能き挨拶の仕樣也とてかんじ給ふ也。（誹諧問答青根が峯、自得發明辨）

「二四二」

長の立ところかぎりや菱の花　雲鴻

此菱の花は落語子が便して、阿叟も一筋の風流いとよしと申されけるよし、名殘にしるし侍る。（笈日記）

「二四三」

追而申〻。其角がせし句ニ

さみだれや顔もまくらも物の本

とせし句あり。さのみ能句共おもはず居申候所、此間之ふりつゞく雨ニ打ふし〳〵寐て居て、物の本を取出して見る顔もまくらも本だらけニ成をおもふては、句殊之外におもしろく成候。其角が句の類をせんと思ふて句作りいたし見申候へ共さて〳〵句おもく成候而出來兼申候。漸〻此句とかく一句おもく成候而いかゞ。（下略）（書翰集、玉風宛。貞享四年）

「二四四」

別紙申入候。さては日外ちらりと咄申候伊勢の曾良がせし松しまの句に

松しまや鶴に身をかれ時鳥

成程〳〵是などは其儘にせし句なれども、手爾葉と云ひ心の奥ゆかしき風情天晴面白く候。愚身なども此類を如才なくして見たく候へ共、中々出不レ申候。とかく曾良などは今時の上手と申す内へ入候。（下略）（野坡宛。但し書翰集には果して野坡か否か疑問なる旨註がある。元祿三年）

「二四五」

其許郭公の句いかゞ候哉、うけ給度候。此方にて勝而出來不レ申候。漸〻此句いたし候。

ほと〻ぎす啼や五尺のあやめ草



無ニ致方一句にて御ざ候。必〻御わらひ被レ下まじく候。世間にてはつと申ほどの句と存候得共出來不レ申候。（書翰集、左水宛、前後略。元祿五年五月十日）

「二四六」

追而申入候。水無月之ほ句如レ此に候。

水無月や鯛はあれども鹽鯨

右之句にて御座候。外にはおぼへ不レ申候。おもしろからず候へ共、どうも〳〵いたし樣無御座ニ候に付、去人の所へ行候へば亭主鹽くじらを料理して居候あと故、其節よくいたし互に笑ひ申事ニ候。（下略）（書翰集、ケ來宛。元祿五年六月廿一日）

「二四七」

荷兮方にて

世を旅に代かく小田の行もどり

野水隠居所支度の折ふし

涼しさを飛驒の工がさしづかな

すゞしさの指圖にみゆる住居哉

句作二色の内、越人相談候而住居の方をとり申候。飛驒のたくみまさり可レ申候。（下略）（書翰集、杉風宛の追て書。元祿七年五月十一日）

註。句は三句とも芭蕉の作。

「二四八」

別紙を以申進候。此四五日以前ニ木節許へ參候而、風與存寄りて此一句すさび申候。

秋ちかき心よするや四疊半

いかゞ御座あるべく哉。立ながらニハ出來候樣ニ被レ存候。キ樣ニハ茶の湯御好被レ成候故、ほ句方ハ風情おもしろく候故申入候。（下略）（書翰集、用和宛。元祿七年）

註。「鳥の道」その他に、
秋近き心のよるや四疊半
となつてゐる。

「二四九」

病雁の夜寒に落て旅寐かな

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

猿簑撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆曰、病雁はさることなれど、小海老にまじるいとゞは、句のかけりことあたらしく、誠に秀逸なりといふ。去來曰、小海老の句はめづらしといへど、其物を案じたる時は、予が口にもいでん。病鴈は格高く趣かすかにして、いかでか爰を案



じつけんと論じ、終に兩句ともに乞て入集す。其後先師曰、病鴈を小海老などゝ同じどくに論じけるやと、笑ひ給ひけり。（去來抄、先師評）

「二五〇」

（參考）昨夜堅田より致三歸帆二候。愈御無爲ニ御連中相替事無二御座一候哉。拙者散〻風引候而蟹の苫屋に旅寐を佗て風流さま〴〵の事共ニ御座候。

病雁の夜寒に落て旅寢哉

と申候。（下略）（書翰集、茶や與次兵衞宛。元祿三年九月二十六日）

註。句の評言はないが「病鴈の」の句の參考に引用した。

「二五一」

岩鼻やこゝにもひとり月の客　去來

去來曰、洒堂は此句を月の猿とすべしと申侍れど、予は客の字勝りなんと申。先師曰、猿とは何事ぞ、汝此句をいかにおもひて作せるや。去來曰、明月に山野を吟歩し侍るに、岩頭亦一人の騷客を見付たると申。先師曰、是にもひとり月の客と己と名乘出たらんこそ、いくばくの風流ならめ。たゞ自稱の句となすべし。此句は我も珍重して笈の小文に書入けるとなん。予が趣向は一等くだり侍りけり。先師の意をもて見れば、少し狂者の感も有にや。（去來抄、先師評）

「二五二」

炑風の吹とも青し栗のいが

此句、いがの青をおかしとて句にしたる也。吹とも青しと云ふ所にて、句とはなして置たりと也。（あかさうし）

「二五三」

蘭の香や蝶の翅に薫す

此句は、ある茶店の片はらに、道やすらひしてたゝずみありしを、老翁を見知り侍るにや、内に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。其女いはく、我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其比、難波の宗因此處にわたり給ふを見かけて、句をねがひ請たると也。例おかしき事までいひ出て、しきりにのぞみ侍ればいなみがたくて、かの難波の老人の句に、葛の葉のおつるの恨夜の霜　とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物がたり也。其名をてうといへば、かくいひ侍ると也。老人の例にまかせて書捨たり。さのとも侍らざればなしがたき事也と云り。（あかさうし）

「二五四」

桐の木に鶉なくなる塀の内

この句いかゞ聞侍るやとたづねられしに、何とやら一さまある事に思ふよし答へ侍れば、いささか思ふ處ありて歩みはじめたると也。（あかさうし）



「二五五」

ばせを葉はなに〻なれとや秋の風　路通

一生の風雅をこの中にぞ、とゞめ申されけむ。一とせ、初雪に根太のいたむといふ句を結びたるに、卯の花の比こそさも覺えぬべけれと、珍碩が申たれば、阿叟もおかしがり申されしよし。物と我と此情有べし。（葛の松原）

「二五六」

かり寢せん味方が原の女郎花　史邦

馬上に槊を横て吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方がはらのかり寢せんといへる、此郎の風流ならずや。阿叟もあしからずとゆるされ、左右十八につがひ申されしを、深く武具の櫃におさめける也。かの處に名をとゞめけむ、草のゆかりにも、幾秋の手向とはならまし。（葛の松原）

「二五七」

翁北國行脚のころ、さらしなの三句を書とめ、いづれかと申されしに、

俳や姨ひとり泣く月の友

といふ句を可レ然に定たり、と申ければ、誠しか也。一句人目にはたゝず侍れども、其夜の月の天心にいたる所、人のしる事少なり、と悦び申されけり。（雜談集）

「二五八」

霧しぐれ不二を見ぬ日ぞおもしろき

右之一句裏はらの一句いかゞ候哉。扨々むり萬々に候。色々申つくし、仕かたも無二御座一候付如レ是に候。（書翰集、哥笑宛の一部。貞享元年）

「二五九」

雲のうへはありしむかしにかはらねど見し玉だれのうちぞゆかしきノ心を引而

むざんやな甲の下のきりぐす

此句は實盛の館にていたし置候句にて候。いづれニも全部の屆きたるやうに存候。（書翰集、哥友宛の一部。元祿二年）

「二六〇」

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

猿簑撰の時に此句書おくり、冬の月・霜の月置わづらひ侍るよし聞ゆ。衆議冬の月による。先師曰、其角が冬霜に煩ふべき句にもあらずとて、冬の月に定め入集させられける。はじめは文字つまりて柴戸とよめたり。然るに出板の後、大津より先師の文に、柴の戸にあらず、此木戸なり。かゝる秀逸は一句も大切なり。たとへ出板におよぶとも、いそぎ改むべしとなり。凡兆曰、柴の戸・此木戸させる勝劣なし。去來曰、此月を柴の戸に奇（ぎ）て見れば尋常の氣色なり。是を城門にうつして見れば、其風情あはれに物凄き事はかりなし。實も其角が冬・霜にわづらへるもとはりなり。（去來抄、先師評）



「二六一」

うらやましおもひきる時猫の戀　越人

先師、伊賀より此句を書贈て曰、心に俗情（異本、風雅）あるもの、一たび口に不レ出といふ事なし。かれが風雅、是に至りて本情をあらはせりとなり。是より先に越人名四方に高く、人のもてはやす發句多し。しかれども爰に至りてはじめて本性を顯すとなり。（去來抄、先師評。「個人評」の「越人評」に重出）

「二六二」

うづくまる藥の下のさむさ哉　丈艸

先師難波の病床に、人〻に夜伽の句をすゝめて曰、今日より我が死後の句なり。一字の相談を加ふべからずと也。さま〴〵の吟ども多く侍りけれど、たゞ此句のみ、丈艸出來たりとのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動侍らめ。興を發し景をさぐるに豈いとまあらんや、と此時にて思知侍る。（去來抄、先師評）

「二六三」

いそがしや沖のしぐれの眞帆片帆

去來

去來曰、猿蓑は新風の始なり。時雨は此集の美目なるに、此句仕そこなひ侍る。たゞ〳〵有明や片帆にうけて一時雨　といはゞ、いそがしや　よりも句のはりよく、心のねばりすくなからん。眞帆もそのうちにこもりてん。先師曰、沖の時雨といふも又一ふしにてよし、されど句ははるかにおとり侍るとなり。（去來抄、先師評）

「二六四」

せりやきや綠輪の田井の薄氷

この句、師のいはく、たゞおもひやりたる句也と也。芹やきに名所なつかしく思ひやりたるなるべし。（あかさうし）

註。この句については「笈日記」にも同旨の文がある。

「二六五」

旅人とわが名呼れん初しぐれ

此句は師武江に旅出の日の吟也。心のいさましきを句のふりにふり出して、よばれん初しぐれとは云しと也。いさましき心を顯す所、謠のはしを前書にして書のどく章さして、門人に送られし也。一風情あるもの也。この珍らしき作意に出る師の心の出所を味べし。（あかさうし）

「二六六」



何に此師走の市に行烏

此句、師のいはく、五文字のいきごみに有となり。（あかさうし）

「二六七」

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚

此句、師のいはく、心遣はずと句になるもの、自贊にたらずと也。鎌倉を生て出けん初鰹　といふこそ、心のほね折、人のしらぬ所也。又いはく、猿のは白し峯の月　といふは其角也。鹽鯛の齒ぐきは我老吟也。下を魚の棚とたゞ言たるも自句也といへり。（あかさうし）

「二六八」

鞍つぼに小坊主のるや大根引

此句、師のいはく、のるや大根引と、小坊主のよく目に立つ處句作ありとなり。（あかさうし）

「二六九」

からざけも空也の痩も寒の內

この句、師のいはく、心の味を云とらんと、數日はらわたをしぼると也。ほね折たる句と見え侍る也。（あかさうし）

「二七〇」

貞享乙丑年九月十四日の曉の夢に、鶴岡へまうで侍るとおぼえて、その身ひら包首にかけ、菅笠手に持て、段かづらの下道、ならびの松を見あげ行まゝ、沖のかたしきりに時雨來て、はやく拜殿に走つきたれば、社人立さはぎて蔀さしおろす。その蔀はむさう屏風といふものを、疊みたるやうに有けるが、はら〳〵とさしおろすその蔭によりて、雨しのぎたるさまを、社人見とがめて、とく出よとせめながら、時にとりてのけしき、一句つかうまつらば、ゆるし侍らめとつぶやく。あはれ爰にてこそと、ゆめそゞろに面白く、海みやらるゝ松の葉末に、由井の濱風吹わたり、波と空とのわかるゝやうにおもひなして、

松原のすきまを見する時雨哉

と申出たれば、社人しばめる顏にて吟じ返し、當意よろしく神もさこそはと、うなづきぬとおぼえて夢さめたり。明れば十五日の朝、深川の八幡宮に詣で侍る次で、芭蕉庵をとひて、ありし夢に申し侍りと語ければ、現にはかゝる口きよき姿は、及まじきをと申されたり。魂の遊ぶ所、まことに虛靈不昧なる事を知ル。（雜談集）

「二七一」

襟卷に首引入て冬の月　杉風

火桶抱てをとがひ臍をかくしけり

此作者は松もとにてつれ〴〵よみたる狂隠者、今我隣庵に有。俳作妙を得たり。



雪ごとにうつばりゆかむ住ゐ哉　苔翠

冬籠又依そはん此はしら　愚句

菊鷄頭切盡しけりおめいこう　同

句はあしく候へ共、五十年來人の見出ぬ季節、愚老が拙き口にかゝり、若上人眞靈あらば我名ヲしとぞわらひ候。此冬ハ物むづかしく句も不レ出候。以上（書翰集尙白宛全文。元祿元年極月五日）

發

註。「火桶抱て」の句は路通。「雪ごとに」の句は「小文庫」に「梁たはむ」となつて芭蕉の句になつてゐるが誤傳であらう。萬子の遺稿「金蘭集」の歇仙の發句に

雪ごとに梁たわむ住居哉　岱水

とある。

「二七二」

追而申入候。此中哥ゟ方ゟびす講大ぜい客呼候へば、參候而見物致候樣に申越候故、愚身が右之中へ指出候而はいかゞに候へども、見物に來よと申候故、下心いかゞしく風與參候而一句

ふり賣の鴈哀なりゟびす講

右之句をいたしてかへり申候。とかく鴈に成てもいろ〳〵有、大ぜいに賞味せられよろこばす鴈も有、ふり賣りせらるゝ鴈もありと申事ばかり、又〻あとゟ可二申承一候。以上（書翰集、吟笑宛

全文。元祿六年十月廿二日）

「二七三」

梅が香にのつと日の出る山路哉

なまぐさし小なぎが上の鮠の腸

此二句、ある俳書に、梅は餘寒・鮠のわたは殘暑也、是を二體の趣意といはんと門人のいへば、師、尤とこたへられ侍ると也。

ひや〳〵と壁をふまへて晝寐哉

是も殘暑と、かの門人いへば、師、宜と也。（あかさうし）

註。「梅が香に」「なまぐさし」の句については「笈日記」に同旨の文が見えてゐる。「ある俳書」とは「笈日記」のことであらう。

「二七四」

鎌倉を生て出けむ初鰹

五月雨にかくれぬ物や勢多のはし

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

詩哥に名所を用る事たやすからじ。かまくらの初鰹は、支考が東より歸けるとき、かゝる事ありとて見せ申されしを、生て出るといふに鎌倉の五文字、又、その外あるべくとも承わらずと申たれば、うれ敷きゝ侍るとて、阿叟もにくみ申されしが、みづからも徼幸にいひ明しぬらむ。（葛の松原）



「二七五」

ある時、故翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯といひ、病蠶といへる此詞のおもしろければ、

鶯や竹の子藪に老を啼

さみだれや蠶わづらふ桑の畑

かく此二句をつくり侍しが、鶯は筍藪といひて、老若の餘情もいみじく籠り侍らん。蠶は熟語をしらぬ人は、心のはこびをえこそ聞まじけれ、是は筵の一字を入て家に飼たるさまあらんと、其句のまゝに申捨らしが、例の泊船集に入たるよし。（十論爲辨抄、第九段）

「二七六」

晋子が、宿札にかなづけしたるとはれ兒　といへるは、下の五文字にてよくしづめたりと、阿叟もつねに申され侍しか。（葛の松原）

註。右の句は無季で附句との思はれるが、審かでない。假に發句の部に收めておく。

「二七七」

芭蕉庵の叟、一日嗒焉トシテうれふ。曰く、風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし。一回は皂狗となり、一回は白衣となつて、共にとゞまれる處をしらず。かならず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉給へば、雨靜にして鳩の聲ふかく、風やはらかにして花の落る叟おそし。彌生も名殘おしき比にやありけむ、蛙の水に落る音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、蛙飛こむ水の音　といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字かふむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯、古池とはさだまりぬ。（葛の松原。「俳諧一般」の「本質論」に重出）

「二七八」

木枯の地まで落さぬ時雨哉　去來

尾の荷兮が、木がらしに二日の月のふきちるか　と申侍るは、今の時雨にはつのりけむ物をと、みづから耻申されしを、阿叟はさもおぼえず、他は二日の月に心をとゞめたれば、時雨は古今に變ぜざる姿ならむ。されど迄といへる文字は未練の叮嚀なれば、唯地にも落さぬと有べきよし、いつやら申され侍しとかや。（葛の松原）

「二七九」



こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

凡の地にも落さぬしぐれ哉　去來

去來曰、二日の月といひ、吹ちると働たるあたり、予が句にはるか勝れたりと覺ゆ。先師曰、荷兮が句は二日の月といふものにて作せり、其名目を除けばさせるとなし。汝が句は何をもて作したりとも見えず、全躰の好句なり。たゞ地までとかぎりたる、迄の字いやしとて直し給ひぬ。（去來抄、先師評）

「二八〇」

ほと〻ぎす聲横たふや水の上

此句はさせる事もなけれども、白露横といふ奇文を味合たると也。一たびは聲や横たふとも、一聲の江に横たふやとも句作有。人にも判させて後、江の字拔て水の上とくつろげて、句の匂ひよろしき方定る。水光接レ天白露横レ江の横、句眼なるべしと也。（あかさうし）

「二八一」

時鳥聲横ふや水の上　聲や横ふか　一聲の江に横ふやほと〻ぎす　水光接レ天白露横　江の字横句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推敲難レ定所、水沼氏沾德と云もの訪來れるに、かれ物定のはかせとなれと、兩句評を乞。沾曰、横江の句文ニ對メ考レ之時は、句量尤いみじかるべければ、江の字拔て、水の上とくつろげたる句のにほひ、よろしき方に思ひつゞくべきの條申

出候。とかくする内に山口素堂・原安適など詩歌のすきもの共入來りて、水上の聲よろしきに定りて事やみぬ。させる夏なき句ながら、白露横といふ奇文を味合ヒ御覽可レ被レ下候

荆口丈

はせを

（笈日記）

註。荆口宛の書翰は、勝峰氏編の書翰集に依れば元祿六年卯月二九日となつてゐて、はじめの部分は

「ほとゝぎす聲や横ふ水の上

と申候に又同じ心にて

一聲の江に横ふやほとゝぎす」

となつてゐる。以下は大體笈日記に載せる所と同じである。

猶「陸奥衞」に

鵡鵡聲や横とふ水の上

とあるのみで、他は「聲横たふや」もしくは「聲横ふや」である。

「二八二」

春立や新年ふるき米五升

此句、師の曰、似合しやとはじめ五文字あり。口惜事也といへり。其後は、春立や　と直りて短冊にも殘り侍る也。（あかさうし）

「二八三」



風色やしどろに植し庭の秋（蘇）

此句、ある方の庭を見ての句也。風吹とも一たび有。風色や　とも云り。度〻吟じていはく、色といふ字も過たるやうなれども、色といふ方に先すべしと也。（あかさうし）

「二八四」

丈六のかげろふ高し石の上

かげろふの俤つくれ石のうへ

此句當國大佛の句也。人にも吟じ聞せて、自も再吟有て、丈六の方に定る也。（あかさうし）

「二八五」

明ぼのや白魚白きこと一寸

この句、はじめ、雪薄し　と五文字あるよし、無念の事也といへり。（あかさうし）

「二八六」

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

此句病中の吟にて句の終り也。猶かけ廻る夢心　といふ句作有。いかに思ひ侍るやと人にもいひて、後此句に定ると也。枯尾花に其角がかける、かれ野を廻る夢心　ともせばやといへるとあり。笈日記に、猶かけ廻る　とあり。（あかさうし）

「二八七」

此夜深更におよびて介抱に侍りける呑舟をめされて、硯の音のから〳〵と聞えければ、いかなる消息にやとおもふに、

病中吟

旅に病で夢は枯野をかけ廻る　翁

その後支考をめして〳〵なをかけ廻る夢心　といふ句づくりあり。いづれをかと申されしに、その五文字は、いかに承り候半と申ば、いとむつかしき夏に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとり候半と答へける也。いかなる不思儀の五文字か侍らん、今はほいなし。みづから申されけるは、はた生死の轉變を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執といましめ給へる、たゞちは今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへす〳〵くやみ申されし也。さばかりの叟の辭世は、などなかりけると思ふ人も世にはあるべし。（笈日記。「心」に重出）

註。此夜とは十月八日夜のこと。猶「旅に病で」の句については「枯尾花」にも見えてゐるが、「笈日記」に盡きてゐるので「枯尾花」は省いた。

「二八八」

皃に似ぬ發句も出よはつ櫻



此句は下のさくらいろ〳〵置かへ侍りて、風与初ざくらに當り、是初の字の位よろしとて究る也。（あかさうし）

「二八九」

門人の句に、元日や家中の禮は星月夜　といふ有。たゞ、門松に星月夜と斗する句也。味ふべしと也。（あかさうし）

註。句は其角の作。

「二九〇」

同、（門人の句に）松風に新酒を澄す山路哉　といふ句有。山路を夜寒にすべしといへり。その夜の道の戻りに、集などに若出す時は、はじめの山路しかるべしと也。（あかさうし）

註。句は支考の作。「笈日記」にも同旨の文が見えてゐる。

「二九一」

同、（門人の句に）ぬしやたれふたり時雨に笠さして　といふ句あり。是は初五理屈也、なしかゆべしと有。後、跡に月　とはいかゞと云ば、宜と也。（あかさうし）

「二九二」

同、（門人の句に）時なる哉柊旅客は笠の端にさゝん　といふ句あり。初の詞過たり。柊をと斗すべしと也。（あかさうし）

「二九三」

涼しさの野山にみつる念佛哉　去來

是は善光寺如來の洛陽、眞如堂に遷座在し時の吟也。はじめの冠はひいやりとゝ置たり。先師曰、かゝる句は全體おとなしく仕立るものなり、五文字しかへてよしとて、風藁と改め給ふ。後猿簑の選場には、再改て今の冠にぞせさせける。（去來抄、先師評）

「二九四」

振舞や下座に直る去年の雛　去來

此句は、予おもふ處ありて作す。五文字、古烏帽子・紙衣等はいひ過たり。景物は下心徹せず。あさましや・口惜しやの類ひははかなしと、今の冠を置て籟ひければ、先師曰、五文字に心をこめておかば、信德が人の世やなるべし。十分ならずとも振舞にて堪忍有べしと也。（去來抄、先師評）

「二九五」

大としをおもへば年の敵かな　凡兆

もとの五文字戀すてふと置て予が句也。信德曰、戀ざくらと置べし。花は騷人の思ふ事切なり。去來曰、物には相應あり、古人花を愛して明るを待、くるゝををしみ、人を恨、山野に行迷へども、いまだ身命のさたにおよばず。櫻と置かば、却而年のかたき哉　といへる處あさまになりなむ、信德なほこゝろえず、重て先師に語る。先師曰、そこらは信德が知ところにあらずとなり。其後凡兆、大年をと冠す。先師曰、誠此一日、千年のかたきなり、いしくも置たるもの哉と大笑し給けり。（去來抄、先師評）

「二九六」

下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆



此句初に冠なく、先師をはじめ、いろ〳〵と置侍りて、此冠に極め給ふ。凡兆、あと答て、いまだ落着ず。先師曰、兆、汝手がらに此冠を置べし、若まさるものあらば、我二たび俳諧をいふべからずとなり。去來曰、此五文字のよきとは、誰〳〵もしり侍れど、是外にあるまじとは、いかで知侍らん。此事他門の人聞侍らば、腹いたくいくつも冠置べし。其のよしとおかるゝ物は、又こなたにはをかしかりなんとおもひ侍る也。（去來抄、先師評）

「二九七」

（許六云）五文字の居（すは）らざる句、人持來りて五文字を賴むといふ事、李由が句に、

比良より北は雪げしき

といふ句に、久しく五文字なし。予翁に尋侍る時、早速鱈舟やといふ五文字は居へ給へり。此句門人たる人しらぬはなし。この時師の云、凡兆が句に

雪つむうへのよるの雨

といふ句に五文字頼む。情を費して、案じ出して、下京やといふ五文字をすへたりと語り給ふ。同じ五文字を居へ給ふに、容易に出ると出ざるとは、いかなる子細成べしと思ひしに、愚退て發明するに、鱈舟といふ五文字は取合もの也。下京といふ五文字には、例の翁の血脉を入れられたり。二ッの五文字、同じ事と思ふ人は、五文字置く事は成るまじき也。（誹諧問答青根が峯。自得發明辨）

註。冠をなしかへた句については、以上の外「二七七」がある。

「二九八」

清瀧や波に塵なき夏の月　芭蕉

先師、難波の病床に予をめして曰、此頃藪女が方にて〻しら菊の目に立て見る塵もなし と作す句に似たれば、清瀧の句を案じかへたり。はじめの草稿野明が方に有べし、取て破るべしとなり。然どもはや集にもれ出侍れば捨るに及ばず。名人の句に心を用ゐたまふ事しらるべし。（去來抄、先師評）

註。「笈日記」「旅寐論」等にも同旨の文がある。

「二九九」



月雪や鉢たゝき名は甚之亟　越人

去來曰、此頃伊丹の句に、〻彌兵衛とはしれど憐や鉢たゝき と云あり。越人が句、入集いかが侍らむ。先師曰、月雪といへるあたり一句働見えて、しかも風姿あり。たゞ、しれど憐やといひくだせるとは各別也。されども鉢敲の俗體をもて趣向を立、俗名をかざり侍れば尤遠慮有べし、又重て折もあらむとなり。（去來抄、先師評）

註。「旅寐論」に同旨の文がある。

「三〇〇」

面機やあかしのとまり郭公　荷兮

猿蓑撰の時去來曰、此句は、先師の野を横に馬牽むけよと同前なり。入集すべからず。先師曰、明石の時鳥といへるもよし。去來曰、明石のほとゝぎすはしらず、一句たゞ馬と舟とかへ侍るのみ、句主の手柄なし。先師曰、句の働においては一歩もうごかず、明石をとりえにいれば入なんとなり。終にいらず。（去來抄、先師評）

註。「旅寐論」に同旨の文がある。

「三〇一」

猪の寐に行かたや明の月　去來

此句を窺ふ時、先師しばらく吟じて兎角をのたまはず。予思ひ誤は、先師といへども、歸り待

つ夜興引の意を知給はずやと、しか〳〵のよし申侍れば、先師曰、其おもしろき所は古人もよく知ればこそ、〻明ぬとて野邊より山に入る(鹿)しかのあと吹送る萩の上風、とはよめりける。和歌優美のうへにさへ、斯までかけり作したるを、俳諧自由のうへに、たゞ尋常の氣色を作せんは、更に手柄なかるべし。一句おもしろげなれば、暫案じぬれど、兎角に詮なかるべしとなり。其後おもふに、此句は、郭公なきつるかた、といへる後徳大寺の歌の同案にて、いよ〳〵手柄なきことを知れり。(去來抄、先師評)

註。「旅寐論」に同旨の文がある。

「三〇二」

三番　花　暮春
左

花盛四方の芝居や秋の暮
右

上野以來青葉ぞかほる暮春の宿

上野・谷中にうちむれて、花の盛、芝居、物さびたる太夫・坐本の花も紅葉もなき風情、誠に秋の夕暮は理りと覺えて、珍重不レ斜といへども、予が門葉杉風、花つらし花場時　と云句を作り、爰かしこの短尺にも書散し侍れば、等類にひかれ殘念〻。



右は、花の跡とふ春の嵐に匂ひ殘て、華の面影わすれぬも捨がたく、やさしき所も侍るまゝ勝とす。されども左の作には少をとり候にや。(十八番發句合、句合評の一部を重出)

「三〇三」

第十八番
左勝　農夫
月日の栗鼠(リス)葡萄かつらの甘露有
右　野人
紀路行山はみかんの吉野かな

鼠をりすと作意して、ぶだう葛(かつら)の甘露とつゞけり。

右の句は信章子が句に　茶の花や利久が目にはよしの山　と作れるに、聊俤の似かよふにや。強て心を別たん時は、等類の難とも云がたく侍れど、甘露の一滴には、我も前後を忘れたる成べし。(田舍の句合。句合評の一部を重出)

註。「等類」についての、芭蕉の概括的所見は「一九八」「一九九」を參照されたい。

「三〇四」

貝おほひ　三十番俳諧合

松尾宗房撰

小六ついたる竹の杖、ふしぶしく多き小哥にすがり、あるは、はやりこと葉のひとくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、其かたはらに、みづからがみじかき筆のしんきばらしに、清濁高下を記して、三十番の發句合せを思ひ太刀折紙の、式作法も有べけれど、我まゝ氣まゝに書ちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見るものなれば也。又神樂の發句を卷軸に置ぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、小うたにも予がこゝろざす所の、誠をてらし見玉ふらん事をあふぎて、當所あまみつ（天満）おほん神の、みやしろのたぶけぐさとなしぬ。

寛文十二年正月廿五日　伊賀上野松尾氏宗房　釣月軒にしてみづから序す。

一番

左勝

にほひある色や伽羅ぶしうたひ初　三木

右

春の歌やふとく出申すうたひぞめ　義正

左の句は匂ひも高き伽羅ふしの、うどんげよりも、めづらかに覺侍る。

右も又、春の哥はふとく大きにと云より、まことに大音のほどもしられ侍れども、一聲（いち）二ふしともいへば、猶匂ひある聲に心ときめき侍りて、仍左を爲勝。

二番

左勝

紅梅のつぼみやあかいこんぶ（ふ袋）くろ　此男子

右

兄分に梅をたのむや兒（ちご）ざくら　蛇足

左の赤いこんぶくろは、大阪にはやる丸の菅笠とうたふ小歌なればなるべし。

右、梅を兄分にたのむ兒櫻は尤たのもしき氣ざしにて侍れども、打まかせては、梅の發句と聞えず、兒櫻の發句と聞え侍るは、今こそあれ、われも昔は衆道ずきのひが耳にや。とかく左のこん袋は、趣向もよき分別袋と見えたれば、右の衆道のうはき沙汰は先思ひとまりて、左を以爲勝。

三番

左

なく聲やげに伽羅のはし匂ひ鳥　露節

右勝

藪にすむうぐひすのうたやお竹ぶし　哉也

左、伽羅の橋をかきょいのとあるを、匂ひ鳥のはし(嘴)に取なされたるは、げに、よくさえづられたる口ばしなれども、

右のおたけぶし、藪にすむといふより、言葉の茂りも深く、いくふしも籠て、是も百姓の納米のくだけたる所もなく、上々虫いらずとかや申侍らん。

四番

左　信乗母

さかる猫は氣の毒たんとまたゝびや

右勝　和　正

妻戀のおもひや猫もらうさいけ

猫にまたゝびを取つけられたる左の句、珍らしきふしをみ出られたるは、言葉の花がつをともいふべけれども、きのどくと云(いふ)と葉、さのみいらぬ事なれば、少し難これ有て、きのどくに侍る。

右また、猫のらうさいと云ふ歌を、つま戀に取合されたるは、よい作にや。きんにや、うにや、かの柏木のいにしへ、ねう〳〵となきしわすれがたみ、又、源氏の宮を木丁(きちやう)のすきかげに見しも、いづれも猫の引綱の思ひ捨がたけれど、右の句、さしたる難もなければ爲レ勝。

五番



左持　貞　好

牛馬の糞ふみわける雪間かな

右　一　友

消殘る雪間や諸あしふんごんだ

左の句、雪間をふみわけしつめたさは、うき〳〵どつこい、うき世に住(すま)ば、うさこそまされと、うたふは、しかあるべし。太山(たいざん)のがけ道へ引出されたる牛馬のふんこつ(粉骨)、げに珍重に覺侍る。

右の句、雪にもろあしまで、ふみ込たるは、草履のうらもたまるまじく、足もとしらずの麁相ものと見へ侍れども、一足とんだる作意もをかしく、また雪に立しためしもなきにあらねば、持とさだめぬ。

六番

左勝　正　之

きやん伽羅の香ににほへかし犬櫻

右　意　見

見にゆかんとつと山家のやまざくら

左の句、伽羅の香に匂へとは、一句もやさしく、手ざはりもむく〳〵とむく犬の、尾もしろき作意なるに、

右の句、さのみ言葉のたくみもみえず、とつと山家のいよ古狸とうたふ小哥なれば、秀逸物の犬櫻に、狸は喰ふせられ侍ん。

七番　　簾尼

左持　　信乘母

たぐりよせんから糸ならばいと櫻

右

春風になれそなれゝそ江戸櫻

唐糸の句は、長太郎ぶしと聞えよく、いひかなへられて、此世のものとも覺えぬは、から糸なればなるべし。

右、またこむろぶしの、江戸衆になれそといふを、春風になれそと作り立られしは、花を惜む心ふかく、いづれも捨がたく持に定侍き。

八番　　鋤道

左勝　　指鑑子

うたへるや晩鐘寺ぶしの暮の花

右

種ならばまかせておけろ花ばたけ



左は山寺の春の夕暮も思ひ出られ、晩鐘寺の花の作意、げにおよびなき所なり。

右の句、花の種をまかせが定なら、といて口說て、かたり聞せ侍らん。種をまかるゝ花ずきの心も、優に聞ゆれど、浮世五十年、一寸もまだのびぬ花の枝、咲までのあい遠なれば、先目の前の晩鐘寺の、けふの花見こそたふとけれ。仍左を爲レ勝。

九番　　露節

左勝　　宗房

發句

鎌できる音やちよい〳〵花のえだ

右

きても見よ甚べが羽折花ごろも

左、花の枝をちよい〳〵とほめたる作意は、誠に俳諧の親〳〵とも、いはまほしきに、右の甚兵衞が羽折は、きて見て我おりゃと云心なれど、一句の仕立もわろく、染出すこと葉の色も、よろしからずみゆるは、愚意の手づゝとも申べし。其上、左の鎌のはがねも堅さうなれば、甚べがあたまもあぶなくて、まけに定侍りき。

十番　　政定

左持

啼さわげにほんづゝみの無常鳥

右　　和久

ゆかしきや山の尾常はなきゃるもの

左は、日本堤の無常の烟も、立のびたる句の姿は、子規のとりなりも、よく見え侍るに、右の句は、空なきさうなおつねの顔も、ずんといやな氣なれども、左にひつぴけ、うんのめとうたふ小哥なれば、お常のしやくも捨がたくて、いづれのかちまけをも、えさだめ侍らぬは、こゝろぎたなき判者なめり。

十一番

左勝　　吉之

時鳥谷から峰からこんぞをせい

右　　一意

黄鳥の玉子じやとおしゃるほとゝぎす

左はきやりの音頭と聞えて、くどくこと葉の中のつな、扨も見事によう揃ふた。右の句、鶯のかひこの中の時鳥と云心をふくみ、聲のふしをあらせて、醫者に見すれば、玉子じやとおしゃるといふ小哥をかり加られ侍る。伊勢のおたまが事に出れば、玉の句といはんに難なかるべけれど、左の谷から峰から、こゝはちつくりこざかしくいひ出されし大持に、心はひかれ侍りき。



十二番

左勝　　義子

小六方の木さしや菖蒲かたなの身

右　　雫軒

菖蒲刀中や檜の木のあらけづり

これさ、爰許へ小六方とほざけだいたるでつちは、うるしいこんでは、あるではあるぞ。右の刀は、源五兵衛おとゝの長脇差の、さやは三文、下緒は二文、しめて五文の錢うしなひの、やすものと見え侍る。

左の六方は、いかさま口舌を菖蒲刀のよき出來ものにて侍れば、檜の木のあら削り、太刀打にも及べからず。

十三番

左　　適意

蚊やり火にわれも木賣が娘かな

右勝　　義正

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を殘したるてにをは、一句の立すがたもしほ

らしく、山家のものとも見えねど、

右の句、たはんはと云ふしを、こと葉にことわられたるは、かやの木どくに思ひよられたり。其上木賣のむすめにふすべられて、われもむかひ火つくらんもむづかしければ、たゞ右の半夜のけぶり立まさり侍らんかし。

十四番　勝書

左持

かゝばやな小舞あふぎの織との繪

右

扇もや折ふし風が吹て來た

左は、かの孫三郎が織手をこめし織ぎぬの、いとしほらしき振舞也。

右の句、折節かぜが吹てきたと云ふ小哥、扇にいひ叶られたれば、あなたのかたへはからころひやう、こなたのかたへはからころひよつと、勝まけを定めかねしは、模陵の手をはなさぬ扇のかなめも、むくの葉、木賊のみがき骨とも云べければ、扇角力のかちまけなく、持に物さだめし侍る。

十五番　甘人

左持



すだれごしの月やいよ此おもしろい　貞好

右

半夜させやあ此宵の月のかげ　指鑑子

左は、いよこのとうたふを伊豫にとりなされたるは、すだれのあみ目をおどろかし、何よりもつておもしろい。

右もまた、いやひ（居含）踊の拍子と見えて、やあ、此さいた長刀をぬきんでたる作意は、さや口のきいたる處侍るまゝ、よき持と定めまゐらせたり。

十六番　發句

左勝

月の舟や今宵はどこがおとまりじや　信乘母

右

月の雲間よひ〳〵なんど出つ入つ　三竿

左の句、はりまの國の書寫むしや寺がおとまりなれば、御法のふねにうたがひなく、月の光をはなつこと、光明遍照十方世界のまん中とは、此發句をや申べき。

右もまた、よひ〳〵なんどゝ、をどるうちこそ佛なれとうたふ故にや、句作り殊勝に侍りて、有がたき作意なれど、地ごく踊の小哥なれば、精靈のおばゞを祭る盆の折から、かりにも鬼の

さたをきらひて、にくさげなるつらつき、抹香くさく、皺面つくり批判して、以レ左爲レ勝。

十七番　　吉之

左　　雫軒

ちよいと乗たがるやたれも駒むかへ

右勝

むかふ駒の足をはねるやひんこひん

左、伊勢のお玉はあぶみかくらかといへる小哥なれば、たれも乗たがるは、ことわりなるべし。

右、ひんこひんとはね廻るは、まことにあら馬と見え侍れども、人くらひ馬にも、あひ口とかやにて、右の馬に思ひ付侍る。左のたれも乗たがる馬は、ちとかん(疳)よわ(弱)のうち氣ものとしられ侍れば、ふみ馬御免のあしもとをば早く引て、のがれ候かし。

十八番　　適意

左勝

ほの上も大たば(束)に出よ稲の束

右　　城次

かぶけるは稲のほのじぞ京女藺



左の句、大たばと云を稲の束にゆひまはされし事、かなたこなたをかり集めて、鎌のえならぬ句作りには、わらの出べきやうもなし。

又、右の京女郎にほのじは、たれもすきくわのかねぐ〳〵望む事なれど、稲のとの(殿)を持たれば我妻ならぬつまなりと、先此戀はさしおくて田の、ひつぢ(潤)ばへは其まゝにて、左りを勝とさだめ田。

十九番　　此男子

左持

はな息もむせてくんのむ新酒哉

右　　哉也

温(うん)のめとあたゝめかゆる新酒哉

左右の新酒、味ひいづれかときいてみるに、鼻息もむせてくんのむ新酒は、から口とみえて、誠にあまけのさりたる句作り也。

右の句、温のめと云ことばを、下にてあたゝめかゆるとことわられし事、風味のよきはさらにて、實あすをもしらぬ身なれば、よき亭主ぶりもうれしくて、いづれの勝まけをもえさだめ侍らぬは、判者もひとつなる口にや。

二十番

左勝　政輝

鹿をしもうたばや小野が手鐵炮

右　宗房

女夫鹿や毛に毛が揃ふて毛むづかし

左の發句、小野と云より鹿とつゞけられ侍るは、かの紫のしなもの、ひかるお源の物語にも、小野に鹿のけしきを書つらね侍りしより、尤よくとり合されたるなるべし。其上おのがてゞつぽうと云を取なされたる鐵炮のすの、口がしこく打出されたる玉の句とも云べければ、火繩のひごんを打べきやうもなし。

右の女夫鹿、委しく論をせんも、毛むづかしければ、あぶなき筒先、あしはやに逃のき侍りぬ。

二十一番

左　佐男鹿の妻の名もいとし萩の花　鼻毛

右勝　みそ萩やほそけれど長いぼんのもの　石口

左、萩を鹿の妻といへるを、おかしくうたひなされ侍れ共、みそ萩のほそけれど長いと云處を



能考て、心のおくをついて見るに、ほそ長き故にや。一句もすらりと立のびて、なれ合たり。

左の發句には、はるかにこえたやつさ。大いかい物とや申さん。

二十二番

左勝　取やげばゝが右の手なりの紅葉哉　三木

右　もみぢぬと來て見よかしの枝の露　蛇足

左の句、紅葉のきめうの作意也。

右の句、よくいひ叶られ侍れども、もみぢぬかしを好るゝは、異風なる物ずきにて、色にふけらぬ人なるべし。左の婆々が右の手の赤くなるは、いかさま戀をすきものゝ、こと葉の品も大むすこも、雲泥萬里のたがひあれば、かゝるめでたき折節を、來てみよかしの木刀ならば、一本かたげてのがれ候へ。

二十三番

左勝　しつぽとやぬれかけ道者北時雨　餘淋

右

しぐるおとさつさやりたし簑と笠　政當

左のぬれかけ道者は、ぽつとりもの〻しなもの〻、袖にしぐれの通りものとや申さん。

右の句さつさやりたし、なんしゆんさまとうたへば、あつたものじやないはさあといはまほしけれど、とてもぬれよなら、なまなかしぐれはいやよ、君がなみだの雨に、しつぽとぬれかけ道者を例のかちとや定めん。

二十四番

左持　酒の醉やすぢりもぢりの千鳥足　餘淋

右　から臼の代のちんどり足をふめ　三竿

左の酒の醉は、まことに一盃過たると見えて、足もとはよろ〳〵と弱く侍れども、一句たしかにいひ立られて、下戸ならぬこそ男はよけれともいへば、おもしろく侍るに、

右のちんどり足、ごぼ〳〵とふみならすから臼は、天の原をふみとゞろかす神鳴の、挾箱もちの器量にもすぐれて、骨ぐみつよく、足の筋骨もたくましければ、作者のちからも強さうにて、いづれも千鳥のあしき所はなければ爲し持。

二十五番



左　しやうことがたまらぬものはみぞれ哉　鼻毛

右勝　見ぞれ酒元來水じやとおぼしめせ　一入

左の句、しやうことが、たまらぬといはれしは、みぞれのふる句とも見えず、われもおもしろくてたまらぬに、

右は元來水じやと云ふ小哥を、みぞれ酒に作られたるは、桶の底意深くいひ立られ、樽のかゞみともなるべき句なれば、かん鍋のふためとも見ず、かちのかちとさだめぬ。されど判者もひとつ過て、耳熱し、目もちろ〳〵りのみぞれ酒、のみこみ違ひもありやせん。かやうにはほむるとも、さのみに勿體付さすな。

二十六番

左持　わる音はかんからめける氷かな　勝云

右　そこでさせ氷のしたの月のかげ　城次

左の句、こがねのはしはかんからめくにと云小哥を、わつ〻くどいつ（口説）云立られたれば、氷のは

り臂にて、自慢せらるゝもことわりなるべし。

右又、居合踊のそこでさせと云を、氷にとぢあはされたるは、げによく思ひ月影の、ひかつた句作とも申べければ、勝まけのわいだめをさだめん事、おろかなるざへのおぼつかなく、深き淵に臨むがごとく、うすき氷をふんでとりて、持ときはめ、世の人のそしりを、けふよりしてのち、われまぬかれん事をしんぬるかな。

二十七番

左　越後布か松の葉はんの雪のいろ　正之

右勝　降つもる雪やしら藤こふじ山　義正

雪の色を越後布に見立られたる左の句は、げにも手きゝのしはざにて、あさいとのよりも、よくかゝりたるにや、わらはれぬ作意なれども、松のはゝんと云事、小哥のふしは尤ながら、一句のはたらき見え侍らず。

右は、しら藤こふじを富士に取なされ候を、まとに名高き不二には、いかでか肩をならべ侍らんと、左の越後布を安うりにまけさせたるは、さぞもとねになりかねや侍らん。

二十八番



左持　炭の荷や付てうるしい（小荷駄）こんだ馬　吉勝

右　炭がしらけぶるやずんといやな木じや　善勝

左、炭をうると云かけられたるは、げにうるしいこんだ馬のあしき處なく、一句もよくいひ立がみの、けをされぬ作者也。

右の句、ずんといやなきとはあれど、氣のどくたんといひ叶られたれば、今更けし炭となさんともおぼえず。勝負に世話をやく炭がまの、口〳〵いづれも捨がたくて、持と定侍りき。

二十九番

左勝　掃除して瓢箪たゝきゃ炭ほこり　不屈

右　炭燒やおのが先祖はよくしつた　一入

左、炭とりへうたんをたゝきて、掃除したるは、手もまめなる處あらはれて、奇麗なる發句也。

右は、野郎さ、ふとく出申な。おのが先祖はよく知たと云を、小野炭に取なされたる事、尤炭頭

をかたぶけて、感じ入侍れども、先祖をよくしらん事、わきまへがたく、只左のへうたんの輕口にまかせて、勝と定たるは、をかしき判とゆふがほの、ひよんな事にやあらんかし。

三十番

左勝　犬の鈴やいきくびし(社壇)やだんの神〻樂　此男子

右　舞衣やをかみの出立神樂神子(みこ)　一友

左の犬の鈴の句、まことに人作(じんさく)の及ぶ所にあらね共、いきくび社壇もうごき、御社のおやぢさまも、御感心淺からず。末社のほこらのこやぐまでも、いきくび、ごたいをかたぶけられん事、うたがひなくおぼえられ侍る。

右のをかみの舞衣、ひとへに聞えて、手うすき作意なれば、まけの上のまけたるべし。とかく息災延命の神樂哥を舞のきに、のき給へとぞ。(貝おほひ、全文)

註。右は「貝おほひ」の全文であるが、横月の跋文は、芭蕉の俳諧論としては關係がないので省略した。出板は寛文十二年で、以下出板の年代順になつてゐる。

「三〇五」

十八番句合



六番句合題

初春　花　子規　立秋
夕顔　月
菊　雪
秋暮　炭

一番　初春

左　發　のり弓やゆかけの三指禮なんめり

右　句　くる春や夜明のあした又おかし

左、賭弓(のりゆみ)のゆがみにて、三指つきたる禮儀正敷見え侍る。

右の夜明の朝、彼兼法師が筆のすさびもなつかしく、曙ちかき程まで足を空にしてをどろ〻敷物さはがしき有樣、誠に、野分・山颪は物かは、明わたる空のけしき、さもあるべしと感心此句にとゞまりながら、左の賭弓もむづかしき題を、一作こなし侍るも又おかしければ、勝負は定ぬ事にぞなりぬ。

二番　花

左

散花や横手の内に山おろし

右

花の香や心もこと葉も吉野山

散花に山風、作意なき心地せらるゝが、咲たか花など、五文字有度。但し予が愚意のいたらざる所か。

右も又、めづらしからず、洛の貞室、是は〳〵と計花の吉野山　といへる秀句に、猶此句けをされ侍らんかし。

三番　郭公　夕兒

左

きかぬとぞどこでもきいた時鳥

右

夕がほやあばら屋のむかし古雪隱

左、郭公ふるし。

右の句は雉の音にきこえたる五條あたり、古き雪隱のかほりも、つまいたうこがせる扇の匂ひにけされて、風流にやさしくことばの花の光、露そふ夕顔なるべし。

四番　立秋　月

左

今朝の秋かご屋が軒にしられけり

右

ぼんのくぼに月が入けり今日の月

籠屋の印に秋風知りたるさま、誠にわり竹のこまかなる所迄、さがし求侍れども、等類のがれがたし。

右、大空をあふぎて、ぼんのくぼに月をかくしたる樣、俳諧躰、誠にかくあるべきにこそ。

五番　菊　秋暮

左

酒ぞ春松かはじめて今日の菊

右

さびしさやつまる所は秋の暮

左、花の春は門松に千代契りて、屠蘇・白散を汲初、桃・菖蒲など云より、菊酒の時節に、春をおもひ出られたる作意、松菊の便彼の淵が文勢も引て入べし。

右も又、秋の暮の淋しさにて、寂滅の心を悟侍るも哀ふかけれど、生敷一盃の菊にはしかじ。

六番　雪　炭

左
松風やひとかたまりに枝の雪
右
つまはづれ炭の梢に花もなし

松の雪を風の一かたまりと、見立られたる作、尤手だれのしはざ、右の句とは雪と炭とのたがひ有にや。しかし炭の梢の花、本意きこえず。日來の愚盲短才つみゆるし給へかし。

十二番句合題

水祝　殘雪　待花　花暮　春郭　公
五月雨　七夕　名月雨　秋木實
時雨　同　霜　火燵　霰歳　暮

一番　水祝　殘雪
左
水いはひ軒端の松や一時雨
右



榮めしより雪間やみせて夕煙

左、水祝を軒端の松によせ侍るは、門餝の松なるべし。時雨て色の常盤なるを、夫婦の中によせて、彼松の情、聟殿とり成し給にやと感心不レ少。右も又、雪の隙より草のはつかに見え初たるけしき、榮飯に見立侍る。尤賞翫すべき義ながら、聊等類の難有之まゝ、以レ左爲勝。

二番　待花
左
まつ内やかはき上戸の枕の花
右
待花ややれとおもへば峰の色

左のかはき上戸は、尨黄坊、樽次などが子孫にや。さもしき心にも花を愛するの躰、猶不レ淺侍れども、耳馴たるやうに覺候。右も又、花待佗て、四方の峯に驚心する有樣深切なれば、峯の色と云所にて、少ぬかりて聞へ侍るまゝ、雪と有度句の樣を、扨こそ、山の端をくくるしら雪　と西上人もながめ給ふとかや。兩句さのみ勝負付がたし。

三番　花暮春

左

花盛四方の芝居や秋の暮

右

上野以來青葉ぞかほる暮春の宿

上野・谷中にうちむれて、花の盛、芝居、物さびたる太夫・坐本の花も紅葉もなき風情、誠に秋の夕暮は理りと覺えて、珍重不レ斜といへども、予が門葉杉風、花つらし花場時　と云句を作り、爰かしこの短尺にも書散し侍れば、等類にひかれ殘念〻。

右は、花の跡とふ春の嵐に匂ひ殘て、華の面影わすれぬも捨がたく、やさしき所も侍るま〻勝とす。されども左の作には少をとり候にや。（「三〇二」に重出）

四番　郭公

左

深山木やこゑのもとじめ杜鵑

右

損也夢又の聲なき子規

深山木のもとじめは、いかなる金持のするわざにやと賴母敷、これぞ初音の山郭公ともいふべきか。



右方大分損したる郭公、暫、云義（いふぎ）なるまじきか。

五番　五月雨

左

須磨の浦庭前にあり五月雨

右

編笠にかびがうきけりさ月雨

五月雨を須磨の浦に見立たる作意、中にも彼浦は淋しき故の名也けりと先珍重。光る君も五月雨のつれ〴〵佗給ふ事、彼物語にも見えたり。

右のかび編笠猶たどらず、心より言葉にいたりて能（よき）俳諧と申べし。熊谷はすの葉等のたてあみ笠、誠當風のすがた是にとゞまり侍る。左右けぢめわかちがたく、能持と定畢。

六番　七夕

左

さぞふき出こよひはらはむ星の水

右

二人ねの袖やなみよけ銀河

左は年にまれなる星の契なれば、瘡の血は紅葉の橋にも染るにやと、興有ておかし。

右、二人寐の星も袖つく水など、よめるためしもおもひ出られながら、ふきでのしたる果、實正に見えて、一句の病なしとや申さん。

七番　月雨

左

燭臺や雨がよび出すこよひの月

右

氣力なき楊枝の先や雨の月

銀燭秋光、月の影にもをさ〳〵をとるまじき、百目がけの蠟燭にや。

右も又、條先動の唐哥を楊枝によせ侍るは、妙觀が刀をもつて、猿屋が手ぎはに削みかける玉柳波の紋、楊柳とや申べき。されどもあかさ闇さを論ずる時、燭臺の光まし侍らむ。

八番　木實　秋暮

左

栗かきや猿がやどりの塵壺の谷

右

かし馬の隙なかりけり秋の暮

塵壺の谷とは、塵壺を谷に見立たるときこえ、句がら何とやら名所を作意していふやうにきこ



え侍る。若つぼの谷などといふ所も有之にや。未さある所は見ざる、きかざるの智惠うすき判者なめり。

又かし馬の隙なきは、お伽咄の哀の送りむかひと見えて、心ふかくいひ殘したる有樣、天晴お馬候

九番　時雨

左

なんにも山殘る松さへ大時雨

右

しぐれけり衣手の森洗濯屋

左、山もあらはにとよめる新古今の詞は、尤ながらさせる作意なし。殊大時雨と云事聞よからず。

右、衣手の森を、時雨に染させたる洗濯屋のはたらき、針の先程も難なく、誠手きゝの仕わざなるべし。織て千秋の唐錦、裁重たる衣手の森とよめるも、彼かゝが夜なべの事をいふにやとおかしく、さかりの大時雨大まけならんとぞ。

十番　時雨

左

しぐれに色童子は松より弱かりけり

右

日〻記や筆にかはらぬ村時雨

此童子は大江山の酒ずきにや。誠珍作、神便奇特歌、鬼をも取ひしぐべき一句の姿、つよき所見え侍るは、綱・金時もはだし。

右、又日〻記の筆かはき兼たるぬれ色も、つや〳〵としほらしく、手まめに書付たる筆の跡、反古になさむは無下の事なれば、兩句しばらく持にて、指置物也。

十一番　火燵　霜

左

うた〻ねや誂の夢置ごたつ

右

かねぞ嵐梢をくゝる霜の色

左、誂の夢珍重ながら、仙風三ッ物發句を先年出し侍れば、是も先作にひかれ候。

右の句、鐘の聲を嵐に送らせ、嵐の色を霜に見たる風景、興なきにもあらず。仍爲ㇾ勝。

十二番　霰　歳暮

左



しのもみや袖に音有玉霰

右

としぞ暮郭公夢いやよ夢

しのもみやといふより、袖に音有とつゞけられたる作意、椋の葉みがきの玉霰、馬瑙・珊瑚も光を失ふべし。

右、年暮の郭公も、昨日こそ早苗取しかとよめる哥の心も籠りて珍しけれ。□□郭公に緣語もとめ度か、其上、下の五文字もぬるくきこえ侍れば、愈以ㇾ左爲ㇾ勝。

前後十八番の句合、やつがれ馬頭(うまつかみ)になりて、物定の博士にさゝれ侍る。十面顔に分別たゝく比とちぎりたるさまか。我ながらかたはらいたけれど、そのかたはらに筆をけがして、かみ・中・下の品をわかち侍るを、たま〳〵にも、うなづく人あれかしとこそ。

坐興庵　桃青

（十八番發句合、全文）

## 第一番

延寶六初冬日

「三〇六」

田舍の句合

左持　露消て富士をはだかに雪肥たり　農夫（ねりまの）

右　菜摘近し白魚を吉野川に放いて見う　野人（かさいの）

先、左の句は、巻頭の一句と見えて、豊にして長高し。未だ初春の體、霞もやらで、ありありと見えたる不二のけしき、雪肥たりと云所奇也。古人春雪瘦タリなど丶作れる便多きにや。

右の句、菜摘と云より吉野川に白魚をわがひたる一興、尤妙なり。山の姿・川の流見所多し。

第二番

左勝　春の水やかろく能書の手を走らす　農夫

右　引かへつ蕪（カブ）をはたのに春の駒　野人

岩間をとぢし苔の下水、さら〳〵と流出る波の文、羲之が石ずり、懐素が自敍帖の筆のわしれるがごとし

右の句論ずるにたらず。

第三番



左持　宿の梅椶（モミ）いかばかり青かつし　農夫

右　青柳に蝙蝠つたふ夕ばへ也　野人

左右の姿詞、此句に止り侍る。彼山谷が烟雨ニ青カツシガ已ニ黄ニナンヌト、作れる梅の詩に似たり。其躰つよくして優有。又柳につたふかはほり、鶯よりも猶興あり。よは〳〵と見えて又つよし。

左は唐繪、右は大和繪、墨繪にしやれて色繪にうるはし。法印も筆を捨、予も又筆をなげうつ。

第四番

左　歸雁米つきも古里やおもふ　農夫

右勝　今案ズルニ寒食の家には自身番　野人

越路にかへる雁がねに、米つき古郷をしたふ。哀深からぬにはあらざれども、寒食の自身番珍し。この日は火の沙汰を忌といへば、批言の批をも忌べき也。

第五番

左持　徳利狂人いたはしや花ゆへに社　農夫

右　櫻狩けふは目黒のしるべせよ　野人

徳利をいだいて、花にたはぶるゝ狂人深切也。又、目黒が原の遠のさくら尤やさし。上野・谷中のさくらを見つくしたる躰、言葉の外にあらはれたり。兩句、幽玄差別なし。

第六番

左　俗にいふうぶめ成べしよぶこ鳥　農夫

右勝　鳶に乘て春を送るに白雲や　野人

喚子鳥、予先年、吟先生にま見えて、此事を尋侍れば、傳受の事、俳諧にせん事無用の由。又うぶめ、李時珍が説に姑獲鳥とかけり。鳥と云字によせて、おもひ出られ候にや。猶批判成がたし。且、

右の句の鳶にのつて無窮の空々たるに逍遙せん事、樂猶窮なかるべしや。



第七番

左　今日にかはる淨瑠璃殿の青簾　農夫

右勝　何と夏羽織縮緬は重し紗は輕し　野人

青簾よく云叶侍れども、夏羽織重からず、かろからず、中庸の中を用ひて然るべきよし、兼才寺の入道前の關白とやらんのせりふにもかゝれたり。仍以、夏羽をり勝と定め侍る。

第八番

左勝　鉦カン〳〵驚破郭公草の戸に　農夫

右　ほと〻ぎす家隆のうそや蓑　野人

草の庵の夜の念佛先殊勝、家隆のうそとは、ほと〻ぎす聲も絶にし垣根より忍びねに鳴きり〳〵す哉　と讀る心にや。誰まことより此うそを用ひんか。されども鐘の音のはるかに聞ゆるを、時鳥に心付たるありさま、猶可ナランや。

第九番

左持　壁の麥葎千年をわらふとかや　農夫

右　摺鉢の早苗穂に出る秋社(こそ)あらめ　野人

壁に生る麥は、朝菌(キン)の晦朔をしらず、冥靈大椿(メイレイタイチン)を論ずるに似たり。又摺鉢の早苗に秋おもふ事、かの、二葉ふくだに荻の上風　とよみ給ふ心もをのづから也。左は虚也。右は實、花實いづれをかとらん。(第九番の句合評「虚實」に重出)

第十番

左　藻の花や海老こす袖にさゞれ波　農夫

右勝　何を音にすぼん(籠)鳴らん五月雨闇　野人

藻のはなのいさぎよきに、小えびの飛ちがふけしき、涼しくしほらし。

右の句は、川越の遠の田中の夕闇に何ぞときけば龜ぞ鳴なる　と聞え侍る。小えびも捨べきにはあらねど、予は龜に乘てあそばむ。

第十一番



左持　むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮さへ　農夫

右　蚊遣り火に夕顔白しだい〳〵は　野人

枝に霜をけと、よまれたる常盤木の綠青〳〵と、うるはしく仕立られたるに、

右、又かやりの烟の中に朗(ホノ)〻見つるゆふがほの白く咲て、軒に干れし橙の色をあらそふも、又おかしくこそ侍らめ。

第十二番

左　石の枕に鮨(スシ)屋ありける今の茶屋　農夫

右勝　芝物の涼しき常夏の卷を見て思ふ　野人

石の枕古歌明也。並木の茶屋の繁榮も、そのひとつやの名殘とや。且芝肴のとりまぜ、彼卷の鮎・石ぶし・御前にて調じさせ給ふ折ふし、思ひやるさへ涼し。

第十三番

左持

袖の露も羽二重氣にはゐぬもの也　　農夫
右
夢となりし骸骨踊る荻の聲　　野人

羽二重の袖の露は、貴人の心に秋至らずと、作れる詩の心を思ひよせられたるにや。
右、また骸骨の荻の聲をかりたる、さもあるべき事ながら、左の感淺からず覺へ侍る。

第十四番
左持
月のさそふ詩の舟か山市か川武か　　農夫
右
さゝで柴の戸泥坊にとがはなし月　　野人

公任卿、哥の舟に乘て、秀歌よみ給ふよし。これは是、山一丸、川武の舟ばたを敲て、いかなる秀歌うたふにや。
右はまた眞木の板戸もさゝずねにけり　などと讀る、月に忘れたる柴の戸のしりざし、咎なし難なし。

第十五番
左持
眺メ送る函谷やけふ驢馬迎　　農夫
右
霧汐烟行德かけて須磨の浦　　野人

函谷關の驢馬、行德の汐燒、眺望いづれも珍重なるべし。

第十六番
左勝
發分限者に成たくば秋の夕昏をも捨よ　　農夫
右
秋の心法師は俗の寐覺かな　　野人

句先、左の句珍重。法師のね覺俗にかへらん事、尤さもあるべきや。兩句辯じがたきに仍て、大福山金德寺の和尚にま見えて問フ。答フ、假にも無常を觀ずることなかれ。一錢を得たらんときは、神のごとく如レ君せよと、仍て右の句閉口ス。

第十七番
右勝
左
砧の町妻吼る犬あはれなり　　農夫

芋をうへて雨を聞風のやどり哉　野人

左の句、里の砧といはんはふるしとて、砧の町と云、つま戀る鹿は不レ珍とて、妻吼る犬と云しは、猶作の中に作有て、聊、作過たるにや。

又、芋の葉に雨をきかんは、誠に冷じく淋しき躰、尤、感心多し。これ孟叔異が雨の題にて、檐聲和レ月落二芭蕉一と作れる氣色に似たり。右勝たるべし。

第十八番

左勝　月日の栗鼠葡萄かつらの甘露有　農夫

右　紀路行山はみかんの吉野かな　野人

鼠をりすと作意して、ぶだう葛の甘露とつゞけり。

右の句は信章子が句に　茶の花や利久が目にはよしの山　と作れるに、聊俤の似かよふにや。強て心を別たん時は、等類の難とも云がたく侍れど、甘露の一滴には、我も前後を忘れたる成べし。（「三〇三」に重出）

第十九番

左　時雨痩松私の物干にと書り　農夫

右勝　凡となりぬ蝸牛の空ヶ貝　野人

和歌三躰に、秋多の哥は細くからびてと云り。痩松の霽もさびしく、蝸牛のうつせ貝もさびたり。されどもかれが角の上にあらそはんときは、右いさゝかまさりなんや。

第二十番

左持　金藏のおのれとうなる也霜の聲　のうふ

右　啼千鳥幾夜あしかの夢おどろく　ヤ人

鐘山のかねぐら、已レとうなり、かよふ衞の鳴聲に、海鹿の夢もおどろくべしとや。兩句目ざむる心地して遽々然たり。

第廿一番

左持　佗に絶て一爐の散茶氣味深し　農夫

右

火燵のうたゝねや夢に眞桑を枕にす　　野人

口切の一句、手づから鑪子を鳴し、茶袋を洗ふ。麈茶淡飯の樂は、いかなる佗助にや。

又、火燵のうたゝねの夢は、列子曰陽氣壯(サカンナルハ)則夢涉二(ニワタッテ)大火一燔焫(ハンセッス)、又藉(シイテ)帶寐(ヌレバ)則夢レ蛇(ヲ)云々。

是を以てこれを思ふに、爐邊のあたゝか成に、瓜を夢見ん事さもありつべし。

第廿二番

左持　雪おもしろ軒の掛菜にみそさゞい　　農夫

右　雪にとへばかれも蘇鐵の女なり　　野人

左の句は、おかしき所に風情を求めて風情あり。適(たまたま)山家のけしきを見るに、此鳥必軒近く啼て、雪の折ふしなどは、一入人家をはなれず。山里の淋しさ、誠におもひ合せたり。

右も又、雪中のそてつの詠(ながめ)、餘情かぎりなく、雪と雪とのあらそひ、いづれも白し。

第廿三番

左勝　詩人ゆるせ松江(スンカウ)の河豚といはんに　　農夫

右　鯖にこりず鰹にこりず雪の饂飩　　野人

金澤のあそび、たのしいかな。けふの薄ゝ暮に網をあげて、狀(カタチ)松江のかとんを得たり。むかしは鱸、今はふぐ、古風は鱸魚を愛して河豚を知らず。

又、右の饂飩奇、さばにあてられ、鰹にえひての上暫ゝ用捨有べし。

第廿四番

左勝　題二山家糠味噌一　　農夫

閑居の糠みそ浮世にくばる納豆はなど

右　寄二貧家之多夜一　　野人

夢猶さむし隣家に蛤を炊(カシ)ぐ音

葉生姜の森の木がらし吹あれて、枯〻なる蓼の林にかくれ、ぬかみそ壺に入て、乾坤を忘れたる隱士の世間寺無用房ヲ笑ふ成べし。

右の句、貧家にして多夜をわぶるの躰、寒苦をふせぐにたらず。尤哀深きといへども、隣家の蛤より、當前のぬかみそを愛せんにはしかじ。

第廿五番

左

町神樂店前の日かげをかつらとし　農夫

右勝

流るゝ年の哀世につくも髪さへ漱捨つ　野人

店前の日蔭を葛とせん事一句云がたし。流るゝ年のあはれ、誠に是を歎美すべし。

栩々齋主桃青漫採レ毫判

（田舍の句合、全文）

註。嵐亭沼助の序は、芭蕉の俳諧論としては關係がないので省いた。出版は延寶八年である。

「三〇七」

常盤屋の句合

第一番

左勝

草すでに八百屋の軒に芳し

右

今引も小松がはらのはたな哉

左の芳草、八百屋の軒に梅をあらそひ、鶯菜にも初音まちたる心地するに、はた野の原の若菜にすがりて、子の日の松を引添たるもめでたく侍れども、先八百屋の草のかうばしきに、心とゞまり侍る。仍以レ左爲レ勝。

第二番

左

はやなりぬ干物の木目もはるに

右勝

花よりも猶目うどの春の紅は（非蜀活）

左、干物の木目も、春に若歸りたるけしき尤ながら、目うどの色のくれなゐ成に、心付たる一作、まことに花よりも匂ひかうばし。

第三番

左持

芹とる翁碧潭に望んでこはいかに

右

防風ゆるく吹て。青酢漸く垂り

碧潭にのぞんで芹とる翁、薄氷をふむかとあやうきに、防風ゆるく吹て、青酢の氷とけ初たるものどけしや。左右のけぢめ、いづれかと筆をかざして、遥成むかふの岨道を見れば、髭むさ

〳〵と生たる老人、早わらびの杖にすがり、忽然と來たり、芹をあなどるべからず。ばうふうをすつべからず。我は是、此山にかくれ住野老先生と云もの也と云て、即うせぬ。

第四番

左持

しほらしき物づくしちよろ木かいわりな（貝割菜）

右

澤苣（チサ）やくさされ草鞋のちぎれより

左の句、しほらしき物の類ヒを集たるは、もし是、新清少納言などが、筆のすさみにやとやさしく、

右も又、澤ちさの蘆芥の中より生出たるけしきも、猶むつかしげならず。兩句共にしほらしくおぼえ侍る。

第五番

左勝

青わさび蟹が爪木の斧の音

右

茗荷たけは生姜の上にたゝん事を



予、日外（いつぞや）かた田舍の老夫の語りしを聞に、わさびうへ置かしこに、必蟹の來てこれを喰ふと。此作者は此事をしるや。しかも其作工にしてかにが爪木の丁々たるひゞき、山更幽也。

右又、茗荷、葉生姜の似たるを以、あらそふといへども、左のわさび感情多し。

第六番

左

櫻蒟蒻いかなる人の何を以櫻

右勝

千大根よめ菜を戀るおとろへは

櫻にあらぬさくらごんにやく、予たはぶれに曰、かれは紅葉豆腐に增れるといはんか。且、一樽の霞の間より、顯れそむるのけしきかとおかしく侍れども、千大根のうき戀にやせほそりて、たとへ其身は一分刻（キザミ）に成とても、此よめ菜の君を社（こそ）と戀つらめ。哀也。深切也。

第七番

左

蜈のり榮螺の洞に潛（ヒソマツ）てけり

右勝

獨活の千年能なし山の杣木かな